

一般財団法人 ライフ・プランニング・センター

年 報 2015

平成27年度
(2015.4~2016.3)
事業報告書

5
(通巻43)

目 次 (2015年度年報)

はしがき	日野原 重明 ...	1
ライフ・プランニング・センターのあゆみ		2
健康教育活動		6
1 ■ 財団設立42周年記念講演会・	6	
2 ■ いのちの授業・	6	
3 ■ 専門職向けセミナー・講座・	7	
4 ■ 厚生労働省後援「がんのリハビリテーション研修」・	9	
5 ■ 厚生労働省後援「新リンパ浮腫研修」・	9	
6 ■ 一般セミナー・	10	
7 ■ ハーベイ教室・	12	
8 ■ 資料・備品の整備・	12	
9 ■ 出版広報活動・	12	
「新老人運動」と「新老人の会」の運営		15
1 ■ 「新老人の会」会則・規約・規定集・	16	
2 ■ 地方支部の設立・	16	
3 ■ 地方支部規約・	17	
4 ■ 「世話人会」の開催・	17	
5 ■ 「拡大世話人会」の開催・	17	
6 ■ 第17回拡大世話人会・	17	
7 ■ 地方支部の運営と活動・	21	
8 ■ 「第9回ジャンボリー」長野大会・	24	
9 ■ 本部主催「新老人の会」八王子フォーラム・	26	
10 ■ 「有志の会」と多摩地区の活動・	27	
11 ■ 本部活動のトピックス・	27	
ヘルスボランティアの育成と活動		31
1 ■ ヘルスボランティアの育成・	31	
2 ■ LPC ボランティア研修会・	31	
3 ■ 血圧測定ボランティアの育成と活動・	31	
4 ■ 模擬患者ボランティアの育成と活動・	32	
カウンセリング―臨床心理・ファミリー相談室		38
1 ■ 個別カウンセリングについて・	38	
2 ■ 企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み・	38	
3 ■ 教育活動・	38	
4 ■ その他の活動（東日本大震災被災者支援）・	39	
LPC 国際フォーラム2015		40
1 ■ A Full-day Narrative Medicine Workshop in Tokyo・	40	
2 ■ より質の高いケアをめざす Next Step・	40	
教育的健康管理の実践（ライフ・プランニング・クリニック）		43
1 ■ クリニックの目指すもの・	43	
2 ■ 診療体制の現状と将来方針・	43	
3 ■ 診療の概要・	45	
4 ■ 各種検査数の推移・	45	
5 ■ 婦人科検診（子宮頸部がん細胞診 [PAP 検査], 子宮体部がん細胞診）・	45	
6 ■ 総合健診（人間ドック）・	47	
7 ■ 集団の健康管理・	48	
8 ■ 健康管理担当者セミナー・	49	
9 ■ クリニックにおける総合健診（人間ドック）の特徴と看護師の役割・	49	
10 ■ 情報管理・	50	
11 ■ 食事栄養相談・	51	
12 ■ 禁煙外来・	51	
13 ■ 学会・研究会・セミナー参加・	51	

ピースハウス病院（ホスピス）	53
1 ■ 休止から再開に至る経緯	53
2 ■ ボランティア活動	53
3 ■ ボランティア登録者	55
ピースハウスホスピス教育研究所	56
1 ■ 活動の全体像	56
2 ■ 活動の実際	57
3 ■ 学会等参加活動	58
4 ■ Asia Pacific Hospice Palliative Care Network (APHN) 活動への参加	59
5 ■ 「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として	59
訪問看護ステーション中井	61
1 ■ 訪問看護について	61
2 ■ 居宅介護支援について	62
3 ■ 研修・地域貢献活動等の実績	63
4 ■ 次年度への展望	63
会 員	64
1 ■ 健康教育サービスセンター会員	64
2 ■ 健康教育サービスセンター団体会員	64
3 ■ 「新老人の会」会員	64
4 ■ 財団維持会員（個人維持会員、団体維持会員）	65
役員・評議員	66
財団報告	67
1 ■ 理事会・評議員会報告	67
2 ■ 寄 附	68
3 ■ ピースハウス友の会	68
4 ■ 第30回 LPC バザー	68
5 ■ LPC 美術展	68
6 ■ ボランティアグループの活動	68

はしがき

理事長 日野原 重 明

一般財団法人ライフ・プランニング・センターは、1973年4月の設立以来2016年3月で43年間の足跡を刻んできたことになります。今日までの財団の行路は、決して順調とばかりいえるものではありませんでした。特に今年度は、ピースハウス病院の一時休止という厳しい事態に対処を迫られました。幸い、公益社団法人地域医療振興協会の協力を得て、2016年4月早々には西立野研二院長のもと、ピースハウスも再開の緒につきました。次年度には新生ピースハウス病院の活動を『年報』にてご報告できることをうれしく思います。ピースハウス病院再開に至るまでには、神奈川県をはじめとした地元の方々からの熱いご支援と、関係各位のご尽力の賜物と深く感謝いたします。そしてそれとともに、いつでも稼働できるようにと休院中も活動を継続されたボランティアのみなさんの思いと、ピースハウス病院が機能していない中でも踏ん張って活動を続けてきた「訪問看護ステーション中井」に応えるべく、懸命に努めていきたいと思えます。

また、当財団発足の地でもありました千代田区平河町の砂防会館の建て替えに伴い、2016年1月4日、健康教育サービスセンター、および「新老人の会」事務局、カウンセリングなどの活動の場が、同区一番町の「一番町進興ビル」に移転いたしました。期の途中で移転であったため若干の影響はありましたが、そのほとんどは大過なく移行することができました。しかし、これまで各種セミナーや健康講座などに活用してきた視聴覚室、また健康教育サービスセンター会員や「新老人の会」会員に供されてきたロビーや図書コーナーなどは、規模を縮小したり、あるいは廃止せざるを得なくなりました。幸い、新事務所も都心の一等地というロケーションのよさもあり、ビル内の会議室や付近の公共施設をうまく利用して、従来通りの活動を継続していきたいと思っています。

「新老人の会」も設立以来15年を迎えました。全国46の地方支部の活動は、それぞれの所在する地方の特色を反映し、支部の主催するフォーラムではどこでも大勢の参加者を得て盛大に開催されています。この力を背景に、活動の基盤となる会員の質と量をどれだけ充実していくことができるかという課題に取り組んでいきたいと思えます。

港区三田の笹川記念会館内に所在するライフ・プランニング・クリニックは2017年度からは日野原記念クリニックという名称のもとで活動することになります。JR山手線の新駅設置に伴って笹川記念会館が改装されるのを機に、クリニックは現在、久代登志男クリニック所長とともに積極的な業容拡大を計画しているところです。

世界は私たちの予測を超えて激しく動いています。そのような時代の中にあって、財団設立時に目指した「人間のいのちを大切にする健康活動」という思いは普遍です。

新しい考えは、頭の中では計画しても、いざ実行となるとその行動力は衰えがちです。私は2016年10月4日には105歳を迎えることになります。私たちに何ができるか、何をすべきかを、2015年度の活動を振り返りつつ、改めて考えてみたいと思えます。

ライフ・プランニング・センターのあゆみ

＊1973年度から2003年度までの年表は『財団法人ライフ・プランニング・センター30年の軌跡－私たちは何を目指して歩んできたか』に詳述しましたので、本年報ではその間のあゆみを略記しました。なお、2011年4月1日より当財団は「一般財団法人ライフ・プランニング・センター」となりました。

年 月 日	事 項
1973 4. 3	「財団法人ライフ・プランニング・センター」が厚生省より公益法人として認可取得
4. 19	「付属診療所アイピーシークリニック」東京都麹町保健所より開設許可取得
1974 4. 20	財団設立1周年記念講演会開催（以降毎年開催）
1975 5. 24	アイピーシークリニックを笹川記念会館に移転
7. 3－5	第1回「医療と教育に関する国際セミナー」を開催（以降1996年まで毎年開催）
10. 1	砂防会館に「健康教育サービスセンター」を開設
12.	機関誌『教育医療』発行開始
1. 22	ホームケアアソシエイト（HCA）養成講座開始（1993年より厚生省ホームヘルパー養成研修2級課程、2000年からは東京都訪問介護員養成研修2級課程資格認定、2013年度より介護サポーター養成講座として実施）
1976 7. 5－16	第1回「国際ワークショップ」を開催（以降毎年開催、1997年より国際セミナーと統合）
9. 20	平塚富士見カントリークラブ内に「フジカントリークリニック」を開設
1977 7. 1	アイピーシークリニックを「ライフ・プランニング・クリニック」と改称
8. 24	第1回「LP会員の集い」を開催（以降毎年開催）
1979 2. 18	第1回「医療におけるPOSシンポジウム」を開催（「日本POS医療学会」として独立）
3. 3	「たばこをやめよう会」スタート
1980 2. 2	米国で開発されたハーベイシミュレーターを日本で初めて設置、心音教育プログラムスタート（1999年5月に新しいハーベイシミュレーターを設置）
1981 9. 10	血圧測定師範コースを開講
1982 4. 1	「医療におけるボランティアの育成指導」事業開始
1983 11. 7	WHO事務総長ハーフダン・マラー博士を招聘、「生命・保健・医療シンポジウム」を開催
1984 3. 1	笹川記念会館10階に「LP健康教育センター」を新設、運動療法の指導を開始
1985 12. 1	「ピースハウス（ホスピス）準備室」を設置
1986 2. 5	第1回「ボランティア総会」開催
1987 10. 1	笹川記念会館の11階を拡張し、10階の「LP健康教育センター」を移転
1989 4. 20	ピースハウス後援会解散、募金2億5,989万円をピースハウス建設資金として財団が継承
1991 9. 15	神奈川県中井町にピースハウス建設予定地約2,000坪の賃貸借契約締結
1992 2. 3	神奈川県医療審議会、ピースハウス建設を了承
3. 31	ピースハウス開設にかかわる寄付行為を改正、厚生省の認可取得
6. 24	ピースハウス病院、神奈川県の開設許可取得
11. 2	ピースハウス病院、建築確認取得・着工
1993 4. 19	ライフ・プランニング・クリニック、新コンピュータシステムテストラン開始、5月6日、本稼働開始
5. 15	財団設立20周年記念講演会「心とからだの健康問題のカギ」をシェーンバッハ砂防で開催
8. 27	「ピースハウス病院」竣工式
9. 23	ピースハウス病院開院式および財団創立20周年記念式典をピースハウス病院で開催
12. 28－30	第1回ホスピス国際ワークショップ「末期癌患者の疼痛緩和および症状のコントロール」をピースハウスホスピス教育研究所で開催（以降毎年開催）
1994 1. 18	財団創立20周年記念職員祝賀会を笹川記念会館で開催
2. 1	ピースハウス病院、厚生省より緩和ケア病棟認可、神奈川県より基準看護、基準給食、基準寝具承認取得
4. 16	第20回財団設立記念講演会「人間理解とコミュニケーション」をシェーンバッハ砂防で開催
9. 23	ピースハウス病院開院1周年記念式典開催
1995 3. 3－5	第1回「アジア・太平洋地域ホスピス連絡協議会」を国際連合大学で開催
5. 13	第21回財団設立記念講演会「患者は医療者から何を学び、医療者は患者から何を学ぶべきか」をシェーンバッハ砂防で開催
1996 5. 18	第22回財団設立記念講演会「医療と福祉の接点」をシェーンバッハ砂防で開催
1997 5. 17	第23回財団設立記念講演会「今日を鮮かに生きぬく」を聖路加看護大学で開催
11. 13	砂防会館内に「訪問看護ステーション千代田」を開設
1998 5. 16	第24回財団設立記念講演会「私たちが伝えたいこと、遺したいこと」を千代田区公会堂で開催
1999 4. 1	神奈川県足柄上郡中井町に「訪問看護ステーション中井」を開設

年 月 日	事 項
5. 15	第25回財団設立記念講演会「老いの季節…魂の輝きのとき」を千代田区公会堂で開催
8. 21	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 長崎1999」を長崎ブリックホールで笹川医学医療研究財団と共催
2000 5. 20	第26回財団設立記念講演会「明日をつくる介護」を千代田区公会堂で開催
9. 24	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 香川2000」を高松市民会館で笹川医学医療研究財団と共催
9. 30	「新老人の会」発足。発足記念講演会「輝きのある人生をどのようにして獲得するか」を聖路加看護大学で開催
10. 17	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 静岡2000」を浜名湖競艇場で笹川医学医療研究財団と共催
2001 2. 23	厚生労働省から評議員会の設置が認可された評議員会設置等に係る寄附行為変更について、厚生労働省の認可を取得
5. 19	第27回財団設立記念講演会「伝えたい日本人の文化と心」を千代田区公会堂で開催
8. 9	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 三重2001-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を津競艇場「ツッキードーム」で笹川医学医療研究財団と共催
8. 18-19	音楽劇「2001フレディーいのちの旅-」東京公演を五反田ゆうぽうとで開催
8. 22	音楽劇「2001フレディーいのちの旅-」大阪公演を大阪フェスティバルホールで開催
10. 7	日本財団主催ホスピスセミナー「memento mori 宮城2001-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を仙台国際センターで笹川医学医療研究財団と共催
10. 8	「新老人の会」設立1周年フォーラム「『いのち』を謳う」を千代田区公会堂で開催
2002 6. 2	日本財団主催セミナー「memento mori 北海道2002-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を旭川市民文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
6. 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島2002-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を宮島競艇場イベントホールで笹川医学医療研究財団と共催
6. 29	第28回財団設立記念講演会「いのちを語る-生と死をささえて語り継ぎたいもの」を千代田区公会堂で開催
9. 29	「新老人の会」設立2周年フォーラム「何をめざし、何をすべきか」「眠れる遺伝子を目覚めさせる」を千代田区公会堂で開催
2003 3. 31	「フジカントリークリニック」を閉鎖
6. 7	ホスピスセミナー「memento mori 島根-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を松江市総合文化センターで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
6. 11	財団設立30周年記念講演会「魂の健康・からだの健康」並びに30周年記念式典・感謝会を笹川記念会館で開催
7. 6	ホスピスセミナー「memento mori 埼玉-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を戸田競艇場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
8. 9-10	LPC 国際フォーラム「高齢者医療の新しい展開-健康の維持、増進から終末期医療まで-」を聖路加看護大学で開催
8. 31	ホスピスセミナー「memento mori 富山-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を富山国際会議場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
9. 13	「新老人の会」設立3周年フォーラム「21世紀を「いのちの時代」へ」を千代田区公会堂で開催
9. 20	ホスピスセミナー「memento mori 山口-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を下関競艇場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 5	ピースハウスホスピス開設10周年記念講演会をラディアン（二宮町生涯学習センター）で開催
10. 12	第1回全国模擬患者学研究大会を聖路加看護大学で開催
2004 2. 14-15	第11回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア：その実践と教育-ニュージーランドとの交流-」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 29	第31回財団設立記念講演会「心に響く日本の言葉と音楽」を千代田区公会堂で開催
6. 19	セミナー「memento mori 青森-『死』をみつめ、『今』を生きる-」をば・る・るプラザ青森で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
7. 4	セミナー「memento mori 福岡-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を若松競艇場で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
8. 28-29	LPC 国際フォーラム「ナースによるフィジカルアセスメントの実践」を聖路加看護大学で開催
9. 11	第2回全国模擬患者学研究大会を聖路加看護大学で開催
9. 19	セミナー「memento mori 滋賀-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を滋賀会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 30	セミナー「memento mori 新潟-『死』をみつめ、『今』を生きる-」を新潟テルサで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
11. 16	「新老人の会」設立4周年秋季特別フォーラムを赤坂区民センターで開催
2005 2. 11-12	第12回ホスピス国際ワークショップをピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 8	第32回財団設立記念講演会「今こそいのちの問題を考えよう」を銀座プロッサム（中央会館）で開催

年 月 日	事 項
6. 26	セミナー「memento mori 福井－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を福井県民会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
7. 23	セミナー「memento mori 宮崎－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を宮崎市民プラザで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
8. 6	LPC 国際フォーラム・全国模擬患者研究大会合同企画「医学・看護教育における模擬患者の活用」を聖路加看護大学で開催
9. 17	セミナー「memento mori 徳島－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を鳴門市文化会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 9	セミナー「memento mori 山梨－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を山梨県民文化ホールで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 15	「新老人の会」設立5周年フォーラムを銀座プロッサム（中央会館）で開催
2006 2. 4－5	第13回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケアの可能性－特別な場所・対象を越えて－」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 27	第33回財団設立記念講演会「私たちが、いま呼びかけるおとなから子供たちへ－いのちの循環へのメッセージ」を銀座プロッサム（中央会館）で開催
6. 17	セミナー「memento mori 岩手－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を岩手教育会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
7. 8－9	LPC 国際フォーラム「マックマスター大学に学ぶ医師、看護師、医療従事者のための臨床実践能力の教育方略と評価」を女性と仕事の未来館ホールで開催
7. 22	セミナー「memento mori 岡山－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を倉敷市児島文化センターで日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
9. 23	セミナー「memento mori 兵庫－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を兵庫県看護協会で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 7	セミナー「memento mori 栃木－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を栃木県教育会館で日本財団、笹川医学医療研究財団と共催
10. 22	「新老人の会」設立6周年フォーラムをシェーンバッハ砂防で開催
2007 2. 3－4	第14回ホスピス国際ワークショップ「エンド・オブ・ライフケアと尊厳」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
3. 22	「ホスピスデイケアセンター」竣工式
4. 22	日本財団主催セミナー「memento mori 広島－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を広島エリザベト音楽大学セリアホールで笹川医学医療研究財団、「新老人の会」山陽支部、広島女学院、シュバイツァー日本友の会と共催
6. 2	第34回財団設立記念講演会「いのちの語らい－生かされて今を生きる」を日本財団主催セミナー「memento mori 東京」を兼ねて東京国際フォーラムC会場で笹川医学医療研究財団と共催
6. 16	日本財団主催セミナー「memento mori 埼玉－『今』を生きる～いのちを学び、いのちを伝える～」を秩父市歴史文化伝承館で笹川医学医療研究財団と共催
7. 18－19	「新老人の会・あがたの森ジャンボリー（第1回）」を松本市で開催
7. 21	日本財団主催セミナー「memento mori 石川－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を金沢市文化ホールで笹川医学医療研究財団と共催
8. 10－11	LPC 国際フォーラム「いのちの畏敬と生命倫理－医療・看護の現場で求められるもの－」を女性と仕事の未来館で開催
10. 14	日本財団主催セミナー「memento mori 秋田－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を秋田市文化会館で笹川医学医療研究財団と共催
11. 11	「新老人の会」設立7周年フォーラムをシェーンバッハ砂防で開催
2008 2. 2－3	第15回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケア：東洋と西洋の対話－スピリチュアリティと倫理に焦点をあてて－」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 11	日本財団主催セミナー「memento mori 鳥取－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を鳥取市民会館で笹川医学医療研究財団と共催
5. 31	第35回財団設立記念講演会「豊かに老いを生きる」を笹川記念会館国際会議場で開催
7. 4－5	「新老人の会」第2回ジャンボリー静岡大会「新老人が若い人とどう手をつなぐか」を浜松市で開催
8. 2－3	LPC 国際フォーラム「終末期医療の倫理問題にどう取り組むか－看護・介護・医療における QOL－」を女性と仕事の未来館で開催
10. 12	日本財団主催セミナー「memento mori 長崎－『死』をみつめ、『今』を生きる－」を長崎・浦上天主堂で笹川医学医療研究財団と共催
10. 18	「新老人の会」設立8周年フォーラム「共に力を合わせて生きるために」をシェーンバッハ砂防で開催
2009 2. 7－8	第16回ホスピス国際ワークショップ「エンド・オブ・ライフ（終末期）ケアの実践」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5.	ライフ・プランニング・クリニック X 線デジタル化工事

年 月 日	事 項
5. 16	第36回財団設立記念講演会「しあわせを感じる生き方ー幸福の回路をつくるー」を笹川記念会館国際会議場で開催
7. 4ー5	LPC 国際フォーラム「終末期医療・介護の問題にどう取り組むかー高齢者の終生期における緩和ケアへの新しいアプローチー」を聖路加看護大学ホールで開催
7. 9ー10	「新老人の会」第3回ジャンボリー広島大会「平和へのメッセージ」を広島市で開催
10. 2	「新老人の会」9周年記念講演会「次の世代に何を残すか」をシェーンバッハ砂防で開催
12.	ピースハウス病院大規模修繕工事（～2010. 2）
2010 2. 6ー7	第17回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケアにおける全体論ー人間性の複雑さに注目してー」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
4. 1	「ピースクリニック中井」をピースハウス病院内に開設
5. 9	第37回財団設立記念講演会「それぞれの生きがい論」を笹川記念会館国際会議場で開催
7. 17ー18	LPC 国際フォーラム「高齢者医療における緩和ケアー脆弱高齢者に対する質の高い医療の実現へ向けてー」を女性と仕事の未来館で開催
9. 3ー4	「新老人の会」第4回ジャンボリーと10周年記念講演会「クレッシェンドに生きようー日野原流の生き方ー」を九段会館で開催
2011 2. 5ー6	第18回ホスピス国際ワークショップ「ホスピス緩和ケアの提供とケアを提供する人々ー英国・カナダ・日本の交流ー」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
3. 11	「東日本大震災」被災者支援のために2011年8月末まで救援募金を呼びかけ、日本財団の「東日本大震災支援募金」に協力
4. 1	内閣府より一般財団法人への移行認可を受け「一般財団法人ライフ・プランニング・センター」となる。
5. 21	第38回財団設立記念講演会「想いをつなぐ生きかた」を笹川記念会館国際会議場で開催
7. 9ー10	LPC 国際フォーラム「がん医療 The Next Stepー自分らしく生きるためのがんサバイバーシップの理解とわが国における展開ー」を聖路加看護大学ホールで開催
10. 16	「新老人の会」第5回ジャンボリー三重大会（日野原会長百歳記念ジャンボリー）「夢を天空に描くー新たな日本の再生と創造ー」を三重県営サンアリーナで開催
2012 2. 4ー5	第19回ホスピス国際ワークショップ「喪失と悲嘆ー喪失の悲しみ、苦難を越えてー」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 19	第39回財団設立記念講演会「いのち つなげる いのち つながる」を 笹川記念会館国際会議場で開催
7. 14ー15	LPC 国際フォーラム「がん医療 The Next Stepーがん医療にサポーターケアの導入をー」を聖路加看護大学で開催
10. 27	「新老人の会」第6回ジャンボリー山口大会「永遠の平和を求めてー新老人のミッションー」を山口市民会館で開催
2013 2. 2ー3	第20回ホスピス国際ワークショップ「なぜ そうするのか？ー緩和ケアにおける倫理とコミュニケーションー」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
5. 25	第40回財団設立40周年記念講演会「よく生きること 創めること」を笹川記念会館国際会議場で開催
7. 13ー14	LPC 国際フォーラム2013「より質の高い高齢者医療の実現を目指して」を聖路加看護大学で開催
10. 25	「新老人の会」第7回ジャンボリー愛媛大会「日本から世界に平和を発信しよう」をひめぎんホールで開催
2014 5. 17	2014年財団設立41周年記念講演会「幸福な生き方の見つけかた」を笹川記念会館国際会議場で開催
6. 30	「訪問看護ステーション千代田」廃止
7. 5	LPC 国際フォーラム2014「多様性時代の医療コミュニケーションー医療者と患者の新しい信頼関係をつくるー」を聖路加看護大学で開催
8. 28	健康教育サービスセンター事務室を訪問看護ステーション千代田の跡に移転
9. 14	「新老人の会」第8回ジャンボリー宮城大会「支え合い共に生きるー東日本大震災から得たものー」を仙台プラザで開催
2015 2. 7ー8	第22回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケア 続ける力 成長する力」をピースハウスホスピス教育研究所で開催
3. 31	「ピースクリニック中井」廃止 「ピースハウス病院」病棟休止
4. 7	「新老人の会」第9回ジャンボリー長野大会「平和と命こそ」を長野ビッグハットアリーナで開催
5. 1	「ピースハウス病院」休止
5. 23	2015年財団設立42周年記念講演会「いのちと私たちの生き方」を笹川記念会館国際会議場で開催
8. 8ー9	LPC 国際フォーラム2015「医療と対人援助におけるナラティブ・アプローチー語りから紡ぐ援助の関係性を学ぶー」を聖路加国際大学で開催
2016 1. 4	健康教育サービスセンター、千代田区一番町進興ビルに移転し業務を開始
2. 27ー28	第23回ホスピス国際ワークショップ「緩和ケアの再考と新たな挑戦ー英国・香港・日本の交流」をピースハウスホスピス教育研究所で開催

健康教育活動

健康教育サービスセンター 所在地：東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階

今では一般的になった血圧の測定（「血圧の自己測定」）、患者役を演じるボランティア（「模擬患者」）、病院でのボランティア（「医療ボランティア」）、一般の方が介護を専門的に学ぶ（「家庭婦人のための看護学講座」）、医学教育にシミュレーションを導入（「心音シミュレーション」）、病後早期からのリハビリ介入（「心臓病リハビリテーション」）、問題志向型看護記録のわが国への紹介（「POSによる診療記録」）、成人病の名称変更への提言（「生活習慣病」）、近代ホスピスのわが国での普及（「ホスピス運動」）、超高齢社会に向けての生き方提言（「新老人運動」）等々。これらは当財団が1973年に東京都千代田区の砂防会館内に健康教育サービスセンターを開設して以来、日野原重明理事長のリーダーシップの下で40年余の活動の中で社会に提言してきたものである。

活動の基盤であった砂防会館が老朽化による建て替えが決まり、59年の歴史を閉じることに伴い、健康教育サービスセンターは2016年1月に同じく千代田区一番町の一番町進興ビル1階に事務所機能を移転した。今後も進興ビル内に設備されている会議室や公共ホールなどを用いながら、以前と変わらない活動を行っていく所存である。

また、2016年1月号からLPC機関紙の『教育医療』誌と『新老人の会』の会報を統合し、全ページカラーの機関誌『ライフ・プランニング・センター』として紙面を一新した。

わが国も少子高齢社会に対応して医療費負担を軽減すべく、2025年を目途に住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるようにと「地域包括ケアシステム」の推進を目指しており、新老人運動や健康教育を通して当財団が推進してきた活動——年齢や病気にとらわれない生き方への提言やその実践活動——はますます意味をもつものであると考えている。

以下に2015年度の健康教育サービスセンターにおける取り組みについて報告する。

1 財団設立42周年記念講演会

日時 2014年5月23日（土） 13:00-17:00

会場 笹川記念会館ホール（港区三田）

参加者 950名

テーマ いのちと 私たちの生きかた



●「にじいろメロディーズ」に囲まれた細谷先生と日野原先生

プログラム

講演1

いのちのつかいかた—いくつもの時代をのりこえて—

日野原重明理事長

講演2

今、生きるということ

聖路加国際病院顧問 細谷亮太先生

合唱 混声合唱「川」「大空と大地の中で」

児童合唱「地球をつつむ歌声」

混声合唱「BELIEVE」

今回は聖路加国際病院の顧問で小児科医師の細谷亮太先生を講演者に迎えて開催された。長年小児がんの子どもの治療に寄り添いながら、自身も時には深く落ち込み涙し、患児の小康状態が続いた時はつかの間の幸せを分かち合いながら子供たちと生きてきたと語られ、医師としてまた人としての成長の過程を振り返る講演をされた。

講演後の合唱では、細谷先生が関わってきた小児がんの子どもたちのキャンプの様子を追ったドキュメント映画「風のかたち」の主題歌や、日野原理事長が作詞された平成27年度のNHK全国合唱コンクール小学校の部課題曲「地球をつつむ歌声」も披露され、会場を感動に巻き込んだフィナーレとなった。

2 いのちの授業

本年度は3月1日に青山学院初等部4年生60名に日野

原重明理事長が聖路加国際病院の救急部・救命救急センター部長の石松伸一先生と共に授業を行った。

3 専門職向けセミナー・講座

1) 看護連続講座10回シリーズ

「臨床現場ですぐに役立つナースのためのフィジカルアセスメント」

日野原重明理事長は30年前に、これからのナースに必要なのはフィジカルアセスメント能力であり、ナースがもっと積極的に診断に参加すべきであると提唱された。しかし、ナースの教育にフィジカルアセスメントが取り入れられるようになったのは1980年代に入り、在宅医療や臨床現場でナース独自の判断を専門家として問われるようになってからである。在宅医療の現場ではナースは主治医や介護者、家族などとチームを組んでケアに当たり、患者の病態の変化に臨機応変に対応しなければならない。フィジカルアセスメント能力はインタビュー、身体所見などから得られた情報を統合して分析査定する知識と技術であり、そのようなフィジカルアセスメントに基づくナースの判断能力は患者によりよいケアを提供するためには不可欠である。

健康教育サービスセンターでは、1996年にナースのフィジカルアセスメント能力の向上を目標に、訪問看護に携わるナースや臨床ナースを対象にした「在宅ケアに必要なフィジカルアセスメントとケアの実際」と題して18時からの講座を7年間継続した。開講当初はナースのための継続教育が行われているところも少なく、受講生も多く集まったが、近年は日本看護協会などが様々な教育プログラムを提供しはじめたことにより、徐々に当センターの講座への参加者は減少してきた。そこで、①疾患中心

の講義から、症候中心の講義にする、②体験的学習ができるように前半を講義、後半を実習にする、③開催を夜間ではなく土曜日に行う、などと組み立て直し、タイトルも新しく「基礎から学ぶフィジカルアセスメント」として土曜日の昼間に開講することにした。

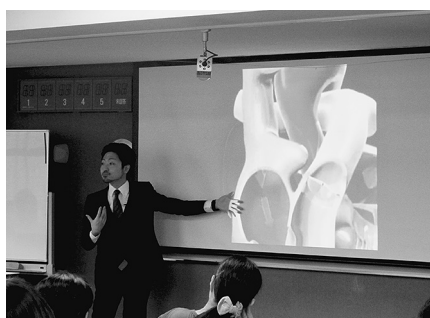
今年度も徳田安春先生にセミナー全体のプロデュースをお願いし、『臨床現場ですぐに役立つナースのためのフィジカルアセスメント10回シリーズ』として土曜の午後3時間の講座を10回にわたって開催した。

どの講座も実践にすぐに役立つ「全身外観」「視診」「聴診」「打診」などの診断法の基礎、看護師として緊急対応が必要か否かを決めるナースとしての判断に必要な知識と技術について講義をしていただいた。講師陣は徳田安春先生に推薦していただき、臨床の第一線で活躍中の医師にお願いした。どの講師も研修医の教育に当たっている経験を生かした独自の資料を用意するなど、熱心に講義していただいた。

講座の定員は50名と設定したが、受講者には昨年度のリピーターが17名、キャンセル待ちの方5名が加わった。東京のほか千葉、神奈川、埼玉など東京近郊に加え、岩手、長野、静岡、大阪、京都、岡山など遠隔地からの参加者もあった。また、ナースの他に、研修医、大学看護教員、作業療法士、養護教員の参加もあった。

今年度は新しく「全身の外観と重症度評価」「フィジカル実技（視診・打診・触診・聴診の診察）」など実習を多く取り入れた。

受講生からは「技術を使いこなせるようになると、もっとたくさんのがわかり、それがよい仕事につながるということを実感しました。参加型で、これまで学んだことを体験することができて、たいへん参考になりました。すぐに現場で生かしていきたい」と好評であった。



●「フィジカルアセスメント講座」より

左から、「循環器系の診かた」水野篤先生、「呼吸器系の診かた」皿谷健先生、「関節・筋・骨格の診かた」岸本暢将先生

●第1回	循環器系の診かた
講 師	水野 篤 聖路加国際病院循環器内科
日 時	5月16日(土) 13:00-16:00
受講者	50名
●第2回	呼吸器系の診かた
講 師	皿谷 健 杏林大学病院呼吸器内科講師
日 時	6月6日(土) 13:00-16:00
受講者	56名
●第3回	神経系の診かた
講 師	塩尻 俊明 総合病院国保旭中央病院総合心療内科
日 時	7月18日(土) 13:00-16:00
受講者	44名
●第4回	認知・精神症状の診かた
講 師	金井 貴夫 筑波大学附属病院実と地域医療教育センター・水戸協同病院総合診療科科長
日 時	8月15日(土) 13:00-16:00
受講者	45名
●第5回	関節・筋・骨格の診かた
講 師	岸本 暢将 聖路加国際病院アレルギー膠原病科
日 時	9月26日(土) 13:00-16:00
受講者	42名
●第6回	皮膚の診かた
講 師	衛藤 光 聖路加国際病院皮膚科部長
日 時	10月24日(土) 13:00-16:00
受講者	36名
●第7回	発熱患者の診かた
講 師	本郷 偉元 武蔵野赤十字病院感染症科副部長
日 時	11月14日(土) 13:00-16:00
受講者	36名
●第8回	腹部の診かた
講 師	和足 孝之 Mahidol University, Faculty of Tropical Medicine
日 時	2016年1月16日(土) 13:00-16:00
受講者	36名
●第9回	問診・全身外観・バイタルサインの実技
講 師	徳田 安春 筑波大学客員教授, JCHO(地域医療機能推進機構)本部顧問
日 時	2月20日(土) 13:00-16:00
受講者	37名
●第10回	視診・打診・触診・聴診の実技
講 師	徳田 安春 筑波大学客員教授, JCHO(地域医療機能推進機構)本部顧問
日 時	3月12日(土) 13:00-16:00
受講者	40名

2) 多職種医療者のための実践心音聴診訓練初級 1 日コース研修

講 師 道場 信孝 LPC 顧問

日 時 2015年11月21日(土) 10:00~12:00
13:00~17:00

対 象 研修医, 看護師, 心臓超音波検査技師

受講者 48名

心疾患患者への対応において聴診と心臓超音波検査は非侵襲性に行われる最も有用な初期診断の手法となっているが、実際の臨床現場において超音波検査を行う検査技師が検査時にあらかじめ心臓を聴診するという習慣はこれまではなかった。しかし、これからは技師が聴診の技術を習得することで心臓病の病態への理解を深め、本来の超音波技法のスキルをさらに高めていくことが求められる。

これを受けて、これから心臓の聴診技術を習得するプロフェッショナルとしての初期研修医, 看護師, そして心臓超音波検査技師の方々を対象として心音シミュレーターを用いて心臓聴診の技術を訓練する以下の項目からなるプログラムを企画実施した。

1. Stethoscopy (聴診法) と Cardioscopy (心臓超音波法)
2. 心音の発生
3. 音の性質と聴覚
4. 聴力曲線と心音成分との関係
5. 聴診器の理解
6. ベル型と膜型聴診器の周波数特性
7. 心臓の電気現象
8. 心内現象と心音発生との関係
9. 聴診の技術
10. 正常心音と過剰心音・心雑音

当施設の訓練装置を用いての研修としてはこれで最後となる研修であったが、5時間をかけての充実した内容に受講生からは高い評価をいただいた。



●多職種医療者のための実践心音聴診訓練

4

厚生労働省後援
「がんのリハビリテーション研修」

「がんのリハビリテーション研修」は開始より8年目になったが、2014年度より新たに厚生労働省後援研修として、ライフ・プランニング・センターが主催する研修会としてスタートを切った。

本研修はがんのリハビリテーションの普及とがんチーム医療の中での取り組みを目指すために、48時間の研修中に最新のがん治療やリハビリテーションの知識を学ぶための講義にあわせ、グループワーク、チームカンファレンス、グループディスカッション、職種別交流など、参加病院ごと（医師・看護師・リハスタッフからなる4名）のチームワーキング研修が行われるのが特色である。平成22年より保険収載にかかわる施設要件の研修として認められたことから、毎回応募者は定員を超える状況が続いている。

応募者すべてを受け入れられない状況が続いたことから、2012年度からは、当研修と同様の質と内容を伴う研修を各都道府県で実施してもらうための企画者研修を当研修活動の一環として実施され、全国ほとんどの都道府県がこの研修を修了した。昨年度からは本格的に企画者研修修了生による研修会が各都道府県で開催されている。

当財団主催の研修会は、2015年度10回（受講者総数2,200名）実施された。



●がんのリハビリテーション研修

5

厚生労働省後援「新リンパ浮腫研修」

がん治療後の続発性リンパ浮腫は、全リンパ浮腫患者の約80～90%を占めているが、病態を十分に理解して発症早期から適切な生活指導・治療を行えば、それ以上の悪化を防止することができ、進行例であっても浮腫を改善させることが可能であることも知られている。しかしこれまでは一貫した専門教育は十分に行われていなかった。

当研修ではリンパ浮腫の全体像を理解し、診断から治療計画立案まで行える医療スタッフを育成するために、リンパ浮腫の診療に携わる医療専門職を対象に研修会を実施した。

取り扱われた内容は、リンパ浮腫の病態生理や診断方法、治療法に関する理解、治療効果の判定方法、リンパ浮腫外来の運営方法等、職種や立場に応じたさまざまな知識や技能など国際教育基準に準じた内容であった。

研修実施日

●第1回

日程 Step 1 8月29日・30日

Step 2 10月17日・18日

会場 Learning Square 新橋

参加者 230名

●第2回

日程 Step 1 2月6日・7日

Step 2 3月12日・13日

会場 明治大学中野校ホール

参加者 327名



●新リンパ浮腫研修

1) 超高齢社会におけるヘルス・デザイン

- 第1回 認知症への備え－高齢者の尊厳を支えるこれからの介護サービス

講 師 山梨 恵子 ニッセイ基礎研究所

日 時 5月13日(水) 10:00-12:00

受講者 39名

- 第2回 高齢者とフレイル（脆弱化）について

講 師 道場 信孝 ライフ・プランニング・センター

日 時 5月13日(水) 13:00-15:00

受講者 41名

- 第3回 健康をきめる力－ヘルスリテラシーとは

講 師 中山 和弘 聖路加国際大学教授

日 時 5月20日(水) 10:00-12:00

受講者 42名

- 第4回 高齢者医療の課題と自己決定・意思表示のとりえ方

講 師 会田 薫子 東京大学大学院

日 時 5月20日(水) 13:00-15:00

受講者 41名

会場はいずれも健康教育サービスセンター

健康寿命を延ばしながら地域で生きていく。自分らしく生きるために自らの人生をデザインしていくことが必要となる時代が本格的に始まった今、広く社会と繋がることはいっそう重要になってきたといえる。今回の講座は社会、医療、保健、死生学の各分野から第一線で活躍される講師をお招きし、これからのヘルスデザインについて参加者と学ぶ機会をもった。山梨恵子先生は介護を支えるさまざまな資源を紹介され、その方が人生の歩みの中で築いてこられた暮らしを尊重した支援の重要性を話された。道場信孝先生は高齢者の脆弱化の問題を10年に渡る新老人の調査により得たエビデンスをもとに話され、中山和弘先生はヘルスリテラシー（健康情報の入手、理解、評価、活用する能力）の観点から高齢者の生存率を推測できることなど新しい知見を解説された。会田薫子先生はインフォームド・コンセント、事前指示、生命維持治療に関する医師の指示書、事前ケア計画、ナラティブ・メディスン等、これからの自己決定に必要なトピックスを国内外の事例を交えてきめ細かく解説された。

2) 介護サポーター養成講座

「ヘルパー2級養成研修講座」は2013年度で幕を閉じ、一昨年度から資格に関係なく介護について学習の場を提供していくことを目的として「介護サポーター養成講座」を開始した。

プログラムは、昨年度と同様、「介護基本コース」と「介護実践コース」で構成した（表参照）。

基本コースは「知識編」とし、今年度は特に認知症について病状の理解とケアに2回の講義を設けた。また、高齢者を地域で支える在宅介護を先駆的に実践している「暮らしの保健室」の取り組みを紹介し、介護者としてまた一般市民としても必要な知識が学べるように工夫した。

「実践コース」では、身体に負担のかからない動かし方、歩行、車いすの介助の留意点、体位交換、衣類の着脱、身体の清潔、食事の介助等、介護者に必須の介護技術を理学療法士や看護師から学んだ。また、昨年度に続き視覚障害者の歩行等の介助、ガイドヘルプの基本技術の練習、目隠しをして手引きされる体験もした。

参加者は延べ212名、40代から80代まで、男性3名、女性26名の合計29名、平均年齢は61.3歳であった。老若男女が介護について一緒に学びを行える場が提供できた。



●介護サポーター養成講座

上：移動の介助、下：視覚障害者の歩行介助

●介護サポーター養成講座／介護基本コース

回	日	時 間	内 容	講 師
1	6月3日	10:00-12:30	家族のための医療講座	和田 忠志
2	6月3日	13:30-15:30	高齢者を取り巻く環境と地域で支える在宅介護	秋山 正子
3	6月10日	10:00-12:00	認知症とうつの予防	高橋 理
4	6月10日	13:00-15:00	その人を中心として考える認知症ケア	村田 康子
5	6月17日	10:00-12:00	機能回復と廃用予防におけるリハビリテーション	小山 照幸
6	6月17日	13:00-15:30	快適な住宅環境整備	志垣健一郎

介護実践コース

回	日	時 間	内 容	講 師
1	7月1日	10:00-12:00	やさしい体の動かし方	志垣健一郎
2	7月1日	13:00-15:00	移動の介護・福祉用具の活用法	志垣健一郎
3	7月8日	10:00-12:00	歩行の機能とその障害に対応するための介助	田中 一秀
4	7月8日	13:00-15:30	視覚障害者の歩行等の介助	
5	7月15日	10:00-12:00	食事の介助・口腔ケア	上野まき子
6	7月15日	13:00-16:00	尿失禁と排泄の援助	安部 静枝

3) 50歳からの死生学3回シリーズ

「今、考える社会・宗教・人生と生き方と最期の迎え方」

講 師 島 蘭 進 上智大学教授・上智大学グリーンフェア
研究所所長

●第1回 社会から考える

天災・疾病・貧困・紛争など社会現象に私たちの人生はどのように影響を受け、それを受け止めて生きていくのか

日 時 10月14日(水) 13:30-15:45

参加者 41名

●第2回 宗教から考える

現代人にとって宗教とは、信じること、託すことの意味を考える

日 時 10月28日(水) 13:30-15:45

参加者 27名

●第3回 人生から考える

人生を振り返り、生き方について考える。日本におけるスピリチュアルケアの在り方とは。

日 時 11月4日(水) 13:30-15:45

参加者 33名

会場はいずれも健康教育サービスセンター

死生学は新しい学問体系であり、その背景と成立した経過を考えると、脳死を人の死と判定して行われる臓器移植や、母体の血液検査でダウン症を診断するなど、近代合理主義に基づく医療の進歩が著しいこと。医療においても、医師は患者の予後の告知はするが、その後の患者の心の悩みには応えてくれない。ここに至って死生の文化の喪失を感じ、生命倫理の視点からも問題提起がさ

れてきた。講師の島蘭先生は1回目の講座でこう語りかけ、その後の講座では死と生の問題を宗教と社会文化の2つのテーマよりお話し下さった。仏教においては喪失と悲しみを受け入れ無常を知り、自らの心を見つめて悟りに向かい、そこから更に生きることの意義を見直すという姿勢を教えてくれる。また長い時代を経た文化、文芸の世界を通して死生観を考えると「大きな、全体的な」別れというところに注目できる。「私の死」はこの世との別れであるが、個人の死後も世界は存在し続け、この世に別れを告げた自分は、宇宙の霊に返って、永遠の休息に入るだけと考えられる。これも一つの解釈でしかなく、生死観を考える上で大切なものが他にも多くあるはずである。私たちは一生を通してこれらに対峙しながら生きていく存在であろうと3回の講座を結ばれた。

4) 血圧自己測定講習会

健康教育サービスセンターでは、一般の人々が「自分の健康は自分で守る」ためのスキルの一つとして血圧は自分や家庭で測るものとの認識に立って、1974年から一般の人々を対象に聴診法による血圧の測り方を指導しており、これまでに8,127名の方々が受講された。

ところが、最近の自動血圧計の普及に加えて、高血圧の患者に主治医が自分で血圧を測定することを指導するようになり、自分や家庭で血圧を測ることはあたり前のこととなっている。これらは日野原理事長が当財団の設立当初から健康教育の一環として提唱し普及活動を行ってきたことが、広く社会に定着したことになる。

当初の目的が達成されたものとして42年にわたる活動も本年度をもって閉講することとした。



●50歳からの死生学
3回連続講座を担当された講師の島園進先生

7 ハーベイ教室

自衛隊中央高等看護学院3学年生を対象にした「ハーベイドールを使用しての心音聴取の基本的技術習得の実習」を2回（70名参加）実施した。講師は、高橋敦彦先生（日本大学短期大学部教授）が担当された。年間のハーベイドールの使用回数は、ハーベイ教室として2回、聖路加看護大学大学院の授業への設備提供を2回、多職種医療者のための実践心音聴診訓練初級研修の合計5回となっている。2015年12月末をもって千代田区平河町の砂防会館から同じく千代田区一番町の進興ビルに健康教育サービスセンターを移転したため、教育機材としての設備移動が不可能なことから、ハーベイドールを用いた教育は残念ながら終了することとなった。

ここでシミュレーションを用いた当財団での教育の歴史を簡単に振り返ってみたい。

健康教育サービスセンターにおいて本格的な心音聴診訓練を始めたのは1976年、「ナースのための心音ワークショップ」が第1回であった。これを契機に、広くナースが聴診器を使って心臓の音を聴く時代の先駆けとなった。これを受けて医師、医学生にも心音シミュレーションを用いた教育を行い、大きな反響を呼んだ。その後、心臓、頸動脈、頸静脈の視診、触診、聴診などの所見をすべてシミュレートできる心臓病診断のための「ハーベイ」と名づけられた人形が米国で開発され、1981年、世界で8番目の人形を当センターが購入することになり、それとあわせて開発者のゴードン博士を招いて国際ワークショップを開催した。

「ハーベイ」は少人数（10名）の訓練に用いられ、25種

類の心臓病がシミュレートされている。2015年末まで健康教育サービスセンターで多くの医療者の教育に活用されてきた。

8 資料・備品の整備

健康、看護、栄養、医療、教育等に関する専門月刊誌を6種、雑誌4種、合計52冊、新聞2紙を定期購読し、健康教育サービスセンターの図書コーナーに整備した。また、10冊の寄贈図書があった。

健康教育サービスセンターの移転に伴い、これまでの蔵書の多くを処分し、医学教育模型多数と心肺蘇生訓練人形レサシアン等は関係する医療者養成校などに寄贈した。

9 出版広報活動

1) 月刊『教育医療』通巻449～457（各号8,200部／8頁）

『教育医療』は財団設立初年度から発行してきたが、2016年1月号より「新老人の会」会報と合併し、財団の機関紙『ライフ・プランニング・センター』として、全頁カラーで発行することとなった。財団の活動を紹介するほか、セミナーや講習会などの案内と報告を掲載している。

2) 月刊『新老人の会』会報（4～12月）（各号8,200部／8頁巻頭と巻末カラー）

全国46支部と1 brunchの活動のほか、本部の活動や会員の投稿、また「新老人の会」の日野原会長のメッセージ、および日野原会長の日常を写真で紹介してきた。主な内容は、日野原会長からのメッセージ（巻頭言）、支部ニュース、輝く新老人（会員の紹介）、本部の活動などであり、隔月で俳句と川柳を掲載している。

3) 月刊『ライフ・プランニング・センター』（1～3月） —教育医療・「新老人の会」—（各号8,200部／12頁4色刷）

2016年1月号より発行。財団の活動を紹介していく。その他、日野原理事長の多岐にわたる活動や、月々のトピックス、「新老人の会」会報から引き継いだ俳句と川柳を隔月で掲載している。

● 2015年度健康教育サービスセンター実施プログラム一覧

日	内 容	講師（敬称略）	会 場	参加者数
4月4日(土)～5日(日)	厚生労働省後援 第1回がんのリハビリテーション研修会	小山 照幸 高倉 保幸他	国立看護大学校	① 240 ② 240
5月13日(水)	超高齢社会におけるヘルスデザイン ①認知症への備え 高齢者におけるフレイルと自己効力感について	山梨 恵子 道場 信孝	健康教育 SC	① 39 ② 41
5月16日(土)	フィジカルアセスメント講座 ①循環器系の診かた	水野 篤	健康教育 SC	50
5月16日(土)～17日(日)	厚生労働省後援 第2回がんのリハビリテーション研修会	田沼 明 上野 順也他	国立看護大学校	① 168 ② 168
5月20日(水)	超高齢社会におけるヘルスデザイン ②健康をきめるカーヘルスリテラシーとは 高齢者医療の課題と自己決定・意思表示のとりえ方	中山 和弘 会田 薫子	健康教育 SC	③ 42 ④ 41
5月23日(土)	財団設立42周年記念講演会 「いのちと私たちの生きかた」	日野原重明 細谷 亮太他	笹川記念会館	950
6月3日(水)～17日(水)	介護サポーター養成講座 基本コース	和田 忠志 秋山 正子他	健康教育 SC	延べ212 6回
6月6日(土)	フィジカルアセスメント講座 ②呼吸器系の診かた	皿谷 健	健康教育 SC	56
6月13日(土)～14日(日)	厚生労働省後援 第3回がんのリハビリテーション研修会	田沼 明 石川 愛子他	国立看護大学校	③ 168 ④ 168
6月21日(日)	LPC プレ国際フォーラム2015 ナラティブ・メディスン実践ワークショップ	リタ・シャロン 斎藤 清二他	聖路加国際大学	76
7月1日(水)～15日(水)	介護サポーター養成講座 実践コース	志垣健一郎 上野まき子他	健康教育 SC	延べ166 6回
7月18日(土)	フィジカルアセスメント講座 ③神経系の診かた	塩尻 俊明	健康教育 SC	44
7月25日(土)～26日(日)	厚生労働省後援 第4回がんのリハビリテーション研修会 企画者研修会	田沼 明 石川 愛子他	国立看護大学校	⑤ 168 ⑥ 168 企 12
8月8日(土)～9日(日)	LPC 国際フォーラム2015 医療と対人援助におけるナラティブ・メディスン	Dr.Gowda 斎藤 清二他	聖路加国際大学	① 134 ② 105
8月15日(土)	フィジカルアセスメント講座 ④認知・神経症状の診かた	金井 貴夫	健康教育 SC	45
8月29日(土)～30日(日)	厚生労働省後援 新リンパ浮腫研修 Step 1 1－2	北村 薫他	新橋ラーニング スクエア	① 231 ② 231
9月26日(土)～27日(日)	厚生労働省後援 第5回がんのリハビリテーション研修会	高倉 保幸 宮越 浩一他	国立看護大学校	① 240 ② 240
9月26日(土)	フィジカルアセスメント講座 ⑤関節・筋・骨格の診かた	岸本 暢将	健康教育 SC	42
10月14日(水)	50歳からの死生学① 社会から考える生き方と最期の迎え方	島藺 進	健康教育 SC	41
10月17日(土)～18日(日)	リンパ浮腫研修 Step 2 1－2	北村 薫 山田 祐他	新橋ラーニング スクエア	① 223 ② 224
10月24日(土)	フィジカルアセスメント講座 ⑥皮膚の診かた	衛藤 光	健康教育 SC	36
10月24日(土)～25日(日)	厚生労働省後援 第6回がんのリハビリテーション研修会	石川 愛子 藤本 幹雄他	国立看護大学校	③ 240 ④ 240
10月28日(水)	50歳からの死生学② 宗教から考える生き方と最期の迎え方	島藺 進	健康教育 SC	27
10月31日(土)	多職種医療者のための実践心音聴診訓練研修	道場 信孝	健康教育 SC	48
11月4日(水)	50歳からの死生学③ 人生から考える生き方と最期の迎え方	島藺 進	健康教育 SC	33
11月11日(水)	バザー講演会「戦争といのちの物語」	日野原重明	健康教育 SC	66

11月14日(土)	フィジカルアセスメント講座 ⑦発熱患者の診かた	本郷 偉元	健康教育 SC	36
11月14日(土)～15日(日)	厚生労働省後援 第7回がんのリハビリテーション研修会	小林 毅 藤本 幹雄他	国立看護大学校	⑤ 240 ⑥ 240
11月16日(月)	援助・支援する人たちのための ボランティア実践ワークショップ①	興梠 寛	健康教育 SC	27
11月24日(火)	心音訓練研修 (自衛隊中央病院高等学院) 第1グループ/第2グループ	高橋 敦彦	健康教育 SC	71
11月30日(月)	援助・支援する人たちのための ボランティア実践ワークショップ②	田中 一秀	健康教育 SC	30
11月30日(月) 12月7日(月)	模擬患者ボランティア講座	福井みどり他	健康教育 SC	① 35 ② 42
12月12日(土)～13日(日)	厚生労働省後援 第8回がんのリハビリテーション研修会	小林 毅 藤本 幹雄他	国立看護大学校	⑦ 240 ⑧ 240
1月16日(土)	フィジカルアセスメント ⑧腹部の診かた	和足 孝之	剛堂会館会議室	38
1月23日(土)～24日(日)	厚生労働省後援 第9回がんのリハビリテーション研修会	石川 愛子 辻 哲也他	国立看護大学校	⑨ 224 ⑩ 224
2月6日(土)・7日(日)	新リンパ浮腫研修 Step1 1-2	松尾 汎 北村 薫他	明大中野校	① 323 ② 323
2月10日(水)	LPC ボランティア研修会	志村 靖雄 平野 真澄	一番町会議室	39
2月20日(土)	フィジカルアセスメント ⑨問診・全身外観・バイタルサインの実技	徳田 安春	JCHO	37
2月27日(土)～28日(日)	厚生労働省後援 第10回がんのリハビリテーション研修会	小林 毅 宮越 浩一他	国立看護大学校	① 224 ② 224
3月1日(火)	いのちの授業	日野原重明	青山学院初等科	60
3月12日(土)	フィジカルアセスメント ⑩視診・打診・触診・聴診の実技	徳田 安春	JCHO	40
3月12日(土)・13日(日)	新リンパ浮腫研修 Step2 1-2	宇津木久仁子 河村 進他	明大中野校	① 328 ② 328

報告／平野 真澄（健康教育サービスセンター所長）

「新老人運動」と「新老人の会」の運営

「新老人の会」事務局 所在地：東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階

取り組みの経緯

ライフ・プランニング・センターの日野原重明理事長が提唱された「新老人運動」に賛同する方々の集まりとして2000年9月に「新老人の会」を発足させ、会長には日野原理事長が就任した。

「新老人運動」とは、長寿国・日本の高齢者が健やかで生きがいを感じられる生き方をしていくための具体的な提案である。設立当初は、21世紀を目前にして人口の急速な高齢化がにわかに社会問題となり、増えすぎる高齢者とそれを担う世代の減少がクローズアップされはじめ、国の施策として介護保険がスタートした年でもあった。

しかし、高齢になっても自立して、これまでの人生で培った知恵や経験を社会に還元できる老人は大勢いる。このような方々を「新老人」と名づけることによって全く新しい老人像を創出しようとしたものである。そして、これらのことが新聞、雑誌、テレビなどで数多く紹介されたことで全国的な反響を呼び、全国から大勢の賛同者を得ることになった。

発足から15年6カ月を経た2016年3月31日現在、地方支部は46カ所に増加しているが、全国の会員数は2011年をピークに減少を続け、2016年3月末現在で9,388名となっている。会員数は会の力であり、社会的な評価の指標となっているため、ぜひとも増強しなければならない。

これには、この15年の間に高齢者に対する社会の認識が大きく変化したことがあげられる。そして、年数を経るにつれて当初のインパクトが薄れてきていること、高齢者にとって経済的な不安感が増していることなど、さまざまな要因が考えられる。しかし、当会の理念は先進的で他に類がなく、世代を超えて受け入れられるものであり、当会だからこそできる活動はたくさんある。社会的な存在意義の観点からも、今こそ、時代に即して変革しつつ発展的に継続していかなければならない。

2015年度は、当財団発祥の地である千代田区平河町の砂防会館が老朽化により建て替えることになり、やむなく2016年1月、一番町進興ビルに移転した。当会の活動には、多目的スペースが必要であるが、当ビルの「さわかみグループ」のご好意により、大会議室を月に7～8回のペースで借用できることと、近くの千代田区麹町区民館を借用することにより、これまでの活動の多くを継続していくことができるのは幸いである。

*

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島原子力発電所の事故は、被災地ばかりではなく日本全体が大きな衝撃を受け、人の力が及ばない体験をすべての日本人が共有することとなり、価値観の変更を迫られることになった。そして、人々が生きることの意味を問い直し、この国の未来を築くためにどのように行動するべきかを考えるようになった。

大震災から5年を経た現在もなお被災地の復興はほど遠く、そこで暮らす人々の生活は困難を極め、希望を見出せずにいる人も多い。

「新老人の会」の目標を実現するためのさまざまな活動を推進する中で、設立当初75歳以上を正会員、それより若い方々を準会員とした会員の分類を、2005年度から75歳以上を「シニア会員」、75歳より若い方々を「ジュニア会員」とし、合わせて会員とした。

しかし、会の目指すべき方向が明確になるにつれ、「新老人運動」はもっと広い視野をもって活動すべきとの合意に立って、2006年度より20歳以上60歳未満の若い人たちを「サポート会員」とし、当会の趣旨に賛同する方々の入会を勧め、活動の下支えを担っていただくことにした。ジュニア会員、サポート会員にはシニア会員と共に活動することで、10年先、20年先の自分のモデルを見つけていただくことができ、年齢を重ねなければわからないことを、先輩会員を通して体得していただくことができると考えたのである。

2008年度から「夫婦会員」の年会費を減額して1名分とした。現在、シニア会員49%、ジュニア会員35%、サポート14%という割合で、平均年齢は72.95歳となっている。

「新老人運動」の趣旨

高齢化の道をまっしぐらに突き進んでいる日本において、高齢者はどのような生き方をすればよいかを、1999年作成の当財団のリーフレット「新老人一実りある第三の人生のために」を作成し世に問いかけ、翌2000年9月に「新老人の会」設立に至った。

「新老人運動」とは、日野原会長が長年にわたり日本の医学・医療界を革新するリーダーとして培ってきたものをベースに、日本の高齢者が健やかで幸せな生涯を送る

ことができるようにと願ってのものである。

高齢者が自立して、この年代でなければできない社会貢献をし、生きがいを感じられる生活を送っていただくために、次のような「生き甲斐の3原則」と5項目の行動目標を掲げている。

● **生き甲斐の3原則**（ヴィクトール・フランクルの哲学より）
と一つの使命

- ①愛すること（to love）
- ②創めること（be creative）
- ③耐えること（to endure）

● **5つの行動目標**（2006年3月一部改正）

①**自立**：自立とよき生活習慣や我が国のよき文化の継承
本会は、75歳以上をシニア会員、75歳未満をジュニア会員、60歳未満をサポート会員とし、老後の生き方を自ら勇気をもって選択し、自立とよき生活習慣をそれぞれの家庭や社会に伝達するとともに、次の世代をより健やかにする役割を担う。

②**世界平和**：戦争体験を生かし、世界平和の実現を

20世紀の負の遺産である戦争を通じて貧しさの中から学んだ体験と、人類愛を忘れた生き方の反省から得られた教訓を次の子どもや孫の世代に伝え、世界平和の実現に寄与する。

③**自分を研究に**：自分の健康情報を研究に活用（ヘルス・リサーチ・ボランティアの志願）

自らの健康情報（身体的、精神的及び習慣的情報）をヘルス・リサーチ・ボランティアとなって研究団体に提供し、老年医学、医療の発展に寄与する。

④**会員の交流**：会員がお互いの中に新しい友を求め、会員の全国的な交流を図る。

健やかな第三の人生を感謝して生きる人々が、さらに新しい自己実現を期して交流し、心豊かな老年期を過ごす。

⑤**自然に感謝**：自然への感謝とよき生き方の普及

過度に成長した不健全な文明に歯止めをかけ、与えられた自然を愛し、その恩恵に感謝し、その中によき生き方の普及を図る。

そして2006年度から、上記に加え、一つの使命として、「子どもに平和と愛の大切さを伝えることー（To give children messages to appreciate Peace and Life of All on Earth）」をつけ加えた。

＊

「新老人の会」とは、これらの趣旨に賛同する方々を会員として、広く社会に啓発活動を展開していこうとする

ものであり、会則、地方支部規約に基づいて運営されている。

2015年度は、地方支部に新たに奈良支部が加わり、全国46支部となった。

地方支部の躍進はめざましく、46カ所ある支部においても趣向をこらしたフォーラムを開催し、地域に「新老人運動」を啓発・普及する役割を担っており、当会の趣旨に添ったさまざまな活動を地域に根ざした形で展開している支部も増えている。また、2012年度には、支部の垣根を超えてソーシャル・ネットワーク・サービスを活用したワーキンググループ（SSA）が発足し、全国交流を推進している。

これらの詳細を以下に報告する。

1 「新老人の会」会則・規約・規定集

「新老人の会」では、必要に応じて規約、規定を制定して運用してきたが、これらを一括して各支部に送付、支部運営の指針としていただくことにしている。

- I 会則
- II 地方支部規約
- III 海外支部規約
- IV 海外連絡団体に関する規定
- V 「新老人の会」地方支部運営について
 - ・フォーラム開催について
 - ・支部活動助成金交付規定
 - ・支部会計報告（ひな形）
 - ・地方支部における経理処理について
 - ・支部世話人名簿
- VI 個人情報に関する取り扱い規定
 - ① 個人情報の取り扱いに関する覚書
 - ② 個人情報管理者報告書

2 地方支部の設立

設立当初から全国に10ブロック程度の支部を設立することとし、その後は県単位の規模に支部を小さく分割する方針をとってきた。2015年度は、「奈良支部」が設立され、全国46支部となった。さらに、会員が地域に根ざした活動を展開するという観点から、1県に1支部の方針を見直し、2011年度から地域の歴史や文化の違いや交通の便などから1県に複数支部の設立を認めることとした。これによって、兵庫県には「兵庫支部」「はりま支部」

が、静岡県には「静岡支部」「富士山支部」が、そして長野県には「信州支部」「長野支部」が設立され、地域の特色を生かした活動を展開している。

地方支部は「会則」「地方支部規約」に則して運営されるが、支部の財政は本部より支部の会員数に応じて年会費の50%を「地方活動助成金」として交付し、これをもとに運営される。支部を設立することによって地域に根差した活動を展開していくことができ、支部主催で日野原会長の講演と音楽の会（支部主催フォーラム）を開催し、「新老人運動」の趣旨を広めている。

今後、いかにして当会の理念を各地域に啓発しつつ、会の目標に沿った支部活動を展開していくかが課題である。

3 地方支部規約

全体で8カ条からなる規約は、地方世話人会の設立、地方支部設立後の地方世話人会の権限、義務、財政などについて定めている。条項の主なものは下記の通りである。

第3条

- ①地方世話人代表1名を会長が任命する。
- ②地方世話人は地方世話人代表が10～20名の範囲で選出し、会長の承認を得る。

第6条

- ①重要な業務執行に関して、会長の承認を得る。
- ②1年に1回、会長に活動報告と会計の報告を行うこと。
- ③1年に1回、地方支部世話人代表が本部における拡大世話人会に参加すること。

第7条

- ①本部からの地方活動助成金を4月、7月、10月、1月の4回に分けて交付する。

支部によって、規約に不足があれば細則を付記して運用していただくことにしている。

4 「世話人会」の開催

本部では事業の遂行に関する重要な事項を検討し決定する機関として、「世話人会」を年間6回と、全国の支部の世話人代表を招いて開催する「拡大世話人会」を年1回開催している。メンバーは日野原重明会長、道場信孝財団顧問、朝子芳松財団常務理事、18名の本部世話人、

事務局から3～4名が出席している。本年度は、世話人として新たに日吉慶子氏、水口みどり氏、関谷真一氏に委嘱。2009年から世話人を務められた串戸功三郎氏は、首都圏の会員が自主的に活動できるよう「有志の会」を立ち上げリーダーとしてご尽力いただいたが、9月に逝去されたことは誠に残念であった。

本年度は、2015年6月17日、8月19日、10月21日、11月18日、2016年1月20日、2月17日の6回開催した。本部世話人は次の18名である。（五十音順）

伊藤 朱美	太田垣宏子	(9月まで) 串戸功三郎
黒田 薫	榊原 節子	(1月より) 関谷 真一
玉木 恕乎	高木 妙子	永水 昌子
丹羽 茂久	沼田 邦夫	沼田 祥子
日吉 慶子	牧 壮	藤田 貞
松原 博義	水口みどり	水野 茂宏
宮川ユリ子		

5 「拡大世話人会」の開催

「拡大世話人会」は1年に1回、会則に則って本部の世話人会を拡大し、地方支部の世話人代表にも参加していただき研修、交流するものである。その目的は、①会の目標、活動方針を確認し合い共有する、②支部の活動、運営について情報を交換し合う、③今後の展望を明確にして共有する、④全国の支部の代表者が交流を図る、の4点である。本年度は、第17回「拡大世話人会」として2016年3月19日(土)～20日(日)に開催したが、全国43支部（急病により3支部欠席）の代表と本部世話人、事務局を合わせて総勢108名の参加であった。

6 第17回拡大世話人会

日 程 2016年3月19日(土)・3月20日(日)

会 場 ホテル・ルポール麹町

参加者 43支部の世話人代表（または代理）、本部世話人、事務局 総数108名

プログラム

第1日 13:00～17:00

I部 本部報告

- ・財団について、会計報告、予算……………朝子芳松
- ・会員の動向、本部運営について、その他……………石清水由紀子

- ジャンボリー開催報告と予告……本部、長野支部

Ⅱ部 意見交換・パネルディスカッション

- 「新老人の会」のあり方―発足から15年を経て、これまでの活動を振り返り、今後の方向性を模索する―
コーディネーター 福井みどり（LPC 職員）
パネリスト 萩原俊男、吉田修、溝上泰弘、小山和作、石清水由紀子

Ⅲ部 夕食交流会（18：00～20：00）

……司会進行 榊原節子（本部世話人）

第2日 9：30～12：30

I部 特別講演

北朝鮮からの脱北者の子どもたちへの支援と東アジア児童福祉会について

中平 望（東アジア児童福祉会理事長・弁護士）

Ⅱ部 グループワーク

コーディネーター……佐藤牧人

意見交換

- 「新老人の会」のあり方で上げられた問題についてワールドカフェ方式で話し合う報告会
- 総括 日野原重明会長

第1日「I部」の概要

はじめに、朝子芳松財団常務理事から、財団の事業部門であるピースハウス病院が1年間の休止を経て再開することとなった経緯を説明した。引き続き「新老人の会」収支実績、予算の一覧表をもとに説明し、地方活動助成金の支出が突出していること、近年の会員数の減少により数十万～数百万円の赤字となっているが、これは財団の他部門で吸収されていることについて報告した。

続いて、「新老人の会」石清水由紀子事務局長から、この1年の概要について各支部から提出された「支部活動報告書」の分析をもとに報告した。要点は下記の通りである。

支部活動の報告から次の3点（①会員数の減少、②会員の高齢化、③支部を担える人材の不足）が問題点として挙げられること。

- ①「会員数の減少」は、昨年1年間で1,300名減少し、全体で10,000名を切り、その原因の追求と対策が必要である。
- ②「会員の高齢化」は、若い会員を獲得し、役割を与えて育成する必要がある。世話人代表は支部のリーダーであり、支部会員に役割を与える立場である。
また、③「人材の不足」については、「世話人会」を規

約に沿って定期的に開催すること。開催数と活動の活性化は比例していること。世話人は無償ボランティアを原則とするため役割分担をし、特定の人が過重にならないようにすること。事務局は支部の窓口、業務が多岐にわたるため複数名で役割分担をすること。会計報告は、本部に報告したものを支部会員へも支部ニュースなどを通じて報告すること。

今回の「拡大世話人会」では、会員数の減少への対応策を率直に話し合い、さらなる発展のために何が必要か、何ができるかを支部にもち帰って行動するまでを目標としたいと述べた。

Ⅱ部 意見交換・パネルディスカッションの概要

「新老人の会」のあり方―発足から15年の活動を振り返って、今後の方向性を模索する―

- 石清水由紀子（本部事務局長）

「新老人運動」の理念を啓発するために、全国各地で「新老人の会」フォーラムをこれまでの15年間、300回にわたり開催し、延べ33万4,962名の参加者を得て、新入会員を募り活力を得てきた。日野原会長は、著書、新聞、雑誌、テレビ、ラジオを通して広く発信してこられたが、今後は、自分たち会員がミニ日野原となって発信する必要がある。

5項目の行動目標の多くは次世代に対する役割であり、このような会は他にないと評価されている。なかでも「戦争体験を伝える活動」については、手記の出版は13冊に及び、「子どもたちに戦争体験を伝える授業」は多くの支部の活動として広まっている。

15年の活動をまとめると、①これまでに培った活動の実績、②全国10,000人の会員、③全国展開していることが上げられる。社会の認識が変化中、これらを財産に、今後いかに発展させていくかが問われている。

今後に向けて強調したいことは、日野原会長の「新老人運動」の提唱は、先進的で他に類がなく、世代を超えて受け入れられる。15年の活動の実績を踏まえて、時代の変化を汲み取り、思い切った変革が必要である。

- 萩原俊男（大阪支部世話人代表・森ノ宮医療大学学長）

「日本老年医学会」の活動を紹介しながら、超高齢社会のフロントランナーとしての日本の医学・医療のあり方は、「治す」医療→「治し支える」医療へ、臓器機能の回復→生活機能の維持・回復への転換が必要である。超高齢社会の未来について、①自立できる元気な



● 拡大世話人会

パネルディスカッションでは「新老人の会」15年の足跡を顧みつつ、新たな活動方針を打ちたてべく徹底的な話し合いが続けられた。



日野原会長



小山熊本支部
世話人代表



吉田奈良支部
世話人代表



会場からも活発な意見が（上）
交流会ではまず乾杯から（下）



高齢者を増やす、②高齢者、医療者ともに意識改革が必要、③行政、地域ぐるみで高齢者を支援、④介護・リハビリ施設の質の向上、⑤死生観、終末期医療について国民的に論議することが必要がある。以上のような観点から「新老人の会」の可能性に期待する。

- 吉田修（奈良支部世話人代表・天理医療大学学長）

日野原会長が提唱された「新老人の会」の3つの生きがい「愛すること」「創めること」「耐えること」について、先人の書物から引用して、その思想の普遍性を解説された。そして、人間は本質的に苦悩する存在である。どんな状況におかれても人間としての尊厳を忘れずに生きることの素晴らしさ、それでもいつかは死ぬということ忘れなければ、もっと希望をもって心地よく新しい老いを生きることができると述べられた。

- 溝上泰弘（佐賀支部世話人代表・株式会社ミズ会長）

「新老人の会」が成長することで、世の中がよくなる

ことが理想である。そのためには永遠に続く必要があり、どうあるべきかの心棒を立てる必要がある。人は世の中や他人については革新的なことをいうが、自分のことには保守的になる。「いままで通り」に固執すれば存続は危うい。「真に求めるものは何か？」「それらに答えられているか？」については、回を重ねるごとに感動は減じて、新しいものが求められる。継続と変化のバランスの取り方は容易ではない。これからは連携の時代といわれるが、連携先を開拓してくれるパートナーを見つけることなど、ビジネス経営で培った観点から貴重な提言をされた。

- 小山和作（熊本支部世話人代表・熊本日赤健診センター名誉所長）

支部設立から10年、活発な支部活動を展開している観点から、まず行動することが大切である。生きがいづくりの活動は大きく3つに分けられる。まず一人称

の活動は、一人でも楽しめ、向上心を高める俳句、川柳、オカリナ、パソコンなど各種サークル活動。二人称の活動は、人との交流を通して、旅行、グランドゴルフ、花見・月見会、忘年会など。三人称の活動は、社会に向けて発信する活動、「戦争を語り継ぐ会」「戦争体験記の出版」「演劇公演」など。

新聞やテレビが活動を取り上げてくれることによって、地域における知名度が上がり、理解が深まる。今後の発展的な運営のために、①「新老人の会」の理念の徹底、堅持、継承、②会員の結束は行動から、③活動に全会員の参加を、④地域を巻き込む、⑤健康と生きがいづくり、⑥支部財政の健全化、の6項目を上げられた。

＊

以上、これからの当会のあり方をパネリストのさまざまな観点から問題提起していただき、会場の参加者と熱心な討議が繰り広げられたパネルディスカッションは、今後に向けての大きな一歩を踏み出す契機となると思われる。キーワードをまとめると、当会の理念を核に行動することが大切であり、さらに、行政、学校、他団体などと連携する必要がある。

そこで、2日目のグループワークを下記の3点にまとめ、テーマを『『新老人の会』の大変革を考えよう！』とした。

- ①活動が第三者にも見えるようにする
- ②人材の育成と役割について
- ③新年度に向けての目標を掲げる

第1日「Ⅲ部」の概要

90名の参加者が夕食を共にしながら交流会を行った。その席で本年度に設立された奈良支部の世話人の山本徳三郎氏、世話人代表を交代する岡山支部の武用愛彦氏、京都支部の津田佐兵衛氏、和歌山支部の有田幹雄氏（代理・神谷尚孝氏）、神奈川支部の山田栄氏にご挨拶いただいた。

第2日「Ⅰ部」の概要

特別講演

北朝鮮からの脱北者の子どもたちへの支援と東アジア児童福祉会について

中平 望（東アジア児童福祉会理事長・弁護士）

中平望先生のお父上であり人権弁護士として著名な中平健吉先生は、本業以外にアムネスティ・インターナ

ショナルの日本支部長、北朝鮮人権侵害問題などに尽力されたが、残念ながら昨年3月に逝去された。中平望先生はお父上の遺志を引き継いで地道な活動を続けておられる。

1990年代後半から2000年前半に経済困難に加えて食糧難による大量飢餓、餓死が発生した時期から、脱北者の人と孤児の支援をしてこられた。中国と北朝鮮の国境線近くで、悲惨な脱北者と孤児を見かねて支援していたNGOや個人は、逮捕、拘束、実刑判決を受ける例が続発、勇気ある活動をした人々はブラックリストに載り、中国では動くことができない。この人たちの意思を汲んで生まれたのが東アジア児童福祉会である。

中国では、福祉の概念がないため、全く政府の資金援助はない。その中で、経済的に自立するため日本の「富士りんご」を栽培できないかと弘前のりんご農家の支援を得て取り組んでいる。また、児童養護施設で孤児たちが極寒の冬をしのぐために欠かせない暖房費（石炭）の支援を続けている。隣国でのこのような実情を知り、「ちいさきものたちのために」尽力する真摯な生き方が深い共感を呼んだ。

第2日「Ⅱ部」グループワークの概要

前日のパネルディスカッションで上げられたテーマ『『新老人の会』の大変革を考えよう』との呼びかけで、15グループのワールドカフェ方式で話し合いをもった。最後に、それぞれのカフェオーナーから、各グループの要点を報告していただいた。

それぞれの意見を紙片に記入、貼り付けて残したものを、カテゴリー化すると下記ようになった。

- ・理念について
- ・ネーミングについて
- ・世話人会、例会について
- ・年会費について
- ・連携について
- ・セミナー、サークル活動について
- ・勉強会について
- ・広報、情報の発信について

日野原会長は、2日にわたる熱心な討議について評価されつつも、「議論しているだけではなにも変わらない、まず行動することが大切である」と強調された。また、具体例として、「ノルディックウオーク」への全国的な取り組みを推奨された。

地方支部が設立されて年数を重ねるにしたがって、会員の高齢化による支部運営の沈滞化、マンネリ化がみられるようになってきている。地方世話人会で協議しながら、趣旨に沿った活動を展開していただくのであるが、運営の仕方によって各支部の活動に大きな差が生じている。

支部世話人会で協議を重ね、会員の要望を汲み上げ、地域に根差した有意義な活動を展開することで、新たな会員を獲得することができ、活力を得ることができる。今こそ、支部活動においても思い切った変革を図らなければならないと思われる。

2015年度は、戦後70年の節目に当たる。この時点で書き残さなければと、広島支部が『語り継ぐ思い出一被爆70年を迎えて』と題した9名の会員の手記を出版された。これを含め、これまでに本部、支部から出版された戦争体験記は14冊となった。

熊本支部が昨年度に出版した『零の進軍』は、熊本日日新聞社出版文化賞を受賞した。熊本支部では、「戦争を語り継ぐ会」を73回も開催してきたという地道な活動が実ったものといえる。

このような「戦争体験を語り伝える活動」は、年々語り継ぐ人が減少している今こそ、当会でなければならない社会に貢献する活動といえる。先の戦争の過酷な体験を風化させないことこそ新老人に与えられた使命の一つであると確信する。

また、「子どもたちに平和と愛の大切さを伝えること」を一つの使命として掲げているところから、日野原会長の「いのちの授業」にならって、自分たちで工夫した内容の「いのちの授業」を行っている支部が増えてきた。10年の実績をもつ兵庫支部、信州支部から、宮崎支部、山梨支部、栃木支部、青森支部へと広がっている。

植樹運動は、福岡支部が「樹人千年の会」を始めた。これに触発された信州支部、長野支部の「いのちと平和の森」の活動、熊本支部の「飯田山に桜を植える会」、鹿児島支部の「指宿の山への植樹」活動へと引き継がれている。

2015年度の新たな展開としては、会員交流のためのさまざまなサークル活動や、講演や音楽を取り入れた会員集会、お花見や紅葉狩りなど野外での会員の交流会、史跡探訪、小旅行、観劇など、地域性のあるユニークな活動が活発に実施されたことである。これらの活動は年ごとに多彩になり、特に高齢の会員には喜ばれている。

各支部が発行する「支部ニュース」も水準の高い充実した内容となっており、紙面から支部活動の様子を読み取ることができ、支部同士の情報交換に役立っている。

2015年度は、3支部の支部世話人代表が高齢や健康上の理由によって交代された。和歌山支部世話人代表の板倉徹氏は、和歌山支部はじめ近畿地区の支部フォーラムにおいて「認知症予防」の講演をしていただくなど、当会の活動に格別の理解と協力をいただき今後に期待される方であったが、残念なことに2016年2月25日に逝去された。

1) 地方支部世話人代表（設立順）

1. 福岡支部：原 寛
2. 兵庫支部：冨永 純男
3. 京滋支部：瀬戸山元一
4. 広島支部：岩森 茂
5. 東海支部：林 博史
6. 北海道支部：方波見康雄
7. 阪奈支部：荻原 俊男
8. 信州支部：横内祐一郎
9. 宮城支部：佐藤 牧人
10. 山梨支部：深澤 勇
11. 島根支部：森山 勝利
12. 高知支部：内田 康史
13. 鳥取支部：小田 蓉子
14. 新潟支部：笹川 力
15. 福島支部：佐藤 勝三
16. 熊本支部：小山 和作
17. 静岡支部：室久敏三郎
18. 宮崎支部：青木 賢児
19. 鹿児島支部：鹿島 友義
20. 富山支部：林 和夫
21. 岡山支部：河田 幸男
22. 三重支部：熊沢誠一郎
23. 青森支部：吉田 豊
24. 山口支部：西 祐司
25. 群馬支部：臼井 龍
26. 石川支部：鈴木 雅夫
27. 沖縄支部：鈴木 信
28. 長崎支部：押渕 礼子
29. 和歌山支部：板倉 徹（2月に逝去）
30. 神奈川支部：河野 顕子
31. 千葉支部：岡堂 哲雄

- 32. 山形支部：遠藤栄次郎
- 33. 大分支部：高田三千尋
- 34. 愛媛支部：貞本 和彦
- 35. 徳島支部：坂東 浩
- 36. 佐賀支部：溝上 康弘
- 37. 香川支部：大原 昌樹
- 38. はりま支部：田口 利昭
- 39. 富士山支部：遠山 和成
- 40. 秋田支部：丹波 望
- 41. 滋賀支部：山崎テルミ
- 42. 長野支部：中澤 弘行
- 43. 岩手支部：斎藤 和好
- 44. 栃木支部：小菅 充
- 45. 福井支部：栗田 幸雄
- 46. 奈良支部：吉田 修

2) 地方支部フォーラムの開催 (表)

日野原会長の講演と音楽とを組み合わせたプログラムをフォーラムとして支部主催で開催しているが、どの地域においても会場が満席になるほどの好評を博している。

フォーラムの会場では、日野原会長の講演の後に入会を受け付け「オリジナル日めくりカレンダー」をプレゼントすることになっている(2008年10月より)。そのため、地方支部フォーラムの際には新たな会員を獲得することができた。

本年度の延べ開催数は20回、延べ参加者数は2万993名(ジャンボリー長野大会5,038名を含む)であった。

3) 子どもたちに「いのちの大切さ」を伝える

先にも述べたように、2006年度年から「3つのスローガン」に加えて、一つの使命として「子どもたちに平和と愛の大切さを伝える」ことを付け加えた。日野原会長がこれまで全国各地の小学校229校を訪れて行った「いのちの授業」をモデルに、独自の発想で「いのちの授業」を展開している支部も増えてきた。会員の戦争体験を通して、あるいは会員自身の特異な経験をもとに、数人でチームをつくり「いのちの大切さを伝える授業」を展開している。以前から実施している信州支部、兵庫支部、宮崎支部に加えて、山梨支部、栃木支部、青森支部が取り組んでいる。

次世代に「いのち」の大切さを伝える活動で、自身の戦争体験を踏まえて話ができる会員がますます少なくなっている現在、「新老人の会」だからこそできる社会貢献活

動として全国的な展開が期待されている。

4) 戦争体験を伝える活動

兵庫支部が10年前からサークル活動の一つとして展開している「戦争体験を伝える」活動は、小学校の平和学習の一環として取り入れられ、6年生の広島への修学旅行の1カ月前に行われている。会員が戦争体験を通して「平和といのちの大切さ」を伝え、その後、生徒が修学旅行の見聞と合わせてグループワークで話し合い発表するという学習である。会員が語り伝えた内容と生徒の感想を併せて収録した冊子をもとに、阪神地区の他の小学校にも働きかけ、これまで11年間で3,000名を超える子どもたちにこの活動を行ってきた。

熊本支部では、10年前から毎月のように一般市民を対象に「戦争体験を語り継ぐ会」を開催して73回を数えるまでになっている。

沖縄支部では、「沖縄戦を語る会」を毎月1回開催し、「戦績を巡るツアー」も開催している。また、大分支部は沖縄支部との交流から情報を得て、沖縄戦の「対馬丸の悲劇」を音楽劇として公演し、聴衆に深い感動を与えることができた。

戦争体験を語り伝えられる人が希少となってきた今こそ、この活動の全国的な展開が期待される。

5) 「樹人千年の会」「いのちと平和の森」の活動

2004年に九州支部が自然環境保護を目的に「お墓の代わりに自分が生きた証としての樹を植えよう」と始めた活動が「樹人千年の会」である。福岡市郊外の地に約200本の樹が植えられ、会員たちの手で管理されている。

これに触発された信州支部の会員が中心になって2005年に「いのちと平和の森」構想に取り組んだ。松本市郊外の北アルプス連峰を背景にした安曇野平野を見下ろす松本市アルプス公園近くの市有地を借り上げ、ここを中心に自分たちが生きた証として「いのちの樹」を植えて森をつくり、次の世代に継承していこうとするものである。これは長野県に特定非営利活動法人(NPO)として申請し、2007年5月1日認証登記された。日野原会長は「いのちと平和の森」の名誉会長として「新老人の会」と協力し合うことを協定している。

2011年度には、この活動を発展させたNPO法人「いのちと平和の森・飯綱高原」を立ち上げたが、この活動をもとに2012年10月1日に長野市を中心に長野支部が設立されることになった。

熊本支部では「飯田山に山桜を植える会」を活動の一つに組み入れ、2007年から取り組んでいる。会員の知人が所有する山を「何とか活用できないか」と相談を受けたのがきっかけとなって山桜を植える計画が持ち上がり、これまでに200本を超える山桜を植えることができた。今ではお花見ができるまでに木々が成長している。

鹿児島支部でも2009年から「指宿の山に椿の樹を植える」活動に取り組んでいる。

6) 講演会、映画上映会、音楽の会の開催

会の趣旨に沿ったテーマで、映画を上映、講師を招いた講演会を開催するなど、会員のみではなく、広く一般の人々にも呼びかけて「新老人の会」をアピールする機会ともなっている。

今年度は、岩手支部がキッツキネットワーク岩手（NPO法人）と共催して、「映画『妻の病－レビー小体型認知症』上映とトークの会」を開催した。また、神奈川支部は、毎年「コンサート&共に歌う会」を開催している。このような取り組みは、今後、当会から発信する方法として期待される。

7) 各種大会の開催、共催、その他のトピックス

- ・4月13日・15日 第7回国際シニア合唱祭ゴールデンウェーブに参加
- ・5月15日 山梨支部が主催となって第14回日野原杯全国親睦ゴルフ大会を開催
- ・10月29日 山梨支部が主催となって第15回日野原杯全国親睦ゴルフ大会を開催
- ・11月13日 ヴィサンジョイントコーラスフェスティバル参加

8) 支部ニュースの発行

支部ニュースの発行は、隔月から年1～2回の発行までさまざまである。支部活動が活発に行われるとニュースが発行され、ニュースによってまた活動が活発になるという車の両輪の関係がうかがえる。最近では、支部同士がよい刺激を与え合い充実した内容となっている。

9) 各種出版物

- ・広島支部 『語り継ぐ思い出―被爆70年を迎えて』

10) 海外支部の設立

日野原会長が海外から講演の招聘を受けた際には、全

国の会員に呼びかけて同行参加していただき、現地の日系の方々との交流の機会をもってきた。そのような中から「新老人の会」の趣旨に賛同する方々が入会され、支部を設立して活動していきたいということになった。

2007年8月19日、日野原会長のメキシコ講演会を機に海外支部第1号としてメキシコ在住日系の方々の同好会としてメキシコ支部が設立された。

2009年4月1日には、日野原会長のハワイでの講演会の折に、非営利団体ハワイシニア協会の傘下団体として州政府の承認を得て、ハワイ支部（The New Elderly Hawaii Chapter）を設立した。

2013年4月1日には、「オーストラリア新老人の会（Association of New Elderly）」のメンバーの中から日系の方々が「新老人の会」オーストラリア支部を設立した。

これらは海外支部規約にのっとり運営されており、本部から毎月「新老人の会」会報と『教育医療』を、2016年1月からは財団機関誌『ライフ・プランニング・センター』を支部事務局に一括送付し、それらの実費相当の年会費（1人2,500円）を納入していただいている。

海外支部では定期的に例会をもち、日本における日野原会長の講演DVDを視聴したり、食事会を企画するなど、会員交流の機会をもっている。

海外支部世話人代表と会員数（2015年3月31日現在）

・メキシコ支部	檜山仁彦	会員数	36名
・ハワイ支部	國行宣夫	会員数	22名
・オーストラリア支部	吉住京子	会員数	5名

11) 海外連絡団体

2009年度から海外支部に準じて、「新老人の会」の理念を啓発する目的で設立され、諸外国政府機関の承認を得た団体に対して連絡関係をとるために、「『新老人の会』とその「海外連絡団体に関する規定」を制定した。

これまでは「台湾新老人会」と「オーストラリア新老人の会（Association of New Elderly）」がこれに該当している。両会の会員はその多くが日系人ではないため、日本の会報を送付しても読める人が少ないため年会費は不要とするが、本部から毎月会報を提供し、1年に1回、本部に活動報告を行うことが規定されている。

大会テーマ 「平和と命こそ」

—長寿日本—長野からのメッセージ—

日 時 2015年4月7日(火)、8日(水)

会 場 ビッグハット長野／ホテル国際21

参加者 5,028名(全国の会員と地元長野の参加者)

●プログラム

第1日

プレリュード 和太鼓演奏「信濃の国」

丹波島保育園児

開会の辞 長野支部世話人代表 中澤 弘行

祝 辞 長野県知事 阿部 守一

長野市長 加藤 久雄

「新老人の会」の活動紹介

本部事務局長 石清水由紀子

歓迎のお説話 善光寺大本願お上人 鷹司 誓玉

特別講演

平和の意味するもの—戦後70年に何を思うか

「新老人の会」会長 日野原重明

記念講演

バルカン半島、音楽の架け橋、そして世界市民

指揮者 柳沢 寿男

アトラクション

中澤きみ子ヴァイオリン演奏

ピアノ伴奏 深沢 雅美

- ・ベートーベン ソナタ第5番へ長調「春」から 第1楽章 アレグロ

- ・山田耕筈 からたちの花

- ・サラサーテ ツィゴイネルワイゼン

合 唱

(1) 長野ユーカリ女声合唱団

指揮 三澤 照雄 ピアノ伴奏 川上陽子

- ・中山晋平を歌う

カチューシャ〜ゴンドラの唄

鞠と殿様 あめふり

(2) 男声合唱団 ZEN

指揮 宮下莊治郎 ピアノ伴奏 小林 夏実

- ・防人の詩
- ・昂
- ・川の流れるように

フィナーレ 全員大合唱 「ふるさと」

会員交流会

ホテル国際21 参加者 434名

第2日 会員研修会

ホテル国際21 参加者 225名

特別講演

戦場に音楽の架け橋を

柳沢 寿男 バルカン室内管弦楽団音楽監督／コン

ボフィルハーモニ交響楽団首席指揮者

支部・地域における活動

①一兵卒の真実の記録『零の進軍』出版に至るまで—

小山和作(熊本支部)

②『奇跡のくすのき』冊子を制作—小学6年生の副読

本として寄贈—

木宮順子(富士山支部)

③「いのちの出前授業」に取り組んで

小菅 充(栃木支部)

④フォーラムで平和創作劇「I PRAY」を公演して

黒瀬真一郎(広島支部)

2015年度は「平和と命こそ—長寿日本—長野からのメッセージ」を開催テーマに掲げて、7年に一度の善光寺ご開帳の長野市において、長野支部が中心となって開催した。

会場となったビッグハットは、長野オリンピックのスケート競技場として建設されたもので、長野支部では当初から5,000人参加を目標にたいへんな努力をされ、5,028人の参加者を得ることができた。

はじめに、保育園児100名を超える和太鼓演奏「信濃の国」は、子どもたちの真剣そのものの迫力ある演奏とパフォーマンス。つづいて善光寺の鷹司誓玉お上人の歓迎のお説話、阿部守一長野県知事、加藤久雄長野市長のご挨拶をいただき、長野市ならではのオープニングセレモニーとなった。

プログラムは、「平和と命こそ」の開催テーマに沿って、日野原会長の講演は「平和の意味するもの」と題して行われ、つづいて下諏訪町出身の指揮者柳沢寿男氏は「バルカン半島、音楽の架け橋、そして世界市民」と題する講演を行った。

アトラクションは、上田市出身のヴァイオリニスト中澤きみ子氏のツナミヴァイオリンを用いての演奏と指揮者の柳沢寿男との国際的に活躍されるお二人の音楽家が、当大会を通して平和への祈りをこめて参加された。そして、地元の「長野ユーカリ女声合唱団」と「男声合唱団



●長野市「ビッグハット長野」で開催された「第9回ジャンボリー」には5,028名の参加者を迎えた

ZEN」による多人数の合唱が加わり、それぞれが共鳴し合って、平和と東日本大震災の鎮魂を願う感動的な催しとなった。

2日目の会員研修会は本部主催で開催したが、全国から225名の会員が参加された。

第Ⅰ部の特別講演は、第1日目に引きつづいて柳沢寿男氏が「戦場に音楽の架け橋を」と題してお話いただいた。2007年、紛争後の旧ユーゴの民族共栄を願ってバルカン室内管弦楽団を設立。国連開発計画、国際安全保障部隊などの協力を得て、旧ユーゴ各地でコンサートを実現し、教育を受けていないロマ民族の子供たちと共演を果たした。7年に及ぶ旧ユーゴ地域での音楽活動を通して体験された実情は、私たち日本の国民がいかに恵まれた中で生活しているのかを思い知らされるものであった。

第Ⅱ部は、支部、地域における4例の活動を発表していただいた。

最初に、小山和作氏が「一兵卒の真実の記録『零の進軍』出版に至るまで」と題して熊本支部の活動を報告さ

れた。この従軍日誌は、生々しい克明な記録、リアルな内容、描かれた挿絵は他に類をみないほど臨場感にあふれている。中国大陸打通作戦といわれたこの行軍は、まさに1,400キロの死闘の物語である。弾薬、食糧の補給も零、ただ命令に従うだけの兵士の人格は零、兵士の命も零、戦闘の中で累々と命が消えて行った悲惨な行軍であった。しかし、戦争とは罪なき人々を殺戮する加害者でもあることを忘れてはならない。この地球上から戦争を根絶したいという願いを込めて、支部会員が一丸となって3年がかりで出版することができた。

次いで、木宮順子氏が「冊子『奇跡のくすのき』を制作、静岡市の小学6年生に副読本として寄贈」と題して、静岡支部の活動を報告された。

1941年、静岡大火災で焼け野原となった静岡市は、5年をかけて復興したが、1945年の静岡大空襲で再び焼け野原と化した。静岡日赤病院前の「くすの木」も1メートルほどの焼けぼっくりになってしまった。それから3年後、その焼けぼっくりから若芽が顔を出し、復興に取り組んでいた市民にとって希望と勇気を与えるものだっ

た。戦後70年の今年、いまでは大木となっているこの「くすの木」のお話をよみがえらせようと取り組んでいる。

3例目の小菅充氏は「いのちの出前授業に取り組んで」と題して、栃木支部の活動を報告された。支部設立当初からぜひ取り組みたいとの思いをもっており、2年目から手探りで学校を開拓し、「いのちの出前授業」実施に至るまでを報告された。

4例目は黒瀬真一郎氏から「平和創作劇『I PRAY』を公演して」と題する広島支部の活動が報告された。

被爆2世の木原世宥子氏が20年前に「子どもたちの笑顔が絶えない、戦争のない平和な世界を自分たちの手で守りたい」という思いが実現したものである。原爆投下前の広島市民の様子、原爆投下の瞬間、その後の惨状とそれを乗り越えようとする人々をダンス・ミュージカルに仕立てた舞台は、小さな子どもから大人までの市民が熱い思いを込めて演じ、深い感動を与えるものとなった。これを広島支部フォーラムで上演することができた。

今回のジャンボリーは、戦後70年を視野に入れた開催テーマ「平和と命こそ」が終始貫かれた内容であった。長野支部のみなさんが地域のボランティアを結集して「おもてなし精神」をもって、この大きな催しを成功に導かれた。精魂込めた会員の手づくりの雰囲気が随所に表れた「新老人の会」でなければできない心に残るジャンボリーであった。

9 本部主催「新老人の会」八王子フォーラム

主 題 私たちの生き方

日 時 2015年12月2日(水) 13:00-16:00

会 場 オリnpasホール八王子

参加者 1,700名

●プログラム

第一部

活動紹介

本部事務局長 石清水由紀子

講演 1

いのちの使い方

「新老人の会」会長 日野原重明

講演 2

新しい看取り文化のために 東京・芦花ホーム 石飛 幸三

第二部 コンサート

地球をつつむ歌声

王子市立緑が丘小学校

オペラ歌手と歌う「地球をつつむ平和の歌」



●八王子市立緑が丘小学校・なかよしハート合唱団が、日野原会長作詞の「地球をつつむ歌声」を歌った

バリトン・鹿又透 ソプラノ・松原有奈

ピアノ・北村晶子

「新老人の会」の日野原重明会長は今年104歳、ゲストスピーカーの石飛幸三先生は80歳。2周り違うお2人のこれまでの、そしてこれからの生き方をお話しいただいた。

日野原先生は1世紀を超える人生の中から、大きな転機となった3つの出来事について話された。

1つは成長期から青年期にかけてのご自分の闘病生活から、「病むものの心の痛み」を体験できたこと、またそのためにスポーツを止められた時間を使って音楽を学んだこと。苦難を乗り越えて得たものは、その時には気づかなくとも、あとでかけがえのない恩寵となること。

2つ目は患者さんとの出会いと別れの中から身をもって「いのち」の大切さを学んだこと。そして3つ目は、58歳の時に日本赤軍によるハイジャック事件に遭遇し、突然いのちを奪われるかもしれないという恐怖の中から、「与えられたいのち」を実感し、「残された時間を誰かのために生きよう」と決意したこと。

それらの体験を実践に生かし、誰もが自分のいのちを全うし、よりよく生きることを願って設立したのが財団法人ライフ・プランニング・センターであり、さらに世界に先駆けて超高齢社会に入った日本の高齢者の生き方を示そうと設立したのが「新老人の会」であること。「新老人の会」は、ご自分の体験をもとにした3つのモットー（「愛すること」「耐えること」「創めること」）を掲げ、「子どもたちに平和と愛の大切さ」を使命に、いのちの大切さを発信していきたいと話された。

石飛先生は外科医として臨床の現場で40年以上患者の治療に専念してこられたが、70歳になって活動の場を特別養護老人ホームに移した時から、胃ろうなどで「生かされている人」の姿に衝撃を受けられた。そのことが転

機となって、「人の最期は、看取りはどうあるべきか」を考えるようになった。ホームでの日々の中からいきついたのは、「食べさせないから死ぬのではない、死ぬのだから食べないのだ」「体の中を整理して、余計なものを捨てて、捨てて身を軽くして、天に昇って逝く」という自然な死のあり方であったと言われる。

「病いは治せても、老衰は治せない」という考え方とその行動に、家族からも施設の職員からも賛同の声が寄せられるようになった。医療先進国だからこそ、切実な問題である「看取り」の問題は、「看取る」側も含めて自分のこととして早くから学んでおかなければならないと指摘された貴重なお話であった。

第二部 コンサート

日野原先生は2016年度の「第82回 NHK 全国学校音楽コンクール小学生の部」の作詞「地球をつつむ歌声」を手がけ、音楽で平和の心を日本中に伝えている。第二部ではこの歌を地元の八王子市立緑が丘小学校の皆さんに合唱していただいた。また町田シティオペラの2人の歌手には、平和の歌声をテーマに、オペラのアリアから唱歌、季節に合わせたクリスマスソングまで、幅広いレパートリーを熱唱され、会場は大いに盛り上がった。

10 「有志の会」と多摩地区の活動

2012年3月15日の武蔵野市民文化センターでのフォーラムを皮切りに、多摩地区に「新老人の会」の拠点を作ろうと活動を始めた。2015年2月の埼玉フォーラムを契機に本部世話人の串戸功三郎さんが中心となって『有志の会』を発足させ、毎月の定例集会をもつ中で多摩地区での活動が具体的になってきた。2015年1月からは、八王子交流会が発足し、「武蔵野うどん」をつくりながら会員交流を深める企画が実施された。また9月からはiPad勉強会が月に1度の定例会として開催されるようになり、11月には「さっそうクラブ」が非定期で開催されることとなった。

「有志の会」としては、この他にも10月26日の成城ホールでのサークルフェスタや、12月2日の八王子フォーラムアトラクションの企画などを推進したが、サークルフェスタ開催直前に串戸さんが急逝されるという悲しいアクシデントに見舞われた。

現在リーダーは不在であるが、串戸さんの目指した遺志を引き継ぎ、それぞれが自覚をもって自由な形態で活動するアメンバー集団として尽力している。

11 本部活動のトピックス

1) 各種大会の開催など

- 9月12・13日 日野原重明カップスローピッチソフトボール大田球場にて開催
オパール7リーグで初優勝
- 9月26日・27日 がん征圧リレー・フォーライフ・ジャパンに参加
- 9月27日 小泉靖子さん主催・「新老人の会」後援「戦争を伝える朗読会」を開催
- 10月13日 SSA 発足三周年交流会開催
- 3月5日・6日 「第3回福祉住環境サミット&ウェルビーイングフェア」を「新老人の会」が後援
- 3月9日～21日 秋田市エイジングフレンドリーシティの取り組みで、先進事例として「新老人の会」がとりあげられる。

2) サークル活動

- 日野原先生のお話とサークルフェスタ本部で開催しているサークルの発表会
日 時：10月28日
会 場：成城ホール
参加者：260名（22サークル中16サークルが参加）
- 11月に新サークル「あなたもオリンピックで民間外交しませんか」を結成。月2回開催

3) SSA 講座

- 4月9日 写真撮影技術 澤野新一朗さん
- 5月14日 IT社会を先取りしよう 檜山 敦さん
- 6月11日 富岡製糸場ものがたり 境野俊男さん
- 7月9日 今日から始める美しい歩き方
本田愛子さん
- 11月12日 健康長寿のための食事方法アドバイス
柏原ゆきよさん
- 12月10日 2015年 SSA 総決算
- 1月13日 美しい歩き方 立ち振る舞い
本田愛子さん

● 2015年度地方支部の活動状況（全46支部，1 ブランチ）

支部名 (設立年月日)	人数 (男 / 女 / 賛)	主な活動	サークル
福 岡 支 部 2001. 9. 8	306 (125/181)	フォーラム開催、会報発行、樹人千年の会、定例会、健康元気の会、SP の会	コーラス、韓国語、能古語ろう会、博多踊りの会、ダンスの会、草月いけ花、ipad/iphon
広 島 支 部 2002. 9. 11	291 (105/186)	支部フォーラム 新緑・山菜を楽しむ、紅葉とリンゴ狩りを楽しむ会	折り紙、コーラス
兵 庫 支 部 2002. 2. 5	242 (101/141)	フォーラム開催、会報発行 会員懇親会、地区交流会、イキイキ講座	コーラス、写真、戦争体験、エッセイ、パソコン、気功、散策、養生塾
京 都 支 部 2002. 5. 26	179 (67/112)	フォーラム開催、会報発行 年 6 回の定例会	パソコン、コーラス、史跡探訪、健康と医療、ヨーガ、美術鑑賞、俳句、カラオケ、人生悩み相談
大 阪 支 部 2003. 1. 13	256 (94/162)	フォーラム開催、会報発行、総会、健康と医療・福祉を考える会、街あるき	裏千家茶道、ノルディックウォーク、コミュニティ菜園、ヨーガ、コーラス
東 海 支 部 2002. 11. 26	218 (83/135)	フォーラム開催、会報発行例会 定例会	俳句、コーラス、朗読、自剛彊術、川柳
信 州 支 部 2003. 4. 17	202 (82/120)	会報発行、いのちの出前授業、NPO 法人「いのちと平和の森」ジョン万次郎20年の会	中信、東信、南信、諏訪デランチに分かれて活動
北 海 道 支 部 2002. 12. 6	178 (65/113)	フォーラム開催、会報発行 バスツアー、文化講演など定例会（年 8 回）	歴史を学ぶ会、お話交流会、パークゴルフ
宮 城 支 部 2004. 10. 11	149 (62/87)	フォーラム開催、会報発行 毎月の定例会	カラオケ同好会、パソコン、日野原文庫
山 梨 支 部 2005. 6. 12	149 (73/76)	会報発行 日野原杯全国コンペ主催、命の授業	自然・歴史探訪、パソコン、読み語り、コーラス、フラダンス、自分史、囲碁、カラオケ、ゴルフ
島 根 支 部 2005. 7. 26	31 (13/18)	フォーラム開催、会報発行 初夏のつどい、秋のつどい	
高 知 支 部 2005. 8. 14	211 (87/124)	フォーラム開催、会報発行 月例講演会	社交ダンス
鳥 取 支 部 2005. 8. 29	127 (66/61)	フォーラム開催、会報発行 ランチ活動	
新 潟 支 部 2005. 10. 12	288 (118/170)	フォーラム開催、会報発行 定例フォーラム、ミニツアー	
福 島 支 部 2006. 1. 28	319 (126/193)	フォーラム開催、会報発行 「道しるべ」フォーラム、	サロンの会
熊 本 支 部 2006. 4. 1	311 (136/175)	フォーラム開催、会報発行、総会、季節会、グランドゴルフ、舞台劇	戦争を語り継ぐ、童謡唱歌を歌う会、南京玉すだれ、肥後狂句添削教室 他全16
静 岡 支 部 2006. 7. 4	159 (57/102)	フォーラム開催、会報発行 毎月のサロン	俳句、コーラス、輝きサロン
宮 崎 支 部 2006. 9. 23	64 (26/38)	フォーラム開催、会報発行 いのちの授業	朗読入門
鹿 児 島 支 部 2006. 4. 1	154 (64/90)	フォーラム開催、会報発行 研修会、地方例会、知覧富屋保存活動	コーラス、語ろう会
富 山 支 部 2007. 3. 21	42 (18/24)	フォーラム参加、会報発行	
岡 山 支 部 2007. 7. 6	173 (72/101)	フォーラム開催、会報発行 月例会、旅行、戦争を語る	くれない句会、絵手紙の会、グループひととき、グリーン放談会、コーラス、ゴルフ、笑みの会、吹矢
三 重 支 部 2007. 8. 28	241 (97/144)	フォーラム開催、会報発行 月例会、フェイスブック勉強会	北勢、中勢、伊賀、南勢地区に分かれて活動
山 口 支 部 2008. 4. 28	237 (105/132)	フォーラム開催、会報発行 交流会、地区活動	パソコン、川柳
青 森 支 部 2008. 5. 28	115 (53/62)	フォーラム開催、会報発行、研修旅行 戦争を語る会	
群 馬 支 部 2008. 7. 19	71 (27/44)	フォーラム開催 模擬患者、セミナー開催	
石 川 支 部 2008. 9. 1	159 (63/96)	フォーラム開催、会報発行 会員の集い、講演会	おしゃべり会、俳句、コーラス、季節のしつらい、朗読、カメラと旅 他全11種
沖 縄 支 部 2008. 9. 1	192 (80/112)	フォーラム開催、会報発行、支部間交流 例会、戦跡をたどる、いのちの授業	カラオケ、フラサークル、方言、健康体操、琉舞、健康食、方言、ハワイアンフラ、パソコン他16種
長 崎 支 部 2009. 4. 1	121 (58/63)	フォーラム開催、会報発行 総会	男女共同参画交流

神奈川支部 2009. 4. 1	433 (162/271)	フォーラム開催、会報発行 年5会の会員交流会、FB 勉強会	五行歌、丹田呼吸、コーラス、手作りパン、観歩 の会、詩吟、丹田呼吸ボイス
千葉支部 2009. 4. 1	301 (115/186)	フォーラム開催、会報発行 郷土歴史探訪、IT 講座、ピースフェア	楽しい歌声、丹田呼吸法、楽しく体操、スポーツ 矢吹、詩吟、カラオケ同好会
和歌山支部 2009. 4. 1	235 (85/150)	フォーラム開催、会報発行 月1～2回の定例会	お手玉、マジック、コーラス、社交ダンス、腹話 術、パソコン、大人の算数、短歌、絵画、ヨーガ、 歌声サークル
徳島支部 2010. 4. 1	152 (53/99)	フォーラム開催、会報発行 定例会、芸術文化講座	合唱サークル、文化・芸術・手工芸に関すること
大分支部 2010. 4. 1	188 (72/116)	フォーラム開催、会報発行 例会、リレー・フォー・ライフ	パソコン、表現塾、俳句の会
山形支部 2010. 4. 1	128 (69/59)	フォーラム開催、会報発行	ゴルフを楽しむ、食歩き、ワインを楽しむ、真 向体操、カラオケ
愛媛支部 2010. 4. 1	128 (52/76)	フォーラム開催、会報発行 アートフラワー	
飯能ランチ 2010. 5. 21	34 (16/18)	会報発行 健康講演、ホテル鑑賞など定例会	読書、絵手紙、ゴルフ、おしゃべり会
佐賀支部 2011. 4. 1	137 (47/90)	フォーラム開催、会報発行 健康ゼミナール、歴史・文化を学ぶ、	FB、絵手紙、トリム体操
香川支部 2011. 4. 1	75 (34/41)	フォーラム開催、会報発行 会員の集い	梅を愛でる
はりま支部 2011. 10. 1	221 (82/139)	フォーラム開催、会報発行 総会、懇親会	コーラス、読書、散策、おしゃべりとグルメ、オ ペラ鑑賞、健康体操、ゴルフ
富士山支部 2011. 10. 1	202 (88/114)	フォーラム開催、会報発行 イベント	囲碁クラブ
秋田支部 2012. 6. 1	84 (37/47)	会報発行 世話人会	ハンドベル、俳句、川柳、短歌
滋賀支部 2012. 10. 1	208 (93/115)	フォーラム開催、会報発行 懇親会、いのちの授業、健康と医療講演	俳句の会、水墨の会、健康体操、史跡探訪、FB 勉 強会
長野支部 2012. 10. 1	136 (61/75)	ジャンボリー開催、会報発行 隔月の例会、金沢旅行	お母さんとあかちゃんのクラシックコンサート、 サキベシ運動
栃木支部 2013. 4. 1	175 (78/97)	フォーラム開催、会報発行、いのちの授業 総会、懇親会、講演会、忘年会、研修会	健康講話、茶話会、座禅、史跡散策、ボウリング、 ゴルフ、カラオケ、フラダンス
岩手支部 2013. 4. 1	82 (39/43)	映画とトークのつどい	
福井支部 2014. 4. 1	154 (81/73)	フォーラム開催、会報発行 日帰り旅行、歴史探訪	そばうち教室、合唱、山歩き、マジック、ゴルフ
奈良支部 2015. 4. 1	103 (44/59)	フォーラム開催、会報発行 健康講演会、平和講演会	笑いヨガ

飯能ランチは2016年3月31日をもって本部に吸収

● 2015年度「新老人の会」支部・本部主催フォーラム 開催回数全20回 集客数合計21,173人

	開催日	支部名	テーマ	会 場	動員数
1	4月7日	長野支部	第9回ジャンボリー長野大会 平和といのちこそ	ビッグハット	5,028
2	4月22日	東海支部	心豊かに輝いて生きるために	「日本特殊陶業」市民会館ビレッジホール	1,145
3	4月29日	滋賀支部	いのちを守り、平和を築く —私たちが伝えていくべきものは何か—	大津プリンスホテルコンベンションホール 淡海	1,050
4	5月30日	北海道支部	—講演と音楽のひとつとき—	かでの2・7ホール	500
5	6月7日	石川支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	金沢市文化ホール	1,030
6	6月13日	福岡支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	アクロス福岡イベントホール	700
7	6月27日	福井支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	福井フェニックスプラザ小ホール	550
8	7月11日	神奈川支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	藤沢市民会館大ホール	1,200
9	7月18日	香川支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	サンポートホール高松大ホール	650
10	9月4日	和歌山支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	和歌山市民会館大ホール	1,100
11	9月17日	京都支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	京都染織会館8階シルクホール	800
12	9月26日	青森支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	三沢市公会堂大ホール	1,000
13	10月10日	鹿児島支部	日野原重明先生104歳記念講演会	コミュニティセンター知覧文化会館	700
14	10月26日	本 部	日野原先生のお話と本部サークルフェスタ	成城ホール	240
15	11月1日	沖縄支部	創立7周年日野原重明先生104歳記念講演会	パシフィックホテル沖縄	730
16	11月13日	山口支部	日野原重明先生104歳記念講演会	萩市民館	800
17	11月21日	愛媛支部	夢を実現しよう —いのちを守り、平和を築く—	子規記念博物館大ホール	600
18	12月2日	本 部	15年記念フォーラム 私たちの生き方	オリンパスホール八王子	1700
19	12月12日	大阪支部	「夢を実現しよう」～いのちを守り、平和を築く～	南御堂 御堂会館	900
20	1月2日	徳島支部	いのちを守り、平和を築く —私たちが伝えるべきものは何か—	あわぎんホール	750
			全20回	総参加者数	21,173

報告／石清水由紀子（「新老人の会」事務局長）

ヘルスボランティアの育成と活動

健康教育サービスセンター 所在地：東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階

1 ヘルスボランティアの育成

援助・支援する人たち（ボランティア・福祉職）のための
2 day's 実践ワークショップ

2015年度は2名の講師に対人援助に関わる上での実践ワークを中心に研修を進めていただいた。

●第1回 社会活動を通して変革をめざす思考を磨く

日 時 11月16日(月) 10:30-15:30

講 師 興梠 寛 昭和女子大学特任教授

ダイナミックな民主主義では「市民社会」が活発である。ボランティア活動は市民活動を構築するために不可欠な社会参画の意志表現である。ボランティアは自由な意志により思い思いのスタイルで社会に参画する生活創造者のことであると話された。

取扱ったテーマ

これからの日本の問題は／今を変えるボランタリーライフ思考／ボランティア理念とは一共に生きる福祉社会をめざして／いのちと社会活動

●第2回 理学療法士から身体サポートの方法を学ぶ

日 時 11月30日(月) 10:30-15:30

講 師 田中 一秀 (株)AwesomeLife 代表・理学療法士

介護の基本は、支援者と被介護者が自立してできることと、援助によってできることをお互いに認識し、支援者は定型的なスタイルを固守するだけでなく、可能性を深め合う援助を心がけるべきだと話された。そのための自らの身体を知ることと、他者の身体を援助することについて、①安全な運動、身体に負担の少ない運動への理解と実践、②身体機能に障害のある方々の動作の特徴とその介助法等をポイントにした実技指導も行った。

2 LPC ボランティア研修会

テーマ 「想いをひとつに」

日 時 2016年2月10日(水) 13:30-16:00

会 場 一番町進興ビル会議室

参加者 39名

●プログラム

●講演『戦争といのちと聖路加国際病院ものがたり』を出版して



興梠先生の
グループワーク



田中先生の
杖歩行介助の実演

日野原重明 LPC 理事長

●2015年度の活動を振り返って

司会 志村 靖雄 LPC ボランティアコーディネーター

●ピースハウス病院再開の経緯について

朝子 芳松 ライフ・プランニング・センター常務理事

3 血圧測定ボランティアの育成と活動

1) 血圧測定ボランティア養成(通信)講座

本講座は1981年に開講し、当初は「血圧測定師範養成講座」と称していたが、後に「血圧測定ボランティア養成講座」と改称した。

目的は①血圧測定の意義を理解し、正しい知識と技術に基づいて自身や家族の健康管理を実践する能力を養う、②血圧の正しい測定法(聴診法)を習得し、これを他の人に教える能力を養うというものである。

東京本部と地方における通信講座を合わせて、これまでの35年間に596名の方々が受講したが、当初の目的を達成したとして本年度をもって閉講することとした。

2) 血圧グラウンドシニア

血圧測定ボランティアとして登録している人たちを対象に継続教育の一環として年間4～5回開催している。本年度は、メンバーやその周辺に認知症を発症する人が現れたため、認知症や自分や家族が抱える疾病について取り上げ、経験を分かち合い学び合うということにした。メンバーがプレゼンテーションしたものについて、道場信孝先生に解説していただきコメントをもらうという方法をとっている。

本年度は4回の開催で、延べ45名が参加した。

3) 血圧測定ボランティアの活動

本年度は16名が登録していたが、血圧測定ボランティアとしての活動はなかった。

報告／平野 真澄（健康教育サービスセンター所長）

4 模擬患者ボランティアの育成と活動

1) 模擬患者ボランティアの（SP）養成

当センターでは、「模擬患者参加による教育法」にいち早く着目し、1975年にカナダのマクマスター大学教授のHoward S. Barrow 先生を招聘し、日本の医学看護教育に模擬患者 SP (Simulated Patient / standardized patient) の概念とその活用「SP 参加による教育法」を紹介した。その後、米国・カナダから講師を招聘して、同様のワークショップを3回開催してきたが、当初はほとんど普及しなかった。日本では長い間、医師の国家試験は医学知識に限られ、臨床能力をテストする出題に欠けていることが問題となっており、ようやく1990年代に入り医療コミュニケーションや医療面接教育が取り入れられるようになった。

当センターでは1995年に「医学・医療の教育におけるSPの役割を理解して、新たにSPとしての能力を開発し、教育に積極的に参与することで社会に貢献すること」を目的に模擬患者ボランティアの養成に着手した。プログラムの概要は月1回、2時間、全15回、トータル30時間のプログラムを組んだ。受講生は当センターの「ヘルスボランティア講座」「ホームケア・アソシエイト講座」などを修了していることを条件に募集した。日野原理事長が直接指導を行い、疾患を完全に模倣できるような訓練を行った。受講生は自分に適した疾患を選択し、その疾患の症状から、身体所見までを自分に置き換えて病歴を作成した。その病歴をもとに患者になりきって指導者（医師）の診察を受ける、という訓練を行った。その年にパーキンソン、狭心症、偏頭痛、うつ病、リュウマチ、くも膜下出血、腎臓結石、糖尿病、股関節炎、肺気腫、胆石、気胸等の疾患をより完全に模倣できる16名の模擬患者を養成した。しかしながらその当時はまだSPの要請が少なく当センターでのセミナー等で年に数回活用される程度であった。

ところが2005年度より、患者ときちんと話をして丁寧に診察できる医師や歯科医師を育てるために全国108の医学部、歯学部のある大学が4年生を対象に本格的に共用試験（OSCE）を実施するようになると、SPの要請がさかんに寄せられるようになった。当センターでは医科大学等からの要請にこたえるため2003年度から新しい形でのSPボランティア養成講座を始めた（表1）。養成講座の目的は同じであるが、「疾患を模倣する」ことより、「医学生態度やコミュニケーション能力を高めるために」訓練されたSPの養成を行っている。そのためには医学教育、看護教育についての理解を深めていくことと、一つ

表1 模擬患者学ボランティア養成講座入門編プログラム

開催日	時間	テーマ	講師
第1回 11月27日(金)	10:00 ～12:00	LPCと模擬患者について基本的な理解 「模擬患者ボランティアのQ&A」	福井 みどり LPC 模擬患者ボランティアコーディネーター
	13:00 ～14:00	看護教育における模擬患者の役割	伊藤 まゆみ 共立女子大学看護学部 教授
	14:10 ～15:00	LPC 模擬患者ボランティア活動の紹介他	LPC 模擬患者ボランティア
第2回 12月4日(金)	10:00 ～12:00	模擬患者ボランティアの体験学習Ⅰ	LPC 模擬患者ボランティア
	13:00 ～14:00	医学教育における模擬患者の役割	原田 芳巳 東京医科大学医学部医学科総合診療医学分野 准教授
	14:00 ～15:00	模擬患者ボランティアの体験学習Ⅱ LPC 模擬患者ボランティアになるために	福井 みどり LPC 模擬患者ボランティアコーディネーター



● SP 養成講座



● 実習



一つの実習で何がSPに求められているかをよく理解することが大切となる。

SP 養成講座は現役のメンバーと新しいメンバーが共に学ぶ機会となっている。今年度の講座では模擬患者ボランティアの実際を多くの方に知っていただくことを主眼に開催した。1 回目はQ & A方式による模擬患者の紹介、最新の看護教育についての理解、ロールプレイなど、2 回目は実際の定例会において、東京医科大学の原田芳巳先生から「模擬患者の養成について」と「医学教育の現状について」講義をしていただいた。

2) SP ボランティアの活動の実際と研修

(1) SP ボランティアの活動の実際

1995年度から養成が始まったLPC 模擬患者ボランティア (SP) は、当初はなかなかSPを要請されることが少なく、当センターが行うセミナーなどの参加のみで年に2～3回ほどであった。しかし、2004年度から全国108の医学部、歯学部のある大学が4年生を対象に本格的に共通試験 (OSCE) を行うことになり、当センターへの要請依頼も2005年当時は22件であったのが、2006年度には倍以上の依頼があり、ここ数年活動依頼数は60件を超え、毎月どこかの学校で5回以上活動していることになる。

2015年度の活動回数は定例会なども入れると延べ95回、参加者は延べ778名、そのうち延べ73回371名の派遣を行った。

活動回数は毎年増加傾向にあるが、年々同じ大学の他の学科からの依頼が増え、同じ大学に2回、3回と通うことが多くなっている (表2)。

模擬患者の要請先別活動状況は、看護系28回・参加SP142名、医学系23回・参加SP102名、歯学系7回・参加SP50名、セミナー6回・参加SP12名、薬学系4回・参加SP40名、作業療法系3回・参加SP21回、病院2回・参加SP4名となった (図1)。

医学系では2006年度より、東京医科大学医学部5年生の臨床実習に「SPとの医療面接実習」が組み込まれ、授業への参加が9年間継続して実施されている。また2014年から1年生のOSCE、今年度は医学・看護・薬学の共修という大学として初めての試みの実習に参画した。

学生は1年次からSPとのロールプレイを通して患者とのコミュニケーションの大切さ、言葉使い、マナー等を学習している。また5年次には鑑別診断の他に、傾聴技術、患者や病状を理解するための技法、医療者の心理と患者の心理などを学習している。医学部におけるSPの役割はOSCEのツールとしてだけではなく、日々の医

表2 2015年度の模擬患者ボランティア活動状況

活動実施日		要請機関(大学)	募集人数
月日	曜日		
4/7	火	東京医科大	2
4/21	火	東京医科大	2
4/30	木	武蔵野大	5
5/7	木	明海大歯学部	2
5/9	土	明海大歯学部	7
5/14	木	明海大歯学部	15
5/14	木	共立女子大	2
5/19	火	東京医科大	2
5/27	水	RICE カウンセリング心理学研究所	4
6/2	火	東京医科大	2
6/4	木	明海大歯学部	6
6/14	日	「新老人の会」富士山支部	2
6/16	火	東京医科大	2
6/22	月	戸田中央看護専門学校	4
6/24	水	東京医科大	19
6/25	木	戸田中央看護専門学校	4
6/26	金	7/4 慈恵医大大学説明会	
6/29	月	相模原看護専門学校	4
6/30	火	東京医科大	2
7/3	金	NPOその人を中心とした認知症ケアを考える会	2
7/4	土	慈恵医大	12
7/9	木	北里大看護学部	7
7/9	木	東京工科大作業療法学科	3
7/10	金	帝京大薬学部	10
7/14	火	東京医科大	2
7/14	火	明海大歯学部	2
7/18	土	帝京平成大看護学科	6
7/22	水	明海大歯学部	9
7/23	木	明海大歯学部	9
8/25	火	東京医科大	2
8/25	火	共立女子大看護学部	5
8/26	水	共立女子大看護学部	5
9/15	火	東京医科大	2
9/26	土	LPC	1
9/29	火	武蔵野大看護学部	5
10/1	木	平塚看護専門学校	1
10/1	木	イムス横浜国際看護	6
10/6	火	東京医科大	2
10/7	水	東京医科大	8
10/7	水	東京都病院経営本部	2
10/9	金	帝京大薬学部	11
10/9	金	東京工科大看護学科	12
10/14	水	東京医科大	8
10/15	木	国際医療福祉大	3
10/20	火	東京医科大	2
10/21	水	東京医科大	8
10/28	水	首都大作業療法学科	10
10/29	木	よこはま看護専門学校	1

活動実施日		要請機関(大学)	募集人数
月日	曜日		
10/31	土	慈恵医大	15
11/5	木	東京都病院経営本部	2
11/10	火	戸田中央看護学校	4
11/12	木	戸田中央看護学校	4
11/17	火	東京医科大	2
11/18	水	北里大看護学部	7
11/26	木	よこはま看護専門学校	4
11/28	土	目白大作業療法学科	5
11/30	月	戸田中央看護学校	5
12/01	火	東京医科大	2
12/02	水	東京医科大	12
12/07	月	戸田中央看護学校	5
12/10	木	北里大看護学部	7
12/15	火	東京医科大	2
2016/1/7	木	目白大作業療法学科	6
1/12	火	東京医科大	2
1/14	木	東京医科大	12
1/14	木	横浜創英大	6
1/21	木	横浜創英大	6
1/25	月	自治医科大	1
2/2	火	東京医科大	2
2/16	火	東京医科大	2
2/20	土	LPC	1
2/25	木	東京医科大	2
3/8	火	帝京大薬学部	11
3/12	土	LPC	2
	合計		371

学教育へ参画することで、一般市民としての声をより医学教育に反映できていると感じている。

参加した SP はそれぞれに学生へのフィードバックの難しさを感じており、学生のプライドを傷つけずに患者の感情や心理状態が説明できるようにフィードバックの練習に力を入れている。常に仲間同士切磋琢磨していることが SP の向上心に繋がっている。

また、一般病院の医師や看護師への研修に参画する機会も継続している。2015年度も東京都病院経営本部からの依頼があり、都内の病院で臨床医や医療従事者の患者サービス向上への研修に参加した。それらの活動は SP ボランティア自身のやりがいにつながるよい体験となっている。

看護学部からは、基礎的な看護技術援助の SP 役としてだけでなく、血圧測定等バイタルサインのとり方からシーツ交換まで、看護技術の OSCE として SP を活用

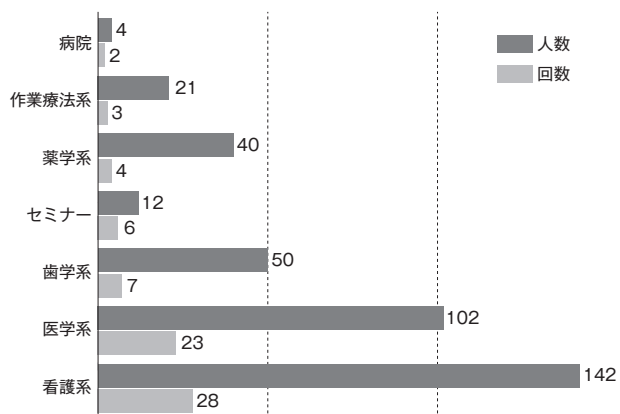


図1 2015年度模擬患者要請先別活動状況

する学校も増えた。また認知症患者とのコミュニケーション演習依頼や高齢者とのコミュニケーション演習もあり、学生にとっては実際の高齢患者や認知症患者に触れ合う前のよい学習となっている。また高齢のSPは自分たちが学生の役に立っていることに大いに満足している。

その他の活動として今年度特記することは、「NPO その人を中心とした認知症ケアを考える会」からの依頼で、認知症ケアのビデオ作りに参加したことである。出来上がったテキストとビデオを見て、改めて模擬患者の役割の幅広さを実感している。

(2) SP（模擬患者ボランティア）研修

SPは学生の教育に参画していることを強く意識し、人を育てる視点と姿勢が必要である。そのために研修は必須となっている。LPCSPグループとしてメンバー間の連絡徹底や一定のSPとしての質を保持できるように研修を重ねている。

研修部を立ち上げ、毎月の定例ミーティングで行われるロールプレイやグループワークを多く取り入れた研修を行っている。東京医科大学の臨床実習参加メンバーへの研修は個別指導が行えるまでになっている。

a. 定例ミーティングにおける研修

定例ミーティングは毎月1回SPグループ全体で集まる唯一のミーティングである。通常毎月第一金曜日10時30分からお昼をはさみ15時までに行っている。ミーティングは、1) ロールプレイ研修、2) 活動報告、3) グループワーク、4) 活動先大学講師によるレクチャー、5) 事前打ち合わせなどを中心に行っている。

b. ロールプレイ研修

主に東京医科大学で行われている臨床実習へ参加するSPのための「ロールプレイ、フィードバック、評価の練

習」といったロールプレイ研修を行っている。ロールプレイは、学生役のSPと東京医科大学から提示されているシナリオ役のSPとで行われる。初心者のSPはシナリオの情報を間違いなくスムーズに患者らしく伝えることで精一杯になってしまう。学生の授業において求められているSPの役割は、上手に患者役を演じることよりも、いかに学生が学んだ知識をもとに患者に質問を出せるかが重要である。ところがSP初心者の場合、どうしてもシナリオで覚えたせりふを忘れないうちにたくさん話そうとするために情報を出しすぎ、学生がほとんど質問できずに終了してしまうことがある。学生は黙っていればすべてSPが話してくれるのでとても楽で、「学生にとってのよい患者役」になってしまい、それでは教育の効果はあまりない。大切なことは、SPは「より患者らしく演じる」ことよりも、「学生がどのような質問をすれば的確に患者から多くの情報収集ができるか」という学習の機会を作ることが大切なのである。しかし、SPは頭ではそのことが理解できても、どうしても上手に饒舌に演じることのほうに熱心になってしまう。そのためにも繰り返し学生の質問に対して余分な情報を出し過ぎず、一問一答で対応することの練習が必要となる。

次にSPに求められていることは、学生へのフィードバックである。フィードバックとは「学習者の態度や言動がSPに及ぼした影響について学習者に伝えるコミュニケーション」である。教育側からSPに期待されていることは、特に学生の服装や態度など教師が注意してもなかなか素直に受け止められない学生に対してSPから指摘してほしいということである。

さらに学生を傷つけず学生のモチベーションをあげるという教育的関わりをしなくてはならない。例えば「服装がだらしないのでもっときちんとしてほしい」というような教師の視点ではなく、「服装があまりラフだとちゃんと診察してもらえるかと心配になりました」と患者の視点でフィードバックすることが大切なのである。SPがフィードバックしたひと言がよくも悪くも学生に大きな影響を与える。SPの練習ではまず学生のよいところをほめ、悪いところを指摘し、最後によいところをほめる練習をしている。学生に「もっと聞いてほしかった」というフィードバックは「ないものねだり」で、あくまでもSPは学生とのロールプレイの中でのやり取りで、実際に起きた自分の中に湧き上がる気持ちを大切に学生に戻すことが望まれている。「もっと聞いてほしかった」という言い方ではなく、「悪い病気ではないかと不安だったの

●SP ボランティアの多岐にわたる研修風景



ロールプレイ（上・下）



定例会



グループワーク（上・下）

で、その気持ちを話したいと思っていました」という自分の気持ちを明確にしていくことである。また、「とても元気でよかった」というのは漠然としていて学生の印象に残らず、「うなずいて聞いてくれたのでとても安心して話せました」とフィードバックすると、学生は何がよかったのかよく理解する。このような具体的な点をお互いに出し合いながら研修を行っている。

SPによっては、学生とのやり取りの間に何が起きていたかをまったく記憶にとどめていられなかったりすることが多くあるので、繰り返しSP同士で練習する必要がある。悪い面はすぐに指摘ができるが、なかなかよい面を探すことができなかつたり、反対に経験者になるとよい面ばかり強調し、悪い面を指摘できないSPがいるので、繰り返しの研修が必要となる。

3つ目は評価の練習である。医学部や看護学部を行うOSCEではフィードバックのほかにSPの評価を求められることがあり、評価の練習を行っている。学生の態度を評価することはとても難しく、評価者の主観によってかなり差が出ることがあると感ずることがある。目に見える髪形や服装などでは大きな差は出ないが、「この学生によく話を聞いてもらえたか」とか、「この学生に話を理解してもらったか」などの項目については、SPの主観によって「とてもよい・5」の評価と、「とても悪い・1」の評価を同じロールプレイから出すことがあり、大きなばらつきが出ることがわかった。あまりにも離れた価値観については、なぜそのように評価をしたかを全体で検証し、どのSPに当たっても評価がぶれないような工夫

をしている。

SPの評価は参考程度で直接的な学生の評価にならないのは幸いであるが、どのSPにあたっても同じように評価できるように常に練習を怠らないような努力が求められる。

3) 活動報告

毎月の活動をまとめて大学担当者から報告をしてもらっている。

報告は活動内容と参加SPの感想、大学担当者からの客観的な感想、最後に教育側のコメントで全体のSPで共有しておいたほうがよい内容、特にSPの演技やフィードバックについて学びとなる内容を報告してもらっている。また、活動に初めて参加した初心者には1分間で自分の感想を述べることをノルマとしており、「1分間で話す」練習を行っている。

4) グループワーク

月に1回のミーティングであるので、昼食の時間はテーマに沿ったグループワークの時間となっている。4月、5月の新しいボランティアを迎えての月はお昼休みには「自己紹介ワーク」「LPCボランティアの約束事」「活動に当たっての注意事項」などから、「シナリオについて」「学生からの曖昧な質問にどのように答えるか」などについて行っている。また特にテーマがないときには初心者のロールプレイをグループで行うなど、お互いのレベルアップをはかれるように工夫している。

表2 2015年度月別研修内容 *ミニ講座は新メンバーを対象としたもの

月	ロールプレイとフィードバック	グループワーク
4月	SP ボランティアの約束と心構え ミニ講座（講座の進め方について）	今後の活動について 東京医科大学の共感について
5月	明海大学のシナリオに沿って ミニ講座（SP デビューまで）	シナリオの覚え方、情報の出し方、 * 帝京大学説明（準 OSCE）
6月	原点に返って ミニ講座 （ロールプレイ体験の振り返り）	特徴のあるドクターとの対応とフィードバック * 帝京大学説明（授業）
7月	共感について	言語・非言語（態度）による伝わり方伝え方
8月	教育的なフィードバックについて	模擬患者の立ち位置について
9月	フィードバックのあり方について	フィードバックで触れて良いこと、好ましくないこと * 東京慈恵会医科大学説明 （医療倫理演習）
10月	東京医科大学のシナリオに沿って	シナリオに忠実に演じ学生に伝わるフィードバック * 東京医科大学説明（医学・看護・薬学3部合同演習について）
11月	次に伸びるフィードバックについて	学生を大切に教育の求めに応じる
12月	模擬患者養成講座	養成講座受講者と共に
1月	1年の目標	グループ作り、各自の目標発表
2月	ロールプレイ フィードバックの入門編	フィードバックを受けて学生が自己を振り返り確認できる事が成長につながる
3月	避けたいフィードバック 今年度の活動を振り返り次の活動につなげる	フィードバックとして問題になる表現をどのように言い換えるか、グループで検討し発表、今後に向けての意見交換 * 帝京大学実習説明

5) 個別研修

活動派遣先が決定したら必ず担当メンバーが集まり、派遣内容の確認とシナリオの打ち合わせ、役作りの練習を行うように義務づけている。しかし1カ月に2件、3件と派遣先が重なると、学習や練習をせずに大学に赴くこともしばしばあった。看護系の大学では身体提供だけだからと打ち合わせもなしに行くこともあったが、どのような活動にも模擬患者に与えられた役割があり、SPとしてのフィードバックはどのような活動にも求められる。研修部で各派遣先のシナリオのチェックや参加者への練習の強化を図っている。

6) 派遣先大学講師からのレクチャー

初めてSPを要請してくる大学には、できるだけ定例ミーティングで大学の概要、授業の概要、SPの役割、大学として期待していることなどについて30分から1時間のレクチャーをしてもらっている。医学部のみでなく、看護技術のOSCEや認知症患者への関わりなど、新しいテーマについてSPの関わりがある時にはSPへのレクチャーをお願いしている。

報告／福井みどり（健康教育サービスセンター副所長）

カウンセリング—臨床心理・ファミリー相談室

健康教育サービスセンター 所在地：東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階

臨床心理ファミリー相談室は1996年に開設され、現在の活動内容は、1. 個別カウンセリング、2. 企業のメンタルヘルス、3. 教育活動、4. その他の活動として石巻の仮設住宅での活動を継続している。

1 個別カウンセリングについて

1) 健康教育センターでのカウンセリング

カウンセリングの目標は、自己の世界の確認と柔軟性の養成にあり、人の成長と発達への援助活動である。しかしカウンセリングを利用するクライアント層のうち、子どもでは不登校や摂食障害、大人ではうつ等の気分障害や不安神経症など精神疾患的な問題を抱えたクライアントが多いのが現状である。当センターのように医療機関外で行うカウンセリングでは、精神疾患的な問題を抱えたクライアントを信頼のできる精神科医や他の医師にいかに関わりよくコンサルテーションできるか、医師と連携をとりながらカウンセリングを継続していくかが大きな課題となっている。

健康教育サービスセンターでの個別カウンセリングは複雑で多岐にわたり、さまざまな相談が持ち込まれている。カウンセリング手法もケースバイケースである。TEG（東大式エゴグラム）による性格分析、SDS（うつ性自己評価尺度）をベースに必要と思われる心理テストをベースに、認知行動療法としての「自己の世界の確認と柔軟性の養成」を心がけている。

2) 新老人のためのコンサルテーション

2004年度より新老人を対象にしたコンサルテーションを行っている。身体的な問題についての相談と今後の生き方、介護を受けながら生活していくためにどのようにしたらよいかという相談が多くなってきている。

3) 聖路加レジデンス入居者を対象としたカウンセリング

週1回3時間を聖路加レジデンス入居者のための個別カウンセリングを行っている。高齢者の成長発達課題としての生き甲斐やプロダクティブエイジングへの取り組みへの支援が目標である。カウンセリングの手法としては回想法を積極的に取り入れて希望するクライアントにはライフレビューを行っている。今年度はご夫婦で入居

された方が夫もしくは妻を看取るケースも多くなり、死別後のグリーフケアもカウンセリングに活用した。

2

企業におけるメンタルヘルス対策への取り組み

2006年度よりケア・アカデミー葉っぱのフレディ、モレーンコーポレーションと提携し、1カ月に1回10時から17時の枠内で職員へのメンタルヘルス対策へ参加している。

自発的にカウンセリングを受けたい職員や、上司の勧めでカウンセリングを受けたほうがよいといわれた職員、新入職員などが対象である。新入職員の希望者には性格検査（TEG）を行い、自分の性格傾向について理解を深め、実際の仕事に役立ててもらっている。また全職員には年1回総合的なメンタルヘルスチェックを行い、疲労度、ストレス度、うつ度を自己評価してもらっている。心療内科、精神科医受診を希望する職員にはコンサルテーションを実施している。うつ傾向の強い職員には継続的なフォローを行っている。

その他、仕事場での人間関係の持ち方や職員の家族のメンタルな病気に対しての相談やコミュニケーションの持ち方などの相談も持ち込まれている。

2015年度相談件数

1 個別カウンセリング	41
2 葉っぱのフレディ	51
3 聖路加レジデンス	42

延べ人数	134件
心理テスト	51件

3

教育活動

カウンセラーとして以下の教育に携わった。

テーマ 人間援助論—自己理解・他者理解

日時 11月9日 14:35～17:35

受講者 51名

場所 東京女子医科大学看護学部

テーマ 援助過程の理論と技術

日 時 11月16日 13:00~17:35

受講者 51名

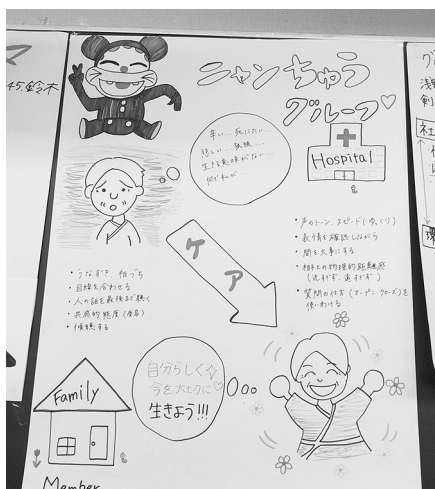
場 所 東京女子医科大学看護学部

テーマ 援助者の関係性

日 時 11月25日 13:00~17:35

受講者 51名

場 所 東京女子医科大学看護学部



グループ活動で
援助についての
理解を深める

4

その他の活動（東日本大震災被災者支援）

東日本大震災被災者支援活動はLPC 臨床心理ファミリー相談室の社会的貢献活動として重要なものであるので報告する。

支援活動は被災直後から5年後の今日まで継続している。支援の形も当初には仮設住宅の被災者個人に対するストレスの解消と被災体験の聞き取り、傾聴活動から、現在は1)被災地のリーダーの養成、2)被災者のエンパワーメントを高める活動、3)小物作りの販売支援活動に重点を置いている。

1)被災地のリーダーの養成としてコミュニティリーダー養成講座は2015年度は3回、延べ人数77名、2)仮設住宅の被災者のエンパワーメントを高める活動として芸術療法（コラージュ、歌の会、落語の会など）は4回、延べ参加人数143名であった。3)小物作りの販売支援活動として13回、総額2,504,950円を作り手の被災者に直接送ることができた。

報告／福井みどり（臨床ファミリー相談室室長）

LPC 国際フォーラム2015

1

A Full-day Narrative Medicine Workshop in Tokyo

リタ・シャロン教授を迎え

ーナラティブ・メディスン実践ワークショップ

日 時 2015年6月21日(日) 10:00~17:00

会 場 聖路加国際大学301教室

参加者 76名

●講 師

Rita Charon, M.D., Ph.D Executive Director,
Program in Narrative Medicine Professor of Clinical Medicine,
Department of Medicine, College of Physicians & Surgeons of
Columbia University

斎藤 清二 立命館大学大学院応用科学研究科特別招聘教授
岸本 寛史 高槻赤十字病院緩和ケア診療科部長

●概 要

21世紀初頭の米国においては医療が病いと生きる患者への関心を欠き、その語りに耳を傾けるどころか、患者にとって居たたまれない思いを抱かせるものであるとの反省があり、本来あるべき方向へ向かわせる手立てとして「ナラティブ・メディスン」を提唱したと、講師の Rita Charon 教授は説明し、「ナラティブの巡礼の1日」と名づけたワークショップを始められた。このワークショップは以下の4つの部分で構成され、村上春樹氏の小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の抜粋を題材にしながら進行していった。

1) Opening : 導入

記述演習を織り交ぜたナラティブ・メディスンの概要理解

2) Narrative Listening : 物語的傾聴

言葉および音楽をその意味を含めて聴き取る演習

3) Co-creating Narratives : 物語の共同創造

相互に語り、聴くことを通してナラティブが生起する過程を体験する演習

4) Unlocking Metaphor : メタファーの扉を開く

小説におけるメタファー（隠喩）に着目し、その働きを理解する演習

このワークショップで、ナラティブの重要なスキルである語ることと聴くことの深淵な世界を体験した。語る

右：Charon 教授

下：参加者同士で意見を交わしつつワークショップを進行



2

より質の高いケアをめざす Next Step

医療と対人援助におけるナラティブ・アプローチ

ー語りから紡ぐ援助の関係性を学ぶ

日 時 2015年8月8日(土) 9:30~17:30

8月9日(日) 9:00~12:30

会 場 聖路加国際大学アリス C. セントジョン
メモリアルホール

参加者 1日目134名、2日目105名

●プランナー

斎藤 清二 立命館大学大学院応用科学研究科特別招聘教授

●海外講師

Deepthiman Gowda, M.D., M.P.H.

Associate Professor of Medicine at Columbia University Medical Center



Gowda 先生はナラティブ・メディシンへの具体的なアプローチを教示

会場の参加者と意見交換をする講師陣



日本人講演者が Gowda 先生を囲んで

●国内講師

尾藤 誠司	国立病院機構東京医療センター臨床研修科医長
山内 英子	聖路加国際病院プレストセンター長
岸本 寛史	高槻赤十字病院緩和ケア診療科部長
栗原 幸江	都立駒込病院緩和ケア科心理療法士

●概 要

ナラティブ・メディシン (Narrative Medicine : NM) は、6月21日(土)に行われたプレ国際フォーラムで講師を務められた米国コロンビア大学の Rita Charon 教授によって提唱され、Charon 教授のもとで教育実践を行う Deepthiman Gowda 博士らのコロンビア大学の教育グループが広めてきた医療における新しいムーブメントである。今の医療界が抱えている問題点に取り組む中で、本来医療は何のためのものであったかとの原点に立ち戻ることによって以下のような課題が浮かびあったと Gowda 先生は導入部で語られた。

それは下記のようにまとめられた。

- ①どうすれば患者の苦しみによりよく応えられるか。
- ②どうすればケア提供者である自身の人間性を再認識できるか。
- ③どうすればより連帯の強いチームの構築ができるか。
- ④どうすれば自身の仕事から深い満足を得ることができるか。

- ⑤どうすれば臨床家やチームが使命感と繋がることを援助できるか。

ナラティブ・メディシンは「“物語能力 (narrative competence)” を通じて実践される医療」と定義され、この物語能力という概念こそが、ナラティブ・メディシンのキー・コンセプトとされており、前述の5つの問いに答えていく試みといえる。この物語能力は、① attention (配慮・他者のために完全にそこに存在する能力)、② representation (表現・知覚したものをどのように表現するか)、③ creativity (創造力・創造・好奇心を培い何を発見するか)、④ affiliation (連携・連携し分断を結びつける) の重要な4領域があるとされる。

1日目に、Gowda 先生はこれらの解説を丁寧にされ、臨床現場で患者援助に熱心に取り組んでいる国内講師が患者や家族の語りにどう向き合っているかを報告された。このセッションはナラティブの実践に結びつけるものとして参加者にとっても興味深かったようである。

2日目には、コロンビア大学において学生 (医師、看護師、研修医、MSW) や医療者などを対象とした多職種連携教育で行われているプログラムの中で、内なる意識を目覚めさせるためのワークショップを実際に展開し解説された。参加者は、セザンヌやルーベンスの絵画、あるいはジャズやすぐれた小説や映画を観賞することで attention を経験し、記述することで representation の手法を理解し、affiliation として医師と患者、医師と看護師、あ

るいは病院とコミュニティ，人種，文化，健康と不健康などの分断された二者間の橋渡しなどの連携を図るスキル獲得のための体験をすることができた。

先の6月のプレフォーラムと今回のフォーラムとの連続したプログラムで多くの学びを得たが，またナラティブ・メディスンが持つ奥深い世界に一步踏み入れた段階といえよう。

医療の核心をなす基本的なスタンスに触れるこれらの学びは継続して取り上げていきたいと考える。

●参加職種内訳

看護師 52名（42%）

医師 24名（19%）

医学生 12名（10%）

看護教師 11名（9%）

その他

●報告書の作成

タイトル「International forum 2015 医療と対人援助におけるナラティブ・アプローチ—語りから紡ぐ援助の関係性を学ぶ」

目次 フォーラム開催にあたって／日本におけるナラティブ・アプローチの現状／ナラティブ・メディ



報告書

シンの概観／プライマリ・ケア現場におけるナラティブ・アプローチ／がん治療における患者の語りとどう向き合うか／いわゆる“せん妄”の語りとどう向き合うか／スタッフケアとナラティブ・アプローチ／〔ワークショップ〕Gowda 講師による医療職のための物語能力育成講座／〔ディスカッション〕患者と歩むナラティブ・アプローチの浸透のために／総括

A 4 版，500部作成

報告／平野 真澄（健康教育サービスセンター所長）

ライフ・プランニング・クリニック 教育的健康管理の実践

ライフ・プランニング・クリニック 所在地：東京都港区三田 3-12-12 笹川記念会館11階

1 クリニックの目指すもの

クリニックは、財団の理念である「国民の一人ひとりが“健康”についての理解を深め、“自分の健康は自分で守る”ことができるように動機づけ、健康行動が実践できる方略を提言し、全生涯にわたり、生活の質（QOL）が豊かに保たれるように援助する」ことを、日々の診療を通じて実践することを目指している。日本人の平均寿命と健康寿命は共に世界トップクラスであるが、両者のギャップ、即ち、介護が必要な期間も世界最長である。これは、平均寿命が延びるほどには、健康寿命が延伸しないことによる。生きている限りは元気で人生を過ごすためには、要介護となってしまう原因をつくらないように、若い時からの配慮が求められる。要介護の主な原因は、脳卒中、心不全、認知症、フレイル・サルコペニアとそれに伴う骨折や転倒などである。それらの多くは予防、あるいは発症を遅らせることが可能である。

クリニックでは、健康教育とその実践を医療者がチームで支援するとの日野原重明理事長の理念を全員が共有し、人間ドックを受ける個々の受診者について生活習慣、職場と家庭の環境、人生観や性格に合わせて実現可能なプランを受診者と共に考え、実践を継続するための支援を行っている。ナースは中心的な役割を果たしているが、健診は予約の受付から始まるといわれるように事務職も重要な一員であり、さらに受診者の案内などを担当しているボランティアの方々を含め、スタッフ全員が受診者に寄り添ったチーム医療を心がけている。当クリニックの個人受診者の反復受診率が高いのは、そのことが評価されていると考えている。また、港区民健診、およびネットを介して健診を予約する個人受診者数が増加しているが、それらの受診者は数多い健診施設の中から当クリニックを自ら選択しておられ、その方々の反復受診率を高く維持していくことが重要である。

2 診療体制の現状と将来方針

1) 将来構想

JR 山手線新駅開業に合わせて笹川記念会館が全面的に改装されることになり、クリニックも日本財団と一般財団法人 BOATRACE 振興会（ボートレース振興会）のご配

慮により新装される予定である。今後、日本財団、振興会、競走会、(株)笹川記念会館と相談しながら、プランを立てることになる。

1977年、新装なった笹川記念会館にクリニックを移転した際は、当時の日本船舶振興会の笹川良一会長の支援により最新の機器を整え、日野原重明理事長が理想とする良心的で高度な医療を実践するための実験的な施設としてスタートした。このたび新しくなるクリニックは、公益財団法人である日本財団の支援を受けての生まれ変わりであり、最新の設備を導入し、多くの人々が良心的で最高の健診と診療を受けることができるクリニックを目指したい。

2) 聖路加国際病院、聖路加メディローカスとの連携

午前中は主に健診としての問診、診察、検査を行い、午後は結果説明と一般診療とする体制に変化はない。健診後に CT、MRI、大腸内視鏡などの精査が必要な場合は聖路加メディローカスを主な紹介先とし、治療が必要な場合は聖路加国際病院の専門医に紹介するようにしている。さらに、聖路加国際病院救急部において緊急が必要な場合の対応をいただいている。

今後も聖路加国際病院の連携施設として、信頼される医療を提供していきたい。

3) 婦人科診療体制

2014年度から、女性医師が婦人科健診を担当するようになり、女性受診者が増えている。女性受診者の要望に応えることは、将来の健診受診者増に必須と考えられ、優秀な女性医師による婦人科健診をさらに充実させる予定である。

4) 胃内視鏡検査

ヘリコバクター・ピロリ菌の除菌適応判定と除菌後の経過観察に胃内視鏡検査が必要なこともあり、胃内視鏡を希望する受診者が増えている。今年度から内視鏡検査数を1日あたり2名に増やしたが、予約がとりにくい状況である。内視鏡室が1室しかないことから予約枠には限界があるが、次年度は非常勤の増田医師の協力を得て、内視鏡の電源設備を更新し、また経鼻内視鏡を追加するなど、より快適で精度の高い検査を実施していくつもりである。

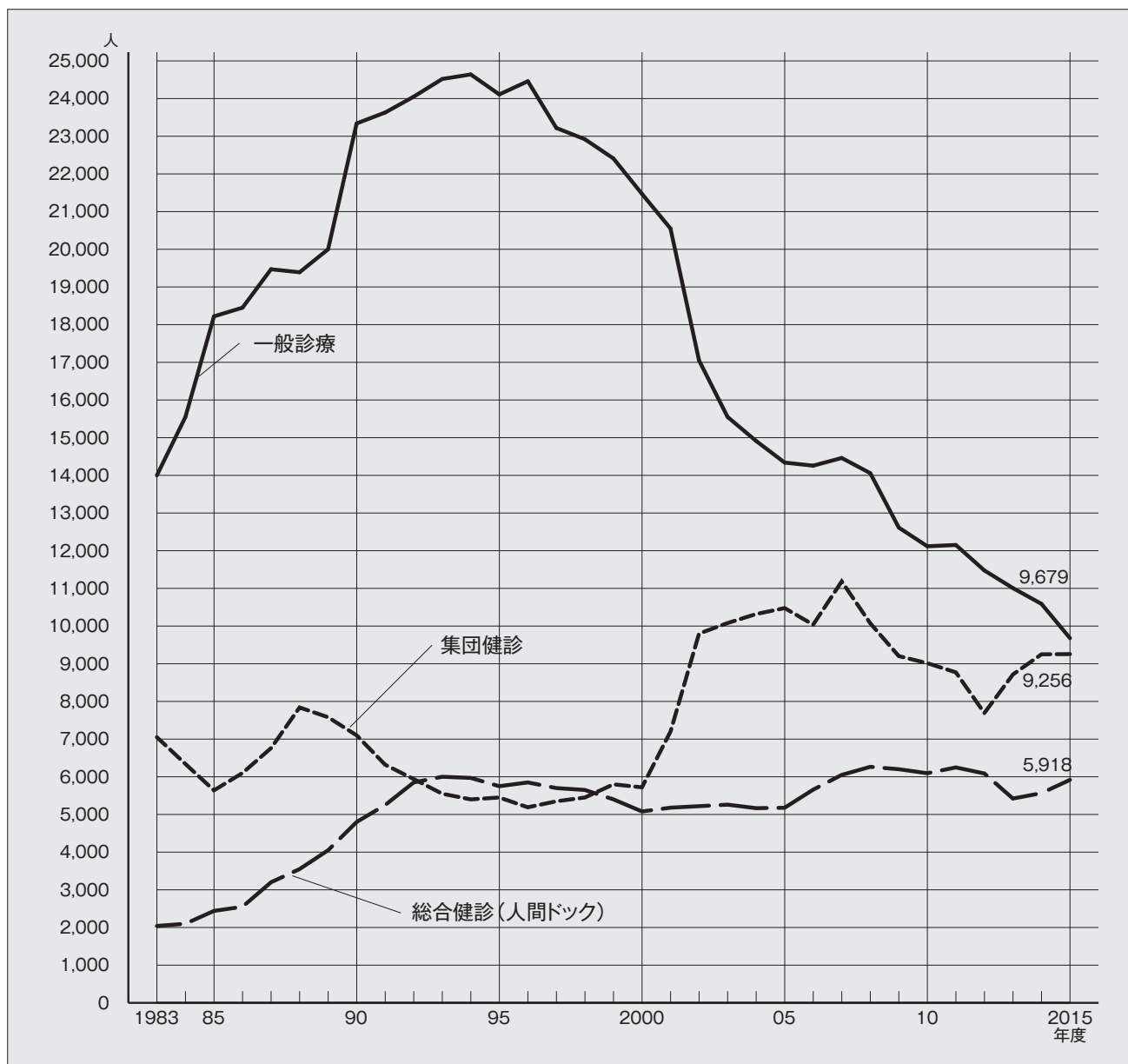


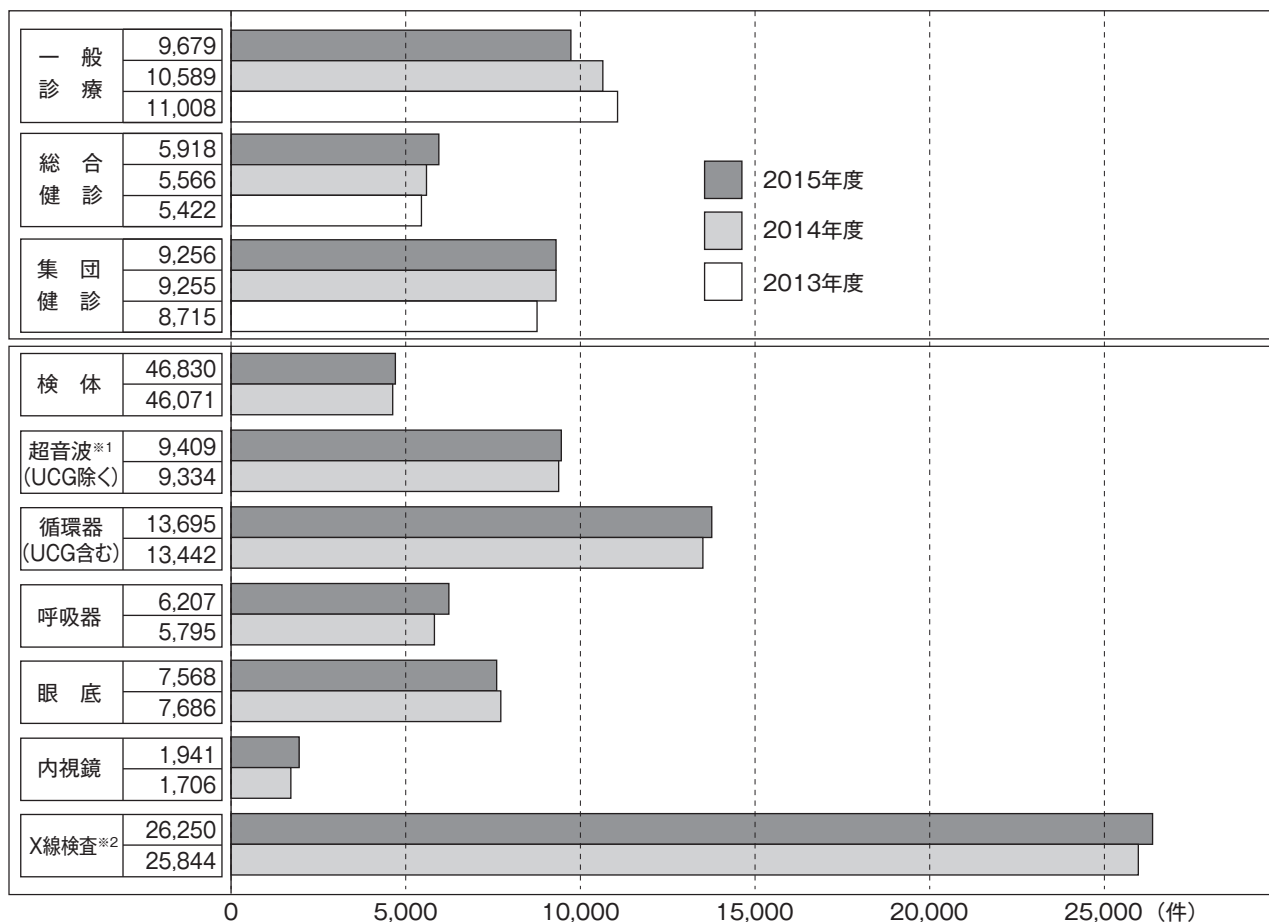
図1 受診者数の推移

5) アメニティ

医療施設のアメニティ向上は、快適な医療を提供する上で重要なことは当然であるが、職員が快適に働くことができることは、医療ミスを減らし、結果的に質の高い医療を提供する上で役立つ。2014年度には、ボートレース振興会、笹川記念会館と競走会の支援によりトイレが全面改装された。今年度は、カーペットの張り替え、老朽化が目立つ壁面を修復した。クリニックの新装が予定されているので、大きな改修はできないが、アメニティ向上を図っていききたい。

6) 高齢者健診

個人受診者と港区民健診受診者の増加に伴い高齢受診者が増えており、高齢者の疾病構造とリスクに応じた健診を実施する必要がある。高齢者にとってどのような健診が必要なのかについて十分な知見はないが、「新老人の会」の会員であるヘルス・リサーチ・ボランティアを対象にした検討では、5m歩行速度などが認知機能低下予測に重要なことが示されている。今後、高齢者に適した健診プログラム開発を開始し実践することを予定している。



※1 (超音波検査前年比内分け：上腹部－267、乳房＋250、婦人科＋81、甲状腺＋11)

※2 (X線検査前年比内分け：胸部＋347、胃部－218、骨量＋20、マンモ＋257)

図2 2015年度来所者数（前々年および前年との比較）・検査件数（前年との比較）

3 診療の概要

受診者数の推移を図1に示した。

一般受診者数は9,679名で前年度より910名減少した。

①近隣企業数が減少していること、および②処方日数の増加による受診間隔の延長が続いていることのためと考えられる。

当クリニックは一般開業医のように地域密着型の医療施設ではないので、受診者の便宜を考えて処方日数が長くなるのはやむを得ない面がある。しかし、人間ドックを含めて健診受診者数は増えている。特に港区民健診受診者数は増えており、1,267名で前年度より160名の増加となった。今後も近隣在住者が健診後に診療を受ける人が増えると想定される。

近隣企業については、山の手線新駅が開業するまで増加は期待できない状況であるが、事務営業担当の努力により遠方の企業健診受診者が増加している。

4 各種検査数の推移

2015年度の検体検査、腹部超音波、心臓超音波、呼吸器、眼底、内視鏡、X線検査数を前年度と比較して図2に示した。

また、検体検査、循環器機能検査、超音波検査、レントゲン検査、呼吸器機能検査の推移を表1～5に示した。いずれも健診者数の増加に伴い前年度より増えた。

5 婦人科検診（子宮頸部がん細胞診〔PAP検査〕、子宮体部がん細胞診）

2015年度、子宮頸部がん細胞診を希望して行った件数は、総合健診（人間ドック）で1,509件（前年比＋378）、健診2,003件（＋106）、一般診療17件であった。健診者のうち港区健診が565件で、前年よりも69件の増加であった。

子宮頸部細胞診判定の内訳は表6の通りである。

表 1 検体検査

年度	項目	血液検査	尿	便	細胞診	細菌・その他	合計（件）
2015		16,822	15,559	10,215	4,234	0	46,830
2014		16,607	15,180	9,929	4,354	1	46,071

表 2 循環器機能検査

年度	項目	ECG		その他 (UCG 含まず)	合計（件）
		安 静 時	24時間モニター		
2015		13,580	55	8	13,643
2014		13,349	29	4	13,382

表 3 超音波検査

年度	項目	上腹部	乳房	婦人科	甲状腺	心エコー (UCG)	合計（件）
2015		6,905	2,134	272	98	52	9,461
2014		7,172	1,884	191	87	60	9,394

表 4 レントゲン検査

年度	項目	胸部	胃部	乳房	骨量測定	その他	合計（件）
2015		15,113	7,267	3,042	828	0	26,250
2014		14,766	7,485	2,785	808	0	25,844

表 5 呼吸器機能検査

年度	項目	（ルーティン） 予測肺活量 一秒率	+	FV 曲線
2015				6,207
2014				5,795

表 6 子宮頸部がん細胞診（ベセスダ分類）

年度	異形度	NILM	ASC-US	ASC-H	LSIL	HSIL	SCC	AGC	AIS	adenocarcinoma	合計（件）
2015		3,392	78	16	29	11	1	2	0	1	3,530
2014		3,034	103	11	25	11	0	4	0	1	3,189

表 7 子宮体部がん細胞診（クラス分類）

年度	異形度	I	II	III	III a	III b	IV	V	合計（件）
2015		52	8	0	0	0	0	0	60
2014		31	10	1	0	0	0	0	42

ASC-US 以上の細胞異常がみられた場合は基本的には精密検査のため専門病院へ紹介とした。

子宮体部がん検査（ホルモン補充療法時のチェックを含む）は全体で60件、細胞診判定の内訳は表7の通りである。

2015年度は婦人科医3名、港区健診期間中は週4回（1

回は午前から）、その他の期間は週2回での外来となった。

人間ドックの子宮頸部細胞診が300名以上増加した。港区健診期間が延長されたため、昨年度よりも受診者数は増加しているが、昨年度ほどの伸びはなかった。

6

総合健診（人間ドック）

1) 総合健診の年代別受診者数（表8）

表8は2015年度の総合健診（人間ドック）の年代別受診者の一覧である。

2) 総合健診・結果伝達状況

ドックの結果伝達については、受診者の希望により3通りから選択することが可能である。

第1は、受診当日に一部（腫瘍マーカー、甲状腺ホルモン検査、ヘリコバクター・ピロリ菌検査、喀痰検査、乳房レントゲン検査、乳房エコー検査、子宮頸部細胞診など）を除く項目の結果を12時30分から聞くことができる。デジタル映像を受診者に見せながら、問診情報を参考にして医師から結果説明がなされ、結果に問題のある場合は専門医へ紹介し、治療や更なる精密検査の実施など早急な対応が可能となる。

第2は、結果表は診察した医師が判定し、郵送した後を受診して結果の説明を受けるパターンで、当センターに主治医を持つ場合、処方なども含めて結果の説明を行

う。対面式での結果説明は受診者がその場で質問や不明点の確認をすることができ、また問題点への対応が早急にできる利点がある。

第3は、判定医が最終確認を行った後に結果表を郵送する方法である。この場合は書面のみでの説明となる。後日電話での問い合わせや、改めて問題点に対して受診されるケースもある。

いずれの方法でも、オプションを含め検査結果がすべてそろった段階で医師が最終チェックを行い、結果表が郵送または手渡しされる。総合健診（健保組合、事業所との契約によるもの）、および人間ドック（個人で受けるもの）受診者総数5,918名のうち、3,012名（47.0%）の方が当日に結果説明を受けた。

3) 総合健診の異常発見率

総合健診の判定結果から異常発見率の高い病態を順に挙げる（表9）。

また、総合健診のレントゲン検査で発見された消化器疾患は表10の通りである。

表8 総合健診の年代別受診者数

年齢区分	男 性	女 性	合 計
29歳以下	40名 (1.0%)	35名 (1.5%)	75名 (1.2%)
30～39	588 (15.0)	339 (14.0)	927 (14.6)
40～49	1,321 (33.6)	842 (34.9)	2,163 (34.0)
50～59	1,058 (26.9)	623 (26.3)	1,681 (26.5)
60～69	662 (16.8)	369 (15.2)	1,031 (16.2)
70～79	207 (5.2)	167 (6.9)	374 (5.8)
80歳以上	57 (1.4)	38 (1.6)	95 (1.4)
合計	3,933名	2,413名	6,346名

表9 総合健診の異常発見率（上位10項目）

性・数	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
男性	病名	肥 満	肝 機 能 検査異常	脂質異常	高 尿 酸 血 症	血液学的 検 査 (貧血等)	聴力異常	顕微鏡的 血 尿	高 血 圧	糖 代 謝 異 常	肺 機 能 検査異常
3,933名	発見率 (%)	46.5	39.6	34.7	23.8	13.7	13.1	13.1	11.6	10.7	8.8
女性	病名	顕微鏡的 血 尿	尿 中 白 血 球 増	肝 機 能 検査異常	肥 満	血液学的 疾 患 (貧血等)	脂質異常	聴力異常	肺 機 能 検査異常	糖 代 謝 異 常	便 潜 血 陽 性
2,413名	発見率 (%)	26.7	20.0	15.3	14.8	14.0	7.5	6.3	5.2	4.4	3.8

表10 総合健診（レントゲン検査）で発見された消化器疾患
（ドック：男性709名、女性535名）

	食道		胃		十二指腸	
	男	女	男	女	男	女
潰瘍	0	0	16	1	5	1
潰瘍の疑い	0	0	1	0	0	0
ポリープ	5	1	299	325	9	11
ポリープの疑い	0	0	6	6	0	0
粘膜下腫瘍	1	0	27	20	3	1
粘膜下腫瘍の疑い	1	0	9	8	2	1
胃炎、びらん	4	1	298	157	4	1
潰瘍瘢痕	0	0	14	0	5	1
合計	11	2	670	517	28	16

7

集団の健康管理

1) 上部消化管内視鏡検査

上部消化管内視鏡検査は、一般診療での経過観察や、総合健診・一般健診からの精密検査、健診のオプションとして行われている。2014年度には1,706例であった検査数は、今年度は1,951例を数え、年々検査数を増やしている。2014年度から1日の検査数を7名としたが、それでも検査が1～2カ月の予約待ちになるため1日1～2名オーバーで検査を実施している。

上部消化管内視鏡検査が増えている理由として、高齢受診者の上部消化管造影検査による誤嚥や事故防止、上

部消化管造影検査に比べより精密な検査を希望、ヘリコバクター・ピロリ除菌前後の経過観察、またヘリコバクター・ピロリ除菌希望者が年々増加していることがあげられる。

胃内視鏡検査所見内訳は表11、組織診断結果は表12の通りである。検査所見や病理診断結果により、内視鏡担当医または主治医によりフォローアップが実施されている。組織診断 Group IV、Vの所見者は5名で、当センターで健診時に上部消化管検査を受けた受診者であった。

2) 総合健診（ドック）および健診で発見された悪性腫瘍

胃がん5例、食道がん3例、乳がん21例、肺がん3例、大腸がん1例、膵臓がん4例、前立腺がん2名であった。これらは紹介先医療機関からの返答書で確認されたケースである。

3) 腹部超音波検査結果

表13の通りである。

4) 総合健診（人間ドック）以外の集団健診

継続的に健康管理を行っている団体は表14の通りである。

表11 上部消化管内視鏡検査所見内訳（被検者1,951名）

所見	例数
食道がん	1
胃がん	4
食道炎	591
バレット食道	52
食道裂孔ヘルニア	571
胃・十二指腸潰瘍	11
胃・十二指腸潰瘍瘢痕	230
萎縮性胃炎	1,043
表在性胃炎	438
びらん性胃炎	329
ポリープ	501
びらん	101
異常なし	87

表12 上部消化管検査組織診断結果

異型度	I	II	III	IV	V
例数	161	3	0	1	4

表13 腹部超音波検査結果

疾患名	男	女
胆のうポリープ	943	317
胆のうポリープ（疑）	29	7
胆石	433	143
胆石（疑）	44	7
肝のう胞	1,211	589
脂肪肝	1,556	309
腎のう胞	1,262	424
合計	5,478	1,796

表14 集団の健康管理（下記について継続的な健康管理を行っている）

	団体名	実施人数（名）	内容	担当医師名
1	モーターボート選手、実務者関係	620	登録更新検査 実務者健診	久代 赤嶺 長田 他

8

健康管理担当者セミナー

日 程 2015年12月1日(月)
 会 場 笹川記念会館4階会議室
 参加者 46団体59名
 内 容 人間ドックや健康診断の受診先団体の担当者を中心に、最近の医療トピックスなどを中心とした医療セミナーを開催。本年度で第35回を数えた。

講演・1

テーマ 健診で見逃されやすい疾患とは

講 師 日野原重明(財団理事長)

日本人に多い疾患を死亡原因割合から話を進め、1位はがん、2位は心臓病で、その種類と危険因子について話し、3位の脳血管疾患を含め、上位3位までで6割を占める死因は生活習慣に起因する疾病といわれると説明。そのためいかに生きるかが大事であり、生き方の習慣の選択になると話し、自身の指針である1) どう食べ、2) どう呼吸し、3) どう運動し、4) どう休み、5) どう仕事するかを紹介した。更に健康寿命を延ばすためにも中高年からのよりよい生活習慣の形成が必要と説いた。

最後に自分自身が車椅子生活になったことを後ろ向きに捉えず、新たな夢を叶える相棒として新たな生活へ前進していることを紹介して話を終えた。

講演・2

テーマ 尿異常・慢性腎臓病のマネジメント

講 師 小松 康宏(聖路加国際病院副院長)

腎臓病の新しいガイドラインを紹介しながら、腎臓の働き、腎臓病の主な症状、評価基準などについて話を進め、現在評価の基準となっているeGFR等の腎機能判別の検査についても説明された。更に腎臓病の早期発見のための様々なケースを紹介した。そして腎疾患の種類とその症状、経過、治療法を説明し、最後に腎代替療法として血液透析、腹膜透析、腎臓移植などを紹介して、最後に早期からの治療が腎疾患の進行を食い止められると健診での尿検査の重要性を説かれた。

講演・3

テーマ 高血圧と上手につきあう

講 師 久代登志男(クリニック所長)

高血圧は脳卒中と心不全の最も重要な原因で、放置す

れば楽しいはずの後半の人生が障害されてしまうことになる。高血圧は自覚症状がないこともあり、現状は患者さんの半分しか治療を受けていないのが実情である。高血圧の原因はよく分かっていないが、血圧をコントロールすれば合併症は予防できる。脳卒中やそれに伴う認知症、心不全を予防し、健康寿命が延びれば患者さんにとってもよいことであり、国は医療費を節減できることになる。高血圧と上手につきあっていただきたい。

9

クリニックにおける総合健診(人間ドック)の特徴と看護師の役割

当クリニックでは、これまで予防的・教育的医療の見地から、総合健診(人間ドック)、生活習慣病健診、一般外来診療において疾病予防のための教育や成人の慢性疾患の継続管理を推進してきた。当クリニックの総合健診は、リピーターが多く、開設以来30年以上にわたって受診している方も少なくない。

当クリニックの総合健診の特徴は、検査のみに留まらず、身体的、心理的、社会的など、包括的に問題点が抽出され、その問題点に対して個別性を重視した方針が立てられる点である。その問題点を把握するために、検査を進めていく中で看護師が個別に問診を行う。限られた時間で受診者の記載した問診票をもとにインタビューを行うが、その目的は、がんや生活習慣病などの早期発見、およびその予防に必要な指導を行うための情報や、検査データに現れにくい症状などの健康問題を把握することにある。また、受診者の持つ問題が看護師との問診過程で整理され、受診者は自分の問題に気づき理解することができる。

問診時に家族歴や年齢を加味した検査のオプションを勧めている。オプション検査項目の枠も年々拡大し、適切なオプション検査が、看護師の問診や診察時などに追加され、個別性のあるオプションメニューを受診者に提供できるようになっている。2014年度からは更なるオプション検査として睡眠時無呼吸症候群(OSA)について日本睡眠協会との連携を得て睡眠障害の在宅スクリーニング検査を行いOSAの重症度の診断が可能となり、その結果により治療の必要性が生じれば専門病院へ紹介している。

医師の診察時には、すでに収集されている問診情報をもとに更に詳細なアプローチを行い、限られた診察時間を有効に使用することが可能となっている。診察上、更

に検査の必要があれば、追加する場合もある。

結果の説明は受診当日に聞くことができる。結果の判定は単なる健康診査ではなく、得られたすべての情報（問診情報や検査データ）をもとに個性性を重視した問題解決型の総合評価であり、その中には、生活習慣の変容や、治療、将来の見通しについての見解も加えられる。

医師の結果説明の後に、原則として問診した看護師が再度面接を行い、重要な問題点を整理して、受診者の問題の理解、また解決方法などについて確認を行う。具体的には、再検査や精密検査の説明と実施のプラン、緊急な問題への迅速な対応（問題点に応じた専門医への受診や他の医療機関への紹介）について看護師がコーディネートする。その他、禁煙外来への動機づけ、食習慣改善のための栄養相談（管理栄養士による専門的な指導）、運動の実施、心理的・社会的カウンセリングなどについても必要に応じてアドバイスする。

総合健診受診後の再検査や生活習慣変容後のフォローアップ検査も実施し、継続的に管理している。総合健診の結果で専門医受診が必要となったケースに関しては、クリニックで問題点に応じて専門医を受診することができ、病態の評価、生活習慣の変容も含めて、継続的に受診者として治療を受けることが可能である。その場合も問診した看護師がプライマリーに関わることで治療効果をあげている。

受診者の診療録にはすべての健康情報、問診情報、検査データ、治療経過、受診者自身で測定した情報（血圧、体重など）、紹介した医療機関の返答書などがファイルされている。そのため長期にわたる受診者の経過を把握することができる。それがプライマリー・ケアを可能とし、リピーターが多い理由の一つにもなっていると思われる。これは、他の健診センターにはない当クリニックの総合健診の特徴である。

2013年4月からドック、健診で新システムが導入された。新システム導入後、原則としてドックの診察時に過去のすべての記録や情報が収録された診療録は使用しない方針として稼働した。問診は看護師が従来行ってきた検査のみにとどまらず、包括的に問題点を抽出するために必要不可欠である。正確な情報、個性性を重視した方針を立てられるようにするために、医師の診察の前に、診療録（カルテ）を参考にOCR（受診者が記載した問診票）の治療中、及び経過観察中の疾患、また服用している薬などについても確認し、不足部分の補足を行い、医師の診察時の情報としている。また、システムに問診情報の入

力を行ったことにより、次の受診時に入力した情報を閲覧することが可能となっている。前年度情報入力閲覧により、問診時間の短縮に役立っている。

2014年4月から、胃内視鏡検査実施日が週5日に増え、オプション検査として選択できる範囲が更に拡大された。1日の実施件数も定数を増やし、2015年度は1,951名に実施した。昨年度比13%増加している。経鼻内視鏡検査の選択が可能となり、また、ヘリコバクター・ピロリ菌の除菌治療後の経過観察も含めて内視鏡検査の需要が増えていると思われる。1日の実施件数に限界があり、すべての需要に対応できないことが課題となっている。

10 情報管理

1) 新健診システムの安定運用

2013年度より稼働を開始した新健診システム（TOHMAS-i Eterno）の安定運用に努めた。

クリニック内の運用業務においては各部署と連携し、日次・月次・年次、および随時業務作業を行った。この業務作業内にも不具合や改善点が発生したが、事象の確認、調査を行い、ベンダーとの連携を密にとり、都度のデータ修正、ロジックやプログラム改修などにより対処した。また、新健診システムに連携した各種システム（眼底、臨床検査、画像）についてもベンダーと連携し、障害対処を含めて安定運用に努めた。特に、画像システムに関しては2016年春に機器保守契約切れとなるため、リプレースを含めて調査、準備作業を行った。

これら各システムに対する各部署からの要請に柔軟に対応し、実作者の利便性を図った。

2) 特定保健指導プログラムの安定運用

特定保健指導プログラム（ヘルスコンシェルジュ）の安定運用に努めた。新健診システムとデータ連携し、管理栄養士の運用により適時、健康保険組合への結果／請求出力を効率的に行った。

3) ライフ・プランニング・クリニック ホームページの更新

クリニックのホームページ内容に関する、各部署からの変更要請に随時対処し、クリニックの情報発信、ブランディングを行った。

4) インフラ整備

パソコンや周辺機器の経年変化による老朽化に伴い、動作不良、起動不具合などが目立ってきたため、代替機の準備、パソコンの初期化、リプレースを行った。導入機材へのウィルスチェックプログラムのインストールは必須であり外部・内部からの攻撃に備えた。また、各部署からの IT 関連のヘルプデスク対応を行った。

11 食事栄養相談

1) 相談人数と相談内容

2015年度の食事栄養相談人数は延べ406名であった。

総合健診（人間ドック）の当日結果説明において、医師より栄養相談の指示があった受診者にはその場で受けられる体制にしておき、当日都合がつかない場合は予約をとり、後日相談を受けていただくようにしている。一般健診においても、生活習慣に問題点があれば栄養相談の案内がされる。

基本的には医師の指示のもと、最初の面接で改善目標をたて、1～3カ月後に再検査を実施する。2回目以降の面接で検査結果の改善を確認している。

一般診療でも慢性疾患の相談を継続して行っている。

2) 病態別栄養相談の割合

相談件数は前年度とほぼ同じである。特定健診を含め、相談内容の割合は、減量43%、脂質代謝異常17%、高血圧16%、糖代謝異常9%、肝機能異常8%、高尿酸血症6%、その他1%であった。

3) 年代別栄養相談

20歳代0%、30歳代5%、40歳代36%、50歳代34%、60歳代17%、70歳代以上が7%であった。

4) 特定健診・特定保健指導

健康保険組合19団体と契約し、実施している。

実施延べ人数は32名（積極的支援20名、動機付け支援12名）で、積極的支援の方が、動機付け支援より多かった。

今年度中に終了した12名の改善率は以下の通りである。

体重については、積極的支援によるもの8名、変化なし3名、うち5%以上減少2名、1～5%未満減少2名、1～5%未満増加1名であった。

動機付け支援によるもの4名、変化なし1名、5%以上減少1名、1～5%未満減少2名であった。

腹囲については、積極的支援によるもののうち、変化なし3名、5%以上減少1名、1～5%減少2名、1～5%未満増加2名であった。

動機付け支援によるもの 変化なし1名、1～5%未満減少3名であった。

5) はらすまダイエット

2013年度からの取り組みとして、某企業のシステム（はらすまダイエット）を導入した。初回の面談後は10日ごとに支援者からメールを送信、対象者は体重や行動の記録を毎日パソコンや携帯などからWEBを通してサーバーに記録を行い、データは支援者と対象者が共有できるというプログラムである。今年度の実施者は1名であった。今後も周知方法を検討して実施者を増やしていきたい。

12 禁煙外来

煙補助薬として内服薬のバレニクリンを9名、ニコチンパッチを1名に使用し、無投薬が1名だった。途中脱落者が1名いたが、精神疾患治療中だった。バレニクリンによると思われる副作用は4名に認め、腹部膨満感や口渇感、倦怠感、睡眠障害だった。

全体での禁煙成功率は72.7%で、前年の74.4%と同様で、概ね良好だったが、今年度の少ない受診者数を考慮すると、今後の健診、一般外来での禁煙勧奨の強化を図る必要がある。

13 学会・研究会・セミナー参加

- ・吉田洋子
マンモグラフィ更新技術講習会、2015.5.31
- ・那須美智子
日本総合健診医学会、平成27年度精度管理研修会、2015.6.27
- ・三井英巳・関口将司
第56回日本人間ドック学会学術大会、「人間ドック健診イノベーション」～新機軸の創生と展開～、2015.7.30～31
- ・川村信子・渡部美和子
(株)ビー・エム・エル、首都圏ラボラトリーフォーラム、2015.9.5
- ・那須美智子・小池幸子・倉辻明子
東京超音波研究会、「動画で読もう！乳腺超音波画像」

-
- ～乳腺超音波画像の典型例を体験しよう！～, 2015.9.8
 - ・ 那須美智子・小池幸子・立花三和
東京超音波研究会,「胆道の超音波診断」～胆管の描出
法から臨床医の求める画像所見まで～, 2015.10.6
 - ・ 吉田洋子
胃X線検査従事者講習会,「胃X線によるピロリ菌感染
診断」, 2015.10.7
 - ・ 秋山真由美
マンモグラフィ更新技術講習会, 2015.10.23
 - ・ 秋山真由美
乳がん検査従事者講習会,「ポジショニングの“何故”

- を考えましょう」, 2015.11.25
- ・ 三井英巳・関口将司・岡庭栄理・竹中聖子
日本総合健診医学会第44回大会, 2016.1.29～30
- ・ 秋山真由美
胃X線検査を楽しく学ぶ会, 2016.2.6
- ・ 那須美智子・小池幸子
アスリード(株),「乳房超音波検査を学ぼう！2015アドバ
ンス編」, 2016.2.11
- ・ 吉田洋子・小池幸子・秋山真由美
東京乳腺研究会,「乳癌検診を取り巻く最近の話題」,
2016.3.26
報告／久代登志男（ライフ・プランニング・クリニック所長）

ピースハウス病院（ホスピス）

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

1 休止から再開に至る経緯

ピースハウス病院は神奈川県西部にあるわが国最初の独立型ホスピスである。独立型ホスピスは一般病院の中にある緩和ケア病棟や病院に併設されたホスピスとは違い、ホスピス病床のみ22床の小さな病院である。1993年9月に開院して以来、3,700余名の患者さんを受け入れ、ケアの水準の高さは全国目標とされた施設であったと自負している。

しかしながら、2015年3月末に諸事情により病棟を休止し、同年5月病院を一旦休止した。

わが国では独立型施設の運営が制度的にも経営でもきわめて困難であることは、ピースハウス病院の開院以後も東日本では新設の独立型ホスピスが一つもなかったことが証明している。それでもピースハウス病院が休止したとのニュースは新聞でも報道され、県内外からの反響も大きかった。医療者だけでなく、これまでピースハウスを支援していただいた方々など多方面からピースハウス再開への励ましと要望が寄せられたことは、再開に向けた努力への心の支えとなった。ピースハウス病院をなぜ休止せざるを得なかったのかの反省も必要であるが、希望をもって再開に向けた努力をすることが求められているとの思いで、この1年間、関係職員で再開に向けた努力を行ってきた。

ピースハウス病院の職員がゼロになってからの再開に向けた活動は、想定以上の困難があった。なかでも最大のネックであった緩和ケア医師のリクルートには多大の時間を要した。神奈川県の支援もあり近隣の大学病院等への協力も打診したが、いずれも成功はしなかった。幸い公益社団法人地域医療振興協会の協力が得られることが決まり、また長年ピースハウス病院の院長を務めた西立野研二医師が院長に復帰されることになり、ピースハウス病院の再開ができる見通しとなった。

2016年に入って急ピッチで再開の準備作業を進めることになった。看護師、薬剤師をはじめとする採用活動や、1年間休止した病院設備の点検、修理など短期間に行わなければならないことは山ほどあったといえる。

2016年4月1日の再開日には記念の式典を行うことができ、4月5日より患者さんの受け入れも始まった。

ピースハウス病院が再開できたのは、ある意味、奇跡

であったといえよう。再開できたのは多方面の方々の支援があったことは事実であり、深く感謝したい。またピースハウス病院が1年間休止している間、再開を望まれるピースハウスボランティアの皆さんがピースハウスの設備維持のための地道な活動を続けてこられたことに対しては、心より感謝したい。

最後に、ピースハウス病院は再開を機に「日野原記念ピースハウス病院」と名称を変更して再出発することになったことをご報告します。

報告／朝子 芳松（本部事務局長）

2 ボランティア活動

1) ピースハウス病院休止中の活動

2015年3月末をもって一旦休院の通告を受けたピースハウスボランティアの会は、3月6日臨時総会を開催して新役員を選出し、病院再開に向けて建物、庭園など施設の保全活動に関わりつつ、併設されている「ホスピス教育研究所」「訪問看護ステーション中井」の活動支援を行うことを決定した。

この決定を受けて2015年度継続登録をしたボランティアは90名（うち男性14名）で、前年度の95%に達した。

休院中のボランティア活動は、原則土曜・日曜・祝日を休日とし、土曜ボランティアはセミナーなどの開催時に研究所の仕事を支援することとした。月曜～金曜ボランティアは、曜日別作業分担表に基づき毎日10:00～13:00に保全管理の活動を継続した。作業分担区域は2カ月ごとに交替し公平を期することとした。

2) 活動内容

2016年2～3月の分担表は表1の通りである。

この体制で2015年度は69名、1日平均5.4名、延べ1,386名のボランティアが活動に関わった。以下、この1年の特筆すべきボランティア活動について述べる。

(1) 外柵工事

4月5日、主として男性ボランティアを中心に有志がピースハウスの裏庭からB駐車場までの約120m区間に外柵設置工事を行った。ホスピスは24時間人が不在になるということはなく、ピースハウス病院も開院以来21年間、患者と医療職は常駐していたので開放的な佇まいで

表1 活動分担

曜 日	月	火	水	木	金
①施設内見回り	1F A区画	1F B区画	1F C区画	1F D区画	デイホール廊下
②外回り見回り	○	○	○	○	○
③掃除機がけ	訪問看護ステーション	図書室・所長室	事務室	玄関・廊下 ボランティア室	デイホール
④トイレ掃除	○（1階）	○（2階）	○（1階）	○（1階）	デイホール
⑤デイホール管理	○	○	○	○	○
⑥洗濯物たたみ	○	○	○	○	○
⑦発送作業等	△	△	△	△	△

○：毎回 △：人数に余裕があれば

あった。ところが、休院中は土曜・日曜・祝日は完全無人となるため、保安上の必要性から自発的にこの工事を行いB駐車場を閉鎖した。

(2) 事務所をボランティアルームに

休院中、2階のホスピス教育研究所は1階玄関を施錠して業務を行うことになったため、1階の事務所をボランティアルームとしてボランティアとコーディネーターが常駐した。

(3) 家族の会「ぶらっとスポット」への参加

今までボランティアはご家族のビリーブメントケアに関わることはなかったが、6月以降、原則月1回開催されるこの会には湯茶接待係として、また数グループに分かれて行われる歓談によき理解者として加わり、和やかな雰囲気づくりに一役買った。

(4) 教育研究所の教育プログラム、HPCJ 年次大会支援

通常土曜日に開催されるこれらの行事には、土曜ボラ

ンティアが中心になってその運営に協力した。そのためにホスピス教育研究所ではボランティア向けの講座も企画し、広くピースハウスボランティアの参加を呼びかけてボランティアの活動に対するモチベーション維持に努めた。

(5) ピースハウス交流会開催

7月、10月の2回にわたり、デイケアセンターにおいてホスピス教育研究所、訪問看護ステーション中井のスタッフも参加して、患者のご遺族から寄贈された高級オーディオ TANNOY を使ったレコード鑑賞会『名曲鑑賞の集い』を開催した。

また11月には中庭で朝子財団事務局長、平野健康教育サービスセンター所長も招いて、盛大にバーベキュー大会を行った。席上、再開に向けての財団本部の動きに関心を寄せるボランティアが多かった。

●いつでも再開できるようにとボランティアの活動は続けられた



●レコード鑑賞会も

(6) ピースハウスで映画撮影

あるところからの依頼を受けて、8月14日休止中のピースハウスの病室を使い東宝(株)制作の2016年公開映画「怒り」の撮影が行われた。この映画は芥川賞作家吉田修一原作、監督・脚本は李相日、出演者は渡辺謙、原日出子、妻夫木聡、綾野剛などで、当日撮影は早朝7時から翌朝午前2時までまでに及んだ。この間5名の男性ボランティアがお盆返上で立ち会った。

(7) ピースハウス再開に向けた提言

ボランティアの会は三役呼びかけの下に、9月17日、ピースハウス教育研究所長、訪問看護ステーション中井所長、コーディネーターも招いて再開検討委員会を開催し、新生ピースハウス病院の考えられる事業形態とその利害得失を検討した。その結果を踏まえて10月8日、拡大臨時役員会を開催、参加者24名の連名で財団本部に対し「ピースハウス病院の再建に向けた提言」を提出した。

(8) 「美緑フェスティバル」に参加

10月18日、中井町中央公園で恒例の美緑フェスティバルが開催され、今年度は病院休止中のためバザーは行わず、地域（町民・訪看中井・ボランティア）との交流の場として参加、コーヒー、焼き菓子などの売上金約3万2,000円は訪問看護ステーション中井へ寄付した。会場では病院再開を期待する声も多く、後日見学に訪れた町民もいた。

(9) 特技ボランティアの活動は休止

患者不在のため、ベッドサイドケアを提供するアロマセラピー、マッサージ、アニマルセラピー、美容、シャトルバス運転などは休止した。しかし、施設管理上必要な営繕、庭園整備（芝刈り・電柵管理など）は担当ボランティアが適時対応した。

(10) その他

年5回開催していた「アドバンス講座」、春と秋に実施していた「ピースハウスボランティア養成講座」、高校生の「夏期ボランティア体験実習指導」などは休止した。

3 ボランティア登録者

2016年4月1日現在、ピースハウスボランティアの登録者数は72名（うち男性14名）で、昨年4月1日対比で20%減少した。

構成内容は次の通りである。

平均年齢 62.0歳（最高83歳、最低36歳）

年齢構成 80代4名 70代16名 60代26名

50代13名 40代10名 30代3名

県内在住者が62名（86%）を占め、その約70%が秦野、平塚、二宮、大磯、小田原など15km以内に居住している。

活動期間を見ると、5年以上のベテランが半数以上の57%を占め、今後の活動で中心的な役割を果たすものと期待される。

2015年度のピースハウスボランティアの総活動時間は5,368時間、前年比-15,879時間、74.7%減となった。

2015年度達成累積活動時間によるピースハウスボランティアの表彰対象者は3名（6,000時間1名、3,000時間1名、500時間1名）である。

なお、ピースハウス病院ボランティアコーディネーターが毎月発行している『ボコ通信』は継続発行され、2016年4月には通算145号を発行した。

報告／志村 靖雄（ピースハウスボランティアコーディネーター）

ピースハウスホスピス教育研究所

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

ピースハウス病院の2階に位置するホスピス教育研究所では、2015年度、病院の活動中止という状況の中、「ピースハウスボランティアの会」、「ピースハウス家族の会」の協力を得て、教育活動を継続した。主な活動は、1) ケアに従事する専門職・ボランティアを対象とする講座、セミナーの開催、2) ホスピス国際ワークショップの開催、3) 地域緩和ケア連携のための活動、4) 機関紙の発行、5) 国内外のホスピス緩和ケア関係者との情報交換などである。

なお、病院が活動を休止し、予定していた医学生や臨床研修医、高校生を対象としたホスピス緩和ケア研修の受入、また、ボランティア養成講座が開催できなかった。一方、新しい試みとして、ホスピスケアを受けた患者の遺族を対象とする分ち合いの会を企画するなど、グリーフケアに関するプログラムに取り組んだ。

また、「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局の業務も継続して行っている。

1 活動の全体像

1) 講座・セミナーの開催

ホスピス緩和ケアに従事する人材育成のためのプログラムとして、専門職のためのホスピスセミナー、ホスピス緩和ケア講座を開催した。

前期のセミナーでは、ホスピス緩和ケアを取り巻く現状を理解するために、がん専門病院で相談支援を行っているがん看護専門看護師より、患者や家族が直面する問題とその支援の実状について、また、緩和ケア専門医から、がんと共に生きる人々を地域でどのように包括的にケアをするのか、その現状と今後の方向性についてご講義をいただいた。より地域に密着した立場にある訪問看護師から、地域で暮らすことの意味、そして、暮らし続ける人々を生活の中でどのように支援しているのか、ケアの実状を紹介していただいた。いずれの回においても、グループワークを取り入れ、参加者一人ひとり、それぞれの地域、職種において、今後果たすべき役割を確認することができたなど、高い評価を得られた。

後期は、具体的なテーマについて学びの機会をもつこととし、がん患者の症状マネジメントをシリーズで学ぶ緩和ケア講座、また、家族のケアに関するセミナーを開

催した。

近年、セミナー参加者に高齢者施設に勤務する方々や在宅ケアに従事する多職種が目立つようになった。こうした傾向を受けて、介護福祉職を主な対象として、エンド・オブ・ライフケアに関する特別セミナーを開催した。今回は総論であったが、今後は具体的な内容についてさらに学びを深めたいとの要望も聞かれ、今後につながる企画となった。

2) ホスピス国際ワークショップの開催

第23回ホスピス国際ワークショップは、英国と香港より講師を招聘し、「緩和ケアの再考と新たな挑戦」をテーマに開催した。

講師の一人、Professor Baroness Ilora Finlay of Llandaff は、緩和ケアの専門医として、英国、そして世界の緩和ケアをリードしてきた方で、英国の貴族院の議員として医療の施策にも活躍しておられる。先生は講義の冒頭で、ホスピスケアの創始者シシリー・ソンドース医師の「貴方が平安のうちに死ぬことができるだけでなく、最後まで生きることができるように、できる限りのことをさせていただきます」という言葉を紹介された。この言葉は、ホスピスケアが緩和ケアと呼ばれ、医療の中で重要な位置を占めるようになった今も変わらない精神であることが再確認された。また、緩和ケアを取り巻く世界の現状として、緩和ケアが必要とされるにも関わらず80%の人が鎮痛薬を得ることができないという説明、緩和ケアにおける倫理的課題として、米国やオランダにおける「医師による自殺補助」や「安楽死」の実態について、エビデンスを示しながら説明し、緩和ケアを超えて自殺補助に向かおうとする問題を指摘された。

こうした講義から、世界の現状に目を向ける機会をいただくとともに、日本でも緩和ケアを様々な形で広く提供していくことが求められていることを認識することができた。講義とグループワークを取り入れた本ワークショップを通して、全国から集まった参加者一人ひとり、それぞれの場で更なる挑戦をしていくことの重要性を確認し合う機会にもなったと考える。

もう一人の講師、Dr. Amy Yin Man Chow は、悲嘆ケアを専門とするMSWで、患者・家族のケアと共に、ケアに従事するスタッフの悲嘆とそのケアの重要性につい



●地域の医療福祉関係者と高齢者ケアについて考える



●遺族のための分かちあいの会も7回にわたってもった

での講義もあり、参加者の関心も高く、臨床の場で活用できる具体的な学びを得ることができた。特に、スタッフのケアに関するセッションでは、参加者が自分の体験を振り返る場面もあり、悲嘆の体験とその意味を再確認し、ケアに従事するものへの支援の大事さについて熱心な意見交換が行われた。

3) グリーフケアに関するプログラムの開催

ピースハウス病院では、開院4年後の1997年から、ピースハウスでケアを受けて亡くなられた患者さんのご遺族を中心に「ピースハウス家族の会」が運営されている。この会は、ご遺族同士が互いに支援しあうセルフ・ヘルプ・グループ（自助グループ）で、教育研究所では、会の発足時から活動を側面から支援してきた。家族の会の活動の一つに「ぶらっとスポット」がある。これは、予定された日ではあるが、特に予約の必要はなく、気軽にぶらっときて、お茶をのみながら、介護や看取りの体験、最近の様子などを自由に語り合う会である。1998年から開催されてきたが、今年度は開催回数を増やし、病院のボランティアにもお茶のサービスや語らいへの参加など、活動を支援してもらうこととした。

遺族との分かちあいの場そのものから気づくことも多いが、会を運営する遺族とボランティアを対象に、悲嘆とそのケア、傾聴について学ぶセミナーを開催し、今後の活動に役立つ学びの場を提供することができた。また、こころのケア、スピリチュアルケアを専門とする講師を招聘し、ご遺族全体を対象とするセミナーを開催し、悲嘆についての学びを深めるとともに、グリーフケアの一貫としても有意義な時間をもつことができた。

4) 地域緩和ケア連携

地域緩和ケアネットワーク構築に向けた活動としては、神奈川県西部地域で緩和ケアに従事する専門職の方々との学習の場の共有を継続した。また、今後ますます重要となってくる高齢者のケアについて、地域の医療福祉関係者との研究会を、同財団の訪問看護ステーション中井との協働により、リーダーシップをとり、運営することができた。

2016年度も研究会を継続してほしいとの意見が多く聞かれ、地域の医療福祉関係者の学習ニーズに対応する教育プログラムを企画し、地域全体のケアの質の向上に貢献していきたいと考えている。

5) 機関紙の発行

毎年、ピースハウス病院、教育研究所の活動をまとめた機関紙を発行し、全国の緩和ケア関係者、県内の医療機関、また、一般の方々などへ、ホスピス緩和ケアの啓発普及という目的も兼ねて配布している。今年度は、上記した「ピースハウス家族の会」について、その歴史と実際の活動をまとめ、ピースハウスにおける遺族ケアプログラムを紹介することができた。

2 活動の実際

1) 講座・セミナーの開催（表）

2) 第22回ホスピス国際ワークショップの開催

開催日：2016年2月27日（土）・28日（日）

開催場所：ピースハウスホスピス教育研究所

テーマ：緩和ケアの再考と新たな挑戦 ―英国・香港・日本の交流―



● ボランティアのためのホスピスセミナーでは、悲嘆について学ぶ
左：栗原幸江講師，右：沼野尚美講師



● ホスピス緩和ケア講座では症状マネジメントを学ぶ
左：田中桂子講師，右：林章敏講師

講師

- ① Professor Baroness Ilora Finlay of Llandaff
カーディフ大学緩和医療学教授。National Council for Palliative Care 会長
王立医学協会元会長（英国）
- ② Dr. Amy Yin Man Chow
香港大学福祉学助教授。香港認定ソーシャルワーカー，米国デス・エデュケーション・カウンセリング協会（ADEC），認定死生学フェロー（香港）
- ③ 木澤 義之
神戸大学大学院医学研究科先端緩和医療学 特命教授

内容：

- 第1日目
 - 第1部
緩和ケアのルーツ・基本原則の再発見，再考—英国からの報告，香港・日本の現状と課題—
 - 第2部
喪失と悲嘆のケア—理論と実際
 - ・死別悲嘆のリスクアセスメント
 - ・緩和ケアにおける悲嘆のケアの必要性和その実際—ケアの3段階，ケアの有効性，介入の実際—
- 第2日目
 - 第1部
緩和ケアにおける倫理的挑戦—自殺援助の問題をどう考えるか—
 - 第2部
緩和ケアへの国の取り組み—全ての人へ専門的緩和ケアを，患者の声に耳を傾けて—
 - 第3部
ケアを提供する専門家の喪失と悲嘆—悲嘆のケアとエンパワーメント—

参加人数：72名

3) 地域緩和ケア研究会 高齢者ケア部会の開催

期 間：2015年6月～2016年2月（3回）

- ・高齢者の食について考える一口から食べる楽しさを支えたい

介護老人保健施設ひまわりの里言語聴覚士
浦野信

- ・高齢者の歯の問題とケアの仕方
マウス歯科 富田 汪助

- ・緩和ケアにおける地域連携—スムーズな連携のために必要なこと・事例紹介—

あおぞらクリニック院長 中島 厚

延参加人数：75名

4) 図書・文献整備

定期購読雑誌 8誌（洋雑誌4誌・和雑誌4誌）

5) 研究所会員制度（図書貸出など）

会員数 20名（医師4，看護師9，理学療法士2，ソーシャルワーカー2，ケアマネジャー1，医療クラーク1，他1）

6) 機関誌発行

ピースハウス活動報告（ふれんず Issue No.21）2,500部

3 学会等参加活動

1) 学会発表

- ・平野真澄，三田泰子：終末期のQOLに食が果たす役割—「美味しい」の為にできること，日本緩和医療学会，2015. 6. 18-20 横浜市

2) 学会参加

- ・日本緩和医療学会（2015. 6. 18-20 横浜市）：坂本恵，平野真澄，三田泰子
- ・日本ホスピス・在宅ケア研究会（2015. 8. 29-30 横浜



●国際ワークショップは、日野原理事長の開会のあいさつから始まり、活発な意見交換が行われた

あいさつする日野原理事長（左）
講演中の Prof. Baroness Ilora と Dr. Amy Yin Man Chow、そして木澤先生

市）：田中美江子

- ・日本死の臨床研究会年次大会（2015. 10. 10－11 岐阜市）：松島たつ子
- ・日本がん看護学会学術集会（2016. 2. 19－20 千葉県）：松島たつ子

3) 研修参加

- ・日本病院ボランティア協会総会（2015. 10. 22大阪市）：志村靖雄

4

Asia Pacific Hospice Palliative Care Network (APHN) 活動への参加

- ・11th Asia Pacific Hospice Conference 2015, 15th APHN Annual General Meeting, 1st meeting of 15th APHN Council Meeting(2016.4.30－2016.5.3 Taipei International Convention Center)：松島たつ子

5

「日本ホスピス緩和ケア協会」事務局として

当教育研究所が事務局を担当することになった2002年、協会の正会員は緩和ケア病棟のみで、その数も100施設程度であった。それから14年が経過し、現在は、緩和ケア

チームをもつ病院、在宅緩和ケアを提供する診療所なども会員として加わり、正会員数は約450施設まで増えている。そのため、事務局業務は、会員管理から理事会、専門委員会、年次大会、支部会等の開催、また、専門的緩和ケア教育プログラムの開催に関する業務など、ますます拡大している。また、高齢多死の時代を迎え、緩和ケア病棟におけるケアの提供だけではなく、在宅緩和ケアの重要性がますます高まる中、協会の役割も病棟と在宅ケアとの連携、在宅緩和ケアの専門性を高めることなどにも重点が置かれるようになってきている。こうした状況を受けて、2015年度は、厚生労働省へ「在宅緩和ケア支援診療所の制度化」を提言した。一方、緩和ケア病棟の数は300を超えるようになったが、その質の維持向上のため、2016年度には、「ケアの質向上の取り組みに関する認証制度」を発足することとなった。今年度は案内チラシやパンフレットを作成、配布し、会員施設に本制度を周知する作業を進めた。

2018年度には診療報酬・介護報酬の同時改訂が予定されており、緩和ケアを専門とする団体として適切な提言をする必要があり、今年度はその準備の年でもあった。協会の果たす役割が大きくなることで、事務局業務は今後ますます多様化していくことが予想されるが、緩和ケアの発展に向けて貢献していきたい。

表 講座・セミナーの開催

①医療職のためのホスピスセミナー

講 座 名	期 日	日数	講 師（所属）	参加人数
がんとともに生きる人々を支える がんを診断され、治療過程にある患者への支援 ―直面する課題の理解と相談支援― 地域包括ケアと緩和ケアのこれから ―地域で暮らす人々をどう支えるか―	2015年5月30日	1	清水奈緒美 神奈川県立がんセンター がん看護専門看護師 志真泰夫 公益財団法人筑波メディカルセンター病院 理事・在宅ケア事業長	44
地域で暮らす人々の生老病死 ―地域を耕す、暮らしの保健室の活動から―	2015年7月25日	1	秋山正子 株式会社ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長 暮らしの保健室 室長	54
末期がん患者の家族へのグリーフケア ―療養中から行う先取りしたケア―	2015年11月26日	1	沼野尚美 宝塚市立病院 チャプレン・カウンセラー	57

②ボランティアのためのホスピスセミナー

大切な人を亡くす悲しみの理解とそのケア	2015年9月26日	1	栗原幸江 がん・感染症センター都立駒込病院 緩和ケア科 心理療法士	26
大切な人の思い出とともに生きる	2015年11月27日	1	沼野尚美 宝塚市立病院 チャプレン・カウンセラー	52

③ホスピス緩和ケア講座

医療職のためのホスピス緩和ケア講座 ―がんの症状マネジメント― ・せん妄 ・疼痛 ・呼吸器症状	2015年9月 ～11月	3	秋月伸哉 千葉県がんセンター精神腫瘍科部長 林 章敏 聖路加国際病院 緩和ケア科部長 田中桂子 がん・感染症センター都立駒込病院 緩和ケア科 部長	延133
介護・福祉職のためのホスピス緩和ケア講座 ホスピス緩和ケアとは、そして、終末期にある患者 のケアの実際―医師の立場から― 終末期にある患者とその家族のケア、そして、看取 りのケアの実際 ―看護師の立場から―	2016年1月 ～2月	2	山崎章郎 ケアタウン小平クリニック 院長 田中美江子 訪問看護ステーション中井 管理者	延88

④緩和ケアセミナー（神奈川県地域医療介護総合確保基金緩和ケア推進事業）

患者・家族の対応に苦慮するとき ―あなたならどうしますか？―	2016年3月5日	1	大津聡美 平塚市民病院 看護科長代理 リエゾン精神看護専門看護師	61
がん患者・家族の直面する課題とその支援 ―包括的・継続的ケアの実践に向けて―	2016年3月12日	1	長島聖子 東海大学医学部付属病院 看護部 緩和ケアチーム 緩和ケア認定看護師 畠山真由美 入退院センター	61

報告／松島たつ子（ピースハウスホスピス教育研究所所長）

訪問看護ステーション中井

所在地：神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1

2015年4月で、17年目に突入した。2015年度はスタッフの入退職もあったが、ピースハウス病院の休止に直面するという激動の1年だった。スタッフは不安を抱えながらも訪問看護業務、居宅介護支援業務、そして地域連携活動・啓蒙活動もあわせて行った。

以下に2015年度の統計及び活動について報告する。

1 訪問看護について

1) 利用者像

(1) 全体像 (表1)

2015年度の実利用者76名（昨年比-3名）、男性39%、女性61%の比率で、年齢は40歳代から100歳代までで、中央値は81.5歳であった。利用者のADL（日常生活動作）や介護量を示す介護度の平均は、要介護3と昨年度と変わりはない。利用者の家族構成は地域柄か2世帯、3世帯家族が多く、介護者がいないということはほとんどない。主疾患については末期も含めた悪性新生物が26%、うち末期の方は全体の20%だった。訪問看護の実利用者の保険割合は、29%が医療保険、71%が介護保険であり、訪問回数では24%が医療保険、76%が介護保険となっている。

る。主治医について、総合病院、在宅療養支援診療所、一般開業医がほぼ同じ割合となった。利用者の訪問看護利用月（79名の利用者が何カ月訪問看護を利用したか）の中央値は全体で11カ月、介護保険利用者は12カ月、医療保険は3カ月、がんターミナルは2カ月だった。

(2) 新規利用者像と訪問看護終了利用者像 (表2)

今年度の新規利用者は23名（昨年比-6名）、終了者は31名（昨年比+6名）だった。新規利用者は約半数ががんの方で、その殆どががん末期と診断された方だった。第一報が誰から入ったか、つまり依頼経路はケアマネジャー・家族・病院関係者からが殆どだった。

訪問看護終了理由では4割が病院へ入院、3割が自宅での看取り、残りは他の理由（施設入所、軽快等）で終了になった。自宅でお亡くなりになった方の殆どががん末期の方だった。その他の理由として施設入所や状態安定により、訪問看護卒業という方もおられた。終了者の疾患はがんと非がんが半々であった。

2) ケア内容 (表3・4)

訪問看護内容は多岐にわたっているが、特に清潔・排泄ケアが多くなっている。また利用者本人の精神的支援

表1 訪問看護利用者の主疾患

疾患分類	人数
悪性腫瘍	20
再掲 がん末期	15
脳血管疾患	16
循環器疾患	9
呼吸器疾患	6
消化器疾患	3
筋・骨格系疾患	8
内分泌疾患	1
皮膚疾患	1
神経難病	3
精神疾患	8
その他	1
合 計	76

表2 利用者の転帰

転帰内容	人数
継続	45
終了	31
再掲	
病院へ入院	12
自宅で死亡	11
その他の理由で終了	8
合 計	76

表3 訪問看護 ケア内容（複数回答）

ケア内容	回数
病状観察	3,179
清潔のケア・指導	2,396
衣生活のケア・指導	1,215
食事や栄養のケア・指導	1,305
排泄のケア・指導	2,531
睡眠のケア・指導	158
環境整備・調整	2,836
リハビリテーション	1,950
疾病や服薬の管理・指導	2,202
医療処置の管理・実施・指導	1,922
精神的援助	2,925
ターミナルケア	75
介護相談	1,329
家族支援	2,342
主治医への報告・調整	241
他機関との連絡調整	299
その他	8

表4 訪問看護ケア内容（再掲）医療処置の管理・実施・指導の内訳

医療処置内容	回数
カテーテルの管理	355
医療機器の管理	485
排泄処置	1,453
皮膚処置	659
吸引・吸入	396
点滴・注射	91
麻薬等の管理	142
検査	92
その他	11

表5 居宅介護支援利用者の主疾患

疾患分類	人数
悪性腫瘍	15
再掲 がん末期	13
脳血管疾患	8
循環器疾患	5
呼吸器疾患	4
消化器疾患	3
筋・骨格系疾患	5
内分泌疾患	1
皮膚疾患	1
精神疾患	4
その他	1
合 計	47

表6 利用者の転帰

転帰内容	人数
継続	28
終了	19
再掲	
病院へ入院	6
自宅で死亡	8
その他の理由で終了	3
合 計	47

だけでなく、その介護をしている家族支援や電話報告やサービス利用ノート（連絡帳等）の記載など医師を含めた関わるチームスタッフとの連携といったケアも行っている。

3）振り返り

新規利用者、終了者のがんの末期の割合が高いことはここ数年変わっていないが、以前よりは低下してきている。2015年度はピースハウス病院休止となったが、新規利用者像の変化は見受けられなかった。訪問看護を開始する時点で、緩和ケア病棟の利用を検討しておられる方ももちろんおられたが、「何かあれば病院へ」と説明されている方が多く、変化があり、かかりつけの病院に入院されその後亡くなる方が多かった。在宅で看取れたケースについては、病状をきちんと家族に伝えていて、それを理解できている家族であったこと、それを踏まえて自宅で看取ろうと思っている家族である場合が多かった。やはり医師からの病状説明と統一した方向性は必要なことであろう。

また以前当ステーションを利用したことのある親族からの依頼や夫婦での訪問看護の利用も増えており、超高齢者地域、かつ2～3世帯家族が多い地域柄の特徴も見られている。

2 居宅介護支援について

1）利用者像

(1) 全体像（表5）

2015年度の実利用者47名（昨年比±0名）、40歳代から90

歳代までで、中央値は82.5歳だった。全体の利用者の疾患はがんの方が3割で、その殆どががんターミナルの方だった。利用者の介護度の平均は要介護2で、昨年度より軽度の方が増えている。利用者の居宅介護支援利用月（47名の利用者が何カ月支援をしたか）の中央値は11カ月（昨年比+6カ月）だった。

(2) 新規利用者像と終了利用者像（表6）

新規利用者17名（昨年比-5名）の6割、終了者19名（昨年比+2名）の7割ががんの方だった。終了者の理由として、入院された方は3割、自宅でお亡くなりになった方が4割だった。また終了者の居宅介護支援利用月の中央値は2カ月だった。

2）振り返り

今年度の居宅介護支援は慢性疾患の利用者割合が多かったので安定した状態の利用者が比較的多かったこと、要支援の利用者が多かったために介護度の平均が下がったことが特徴である。以前依頼をして下さった紹介先の方々が軽度の方でも「ぜひ中井に」と依頼して下さっているためである。当ステーションの特徴を考えれば、医療依存度の高い方やがん末期の方を受けるのが社会的使命であると考えるが、業務の効率や経営の安定化という点では、安定的な利用者がいるというのは非常に大きい。

2015年の介護報酬改定で特定事業所集中減算がすべてのサービスで適用されることとなった。これは私たち介護支援専門員が訪問看護のサービスを希望している利用者に事業所を決める際、当ステーションばかり選んでしまうと、「抱え込み」と捉えられ、半年ごとに報酬を返還

しなければならない。しかし県に確認したところ、中井町というサービスを選べない環境であるので、きちんと説明し、手順を踏めば問題ないと言われたため、減算は免れそうである。利用者にとって介護支援専門員と訪問看護師が同じ事業所という大きなメリットである。紹介先もそこを見越して、訪問看護と一緒に受けてほしいと依頼をしてくる。

安心して在宅で過ごすことができるようなサービスを立案するのが私たちの役目であるので、そこがぶれることがないよう支援をしていきたい。

3 研修・地域貢献活動等の実績

1) 研修参加

(1) 研修受け入れ

- ・神奈川県訪問看護師養成講習
- ・秦野赤十字病院

(2) 研修・学会参加、事例発表

- ・第14回神奈川県介護支援専門員研究大会にて事例発表「在宅看取りを可能にする多職種連携におけるケアマネジャーの役割」
- ・日本緩和医療学会、日本ホスピス・在宅ケア研究会、日本在宅医療学会学術集会、平塚保健福祉事務所主催認知症研修会、神経難病研修会、西神奈川呼吸ケア研究会等に参加
- ・ホスピス緩和ケア講座にて講義

2) 地域貢献活動

高齢者ケア部会（名称「よろしくネット」）の執行部事業所として、地域のサービス事業所にご協力いただきながら、ホスピス教育研究所とともに部会の企画運営をし、

地域の顔の見える関係づくりに力を注いだ。今年度はケアカフェ形式をとらず、講義をしていただき、その後参加者と話す時間を設けるという新たな形式をとったが、これも好評で、形にとらわれず、地域のニーズに合ったものを提供していきたい。

また神奈川県看護協会よりこれから訪問看護ステーションで働きたいと考えている看護職を対象とした「訪問看護見学体験研修」の事例紹介の講義を担当した。利用者から学ばせていただいた色々なことを伝達することで、これから訪問をやってみたいという興味につながり、訪問看護が安定して受けられ、ひいては地域で安心して過ごすことができる環境につながればと思う。

4 次年度への展望

2016年4月からピースハウス病院が再開した。この1年はボランティアの方に様々な面から支えていただいた。また地域の方々にも大変ご心配をおかけすることとなった。

私たちができるのは、自分たちが安定した経営をし、安心してサービスを使っていただくことである。私たちの強みであるピースハウス病院との連携を前面に出していきたい。そのためには過去にとらわれることなく、現状やニーズに合ったケアの提供をピースハウススタッフとともに形作っていきたい。

がんだけでなく、病気を抱えて地域で過ごすということは、本人にとっても、家族にとっても不安を抱えることになる。でも家で過ごしたい……。そういう方々の身近な医療者・地域の看護師として、邁進していきたい。

報告／田中美江子（訪問看護ステーション中井所長）

会 員

1 健康教育サービスセンター会員

健康教育サービスセンターの会員構成を表1、表2、図1に示した。

健康教育サービスセンターの会員数は年々減少しているが、財団設立当初から平成元年までに入会された会員がほぼ半数を占めている。長期にわたる健康ブームで健康情報は巷にあふれており、健康教育サービスセンターも新年度から新たな展開を余儀なくされているが、この

表1 会員職種別内訳

会 員		男	女	合計
一 般	一般	38	213	251
	医師	6	0	6
	看護師	0	88	88
	その他	4	8	12
学 生		0	1	1
男女別合計		48	310	358

表2 年度別会員内訳

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	減少数 (2014年度 と比較)
一般	400	349	301	285	251	-34
医療職	117	133	108	108	106	-2
学生	0	1	1	1	1	0
	517	483	410	394	259	-36

2015年度地域別構成

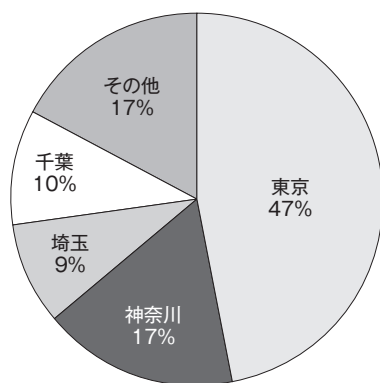


図1 健康教育サービスセンター会員地域別分布

ように長期にわたって支援してくださる方々のためにもサービスの質を落とすことなく活動していきたい。

新入会員をどのように獲得していくかが大きな課題となっている。

2 健康教育サービスセンター団体会員 (2016年3月31日現在)

団体A会員 合計2団体

聖路加国際大学

御茶の水歯科

団体B会員 合計2団体

フランシスコ ヴィラ

東京地下鉄株式会社

3 「新老人の会」会員

「新老人の会」会員構成

1) 全国支部・本部、会員数、平均年齢 (Noは設立順)

No.	支部名	会員数	男性	女性	全体
1	福 岡 支 部	285	74.1	74.1	74.1
2	広 島 支 部	287	75.0	73.3	73.3
3	兵 庫 支 部	226	78.6	77.0	77.0
4	京 都 支 部	171	73.9	73.0	73.0
5	大 阪 支 部	247	73.8	73.1	73.1
6	東 海 支 部	209	77.8	75.9	75.9
7	信 州 支 部	194	71.5	70.7	70.7
8	北 海 道 支 部	172	77.5	76.3	76.3
9	宮 城 支 部	142	73.2	71.5	71.5
10	山 梨 支 部	138	77.4	76.1	76.1
11	島 根 支 部	27	75.2	75.4	75.4
12	高 知 支 部	195	71.6	70.7	70.7
13	鳥 取 支 部	125	62.2	62.5	62.5
14	新 潟 支 部	277	71.5	69.0	69.0
15	福 島 支 部	312	68.3	67.6	67.6
16	熊 本 支 部	306	75.5	76.0	76.0
17	静 岡 支 部	154	77.8	76.6	76.6
18	宮 崎 支 部	60	72.4	72.5	72.5
19	鹿 児 島 支 部	146	73.9	73.0	73.0
20	富 山 支 部	43	75.6	73.1	73.1
21	岡 山 支 部	180	75.0	74.1	74.1
22	三 重 支 部	238	75.6	74.1	74.1
23	は り ま 支 部	186	75.0	74.0	74.0
24	山 口 支 部	237	74.6	73.6	73.6
25	神 奈 川 支 部	403	78.0	76.2	76.2
26	青 森 支 部	115	77.9	75.5	75.5

27	群馬支部	70	70.0	68.8	68.8
28	石川支部	157	77.2	75.1	75.1
29	沖縄支部	158	74.3	72.1	72.1
30	和歌山支部	228	74.4	73.4	73.4
31	千葉支部	296	73.9	73.3	73.3
32	長崎支部	112	70.8	69.6	69.6
33	大分支部	179	72.1	70.9	70.9
34	愛媛支部	123	74.1	72.0	72.0
35	山形支部	124	74.1	73.0	73.0
36	徳島支部	149	68.9	68.1	68.1
37	佐賀支部	156	70.1	69.4	69.4
38	香川支部	71	70.9	67.8	67.8
39	富士山支部	191	72.9	70.3	70.3
40	秋田支部	121	65.4	65.1	65.1
41	滋賀支部	189	68.8	71.6	70.4
42	長野支部	129	74.1	71.1	72.5
43	栃木支部	166	75.5	73.8	74.6
44	岩手支部	79	73.4	70.6	72.0
45	福井支部	144	74.8	71.6	73.3
46	奈良支部	106	73.4	68.2	70.4
	本部	1,133	75.4	74.1	74.6
	その他	5	80.0	56.5	70.6
	全体	9,161	73.9	72.2	72.9

会員別内訳は、シニア会員46%、ジュニア会員37%、サポート会員16%、その他1%となっている。

2) 会員の動向

「新老人の会」は設立15年を迎え、世間的な認知度も定着した感がある。しかし、社会的な現象として超高齢社会における啓蒙と心身ともの対策が進む中、当会への入会者の減少と、高齢化による退会率の増加が顕著になってきている。

新しい活動や外部との連携をとりながらあらためて理念の追求と活動の充実を図っていく必要がある。

4

財団維持会員（個人維持会員、団体維持会員）

●個人維持会員 58名

●団体維持会員 8社

ティーベック(株)

ドクター・フォーラム本部

公益財団法人 野村生涯教育センター

日本精密測器(株)

(株)TKB

(株)イーフォー

医療法人財団慈生会 野村病院

メディカル・ジャーナル(株)

役員・評議員

2016年4月1日現在（五十音順）

理事長	日野原 重 明	非常勤	聖路加国際大学名誉理事長，聖路加国際病院名誉院長
常務理事	朝 子 芳 松	常 勤	ライフ・プランニング・センター事務局長
理 事	石清水 由紀子	常 勤	「新老人の会」事務局長
同	久 代 登志男	常 勤	ライフ・プランニング・クリニック所長，日本大学医学部客員教授
同	佐 藤 淳 子	常 勤	ライフ・プランニング・クリニック副所長
同	平 野 真 澄	常 勤	健康教育サービスセンター所長
同	福 井 みどり	常 勤	健康教育サービスセンター副所長
同	松 島 たつ子	常 勤	ピースハウス・ホスピス教育研究所所長
監 事	立 石 哲	非常勤	前ライフ・プランニング・センター常務理事
同	寺 田 秀 夫	非常勤	聖路加国際病院内科顧問（血液学），昭和大学名誉教授
評 議 員	岩 崎 榮	非常勤	特定非営利活動法人卒後臨床研修評価機構専務理事
同	岡 安 大 仁	非常勤	元日本大学医学部内科教授，ピースハウス病院最高顧問
同	紀伊國 献 三	非常勤	公益財団法人笹川記念保健協力財団会長
同	行 天 良 雄	非常勤	医事評論家
同	土 肥 豊	非常勤	ライフ・プランニング・クリニック前所長，埼玉医科大学名誉教授
同	道 場 信 孝	非常勤	ライフ・プランニング・センター顧問
同	平 山 峻	非常勤	聖路加国際病院形成外科顧問，東京メモリアルクリニック名誉院長
同	本 多 虔 夫*	非常勤	横浜舞岡病院内科医師，前横浜市立脳血管医療センター長

*本多虔夫氏は2016年5月3日ご逝去されました。

財 団 報 告

ライフ・プランニング・センター本部 2014年3月31日現在

1 理事会・評議員会報告

1) 第9回理事会・第9回評議員会

(平成27年6月11日開催)

- 第1号議案 平成26年度事業報告の件(評議員会:報告事項)

「平成26年度事業報告書」に基づき、財団の各部門の活動報告について各部門長より報告がなされ承認された。

- 第2号議案 平成26年度計算書類及び財産目録承認の件(評議員会:第1号議案)

「平成26年度決算報告書」に基づき、以下の報告がなされ承認された。

(1) 収支の状況

- ①全体の収支は、9,058万円の黒字であるが、実質では2,986万円の赤字。
- ②LPクリニックの収支は、8,385万円の黒字。
- ③ピースハウスの収支は、4,450万円の赤字。
- ④ピースクリニック中井は休業中のため48万円の赤字。
- ⑤訪問看護ステーション千代田の収支は、780万円の赤字。
- ⑥訪問看護ステーション中井の収支は、228万円の赤字。
- ⑦本部・健康教育サービスセンター・ホスピス教育研究所の収支は、表面6,504万円の黒字、実質では5,540万円の赤字。
- ⑧「新老人の会」の収支は、325万円の赤字。
- ⑨次期繰越収支差額は、前年度からの繰越5,397万円を加えた1億4,591万円。

(2) 平成26年度決算報告書

正味財産増減計算書では、当期一般正味財産額は5,303万円の減少であり期末の正味財産残高は6億7,336万34円である。

(3) 資産・負債の状況

- ①平成27年3月31日現在の資産合計額は9億2,476万円、負債合計額は2億5,140万円、差引正味財産額は6億7,336万円である。
 - ②平成27年3月末現在のリース残高は8,328万円で前年同月比2,104万円の減少。
- 尚、平成26年度決算において公認会計士による外部監

査が実施されたことが報告された。

- 第3号議案 平成27年度収支予算の修正承認の件(評議員会:第2号議案)

日本財団の助成金確定による修正と期初予算案作成後の諸要因の変化を織り込んだ修正がなされ、収入は7億8,391万円に対し、支出は8億141万円1,750万円の赤字予算。正味財産増減計算書ベースでは4,590万円の減少となる予算の修正案が提示され承認された。

- 第4号議案 内閣府宛公益目的支出計画実施報告書等の提出承認の件(評議員会:第3号議案)

平成26年度正味財産増減計算書にある当期一般正味財産減少額5,303万652円は、公益目的支出計画対象事業の赤字1億5,801万1,281円とその他事業の1億498万629円の黒字に分けられる。また平成26年度事業年度末の公益目的財産額は4億2,204万8,960円となる。以上に基づき内閣府宛報告するとの説明があり、承認された。

- 第5号議案 役員の選任の件(評議員会のみ)

齊藤理事及び土肥理事を除く理事7名及び監事2名の2年間再任、そして新たに久代登志男氏の理事就任が承認された。

- 第6号議案 理事長・常務理事改選の件(理事会のみ)

日野原理事長及び朝子常務理事の再任が承認された。

2) 第10回理事会・第10回評議員会

(平成27年10月21日開催)

- 第1号議案 平成28年度事業計画並びに収支予算案承認の件(評議員会:第1号議案)

資料に基づき、平成28年度の事業計画が承認され、また平成28年度収支予算規模は10億4,161万円で平成27年度比2億5,770万円の増加となる収支予算案と共に、正味財産増減計算書ベースでは2,590万円の減少となる収支予算案が承認された。

- 第2号議案 日本財団に対する平成28年度助成金交付申請承認の件(評議員会:報告事項)

助成事業助成金について平成27年度と同様に(1)国際フォーラムの開催(2)健康教育・ボランティア教育の啓蒙普及並びに調査研究(3)ホスピス緩和ケアの研究と人材の育成の3つの助成事業でそれぞれ個別に申請するが、申請総額は2,460万円。また基盤整備助成金につい

ては平成27年度比2,000万円増額の7,550万円を申請したい旨の説明があり、承認された。

3) 臨時理事会

(平成28年3月16日開催)

- 第1号議案 ピースハウス病院を「日野原記念ピースハウス病院」に、ライフ・プランニング・クリニックを「日野原記念クリニック」に名称変更承認の件

ピースハウス病院は、4月より再開するが、再開を機に「日野原記念ピースハウス病院」に名称を変更して再出発する。またライフ・プランニング・クリニックも「日野原記念クリニック」に名称を変更する。なお、クリニックは、健診契約先との関係もあるので実施は明年4月1日とすることが承認された。

- 第2号議案 日野原記念クリニックを「聖路加国際病院連携施設」の名称も併せ使用することの承認の件

クリニックは従来「聖路加国際病院サテライトクリニック」の名称を併せ使用してきたが、聖路加国際病院より「聖路加国際病院連携施設」という新たな名称を使用してほしいとの要請があり、これを受け入れることとしたい。なお、「日野原記念クリニック」の名称と同様、明年4月1日より使用することが承認された。

2 寄 附

本年度も財団各部門の運営支援のために多くの個人、団体からのご支援をいただきました。

受領部門	金 額
本部・公益部門	985,031円
LP クリニック	300,000円
ピースハウス病院	401,000円
訪問看護ステーション中井	50,000円
「新老人の会」	328,000円
合 計	2,064,031円

3 ピースハウス友の会

「ピースハウス友の会」は独立型ホスピス「ピースハウス病院」の運営を支援していただくために設立された組織で、会員の方々から年1回会費の形で寄付を継続していただいている。2015年度は、再開含みではあったが業務を休止したため、寄付活動も中断した形になった。2015年度は19件、23万円のご支援にとどまった。内訳はさく

ら会員（1万円）18件、はなみずき会員（5万円）1件の計19件であった。19件のうち17件は業務再開を知った支援者から3月下旬以降に寄せられたものである。

4 第30回 LPC バザー

日 時 2015年11月11日(水) 12:00~15:00

会 場 健康教育サービスセンター(砂防)

講 演 戦争といのちのものがたり

日野原重明理事長

講演会参加者 66名

砂防会館に所在する健康教育サービスセンターで開催される最後のバザーとなった。社会情勢などから年々献品は減少してきたが、28名のLPCボランティアが心を込めて事前準備や販売に関わってくださった。来場者は例年通り約100名、今年度は協力ボランティアグループもホスピスサポートチームのみの参加皆となった。

当日の収益は30万6,711円。昨年とほぼ同額で目標を達成することができた。

恒例の日野原先生のお話は『戦争といのちのものがたり』。戦時中、聖路加国際病院は、キリストの弟子「聖ルカ」にちなんだ名前を改めるようにと命じられ、1941年には聖路加女子専門学校が「興健女子専門学校」、1943年には病院も「大東亜中央病院」と改称させられた。病院には患者があふれ、薬や医療品がないなか、医師として無力感と絶望感に苛まされたこと。終戦の日に「いのちを大切に社会」をつくろうと心に誓ったことなどをお話された。

5 LPC 美術展

これまで毎年開催してきたLPC美術展は諸般の事情により休止した。

6 ボランティアグループの活動

ライフ・プランニング・センターのボランティア活動は、昨年度同様、健康教育サービスセンターに属するオフィスボランティア、血圧測定ボランティア、模擬患者ボランティア、新老人サポートボランティア、LPCクリニックを活動拠点とする三田クリニックボランティア、それにピースハウス病院(ホスピス)を活動拠点とするピースハウスボランティアの6部門に別れて展開されている。

財団の活動は多岐にわたって展開されているため日常的には部門間のボランティアの交流はない。そのため、財団の理念を共有する目的でいくつかの行事が定例的に行われている。

1) ボランティア登録者数 (2016年4月1日現在)

総数147名 (女性121名, 男性26名)

●内訳

- ・三田クリニックボランティア 15名
- ・健康教育サービスセンター
 - オフィスボランティア 23名
 - 血圧測定ボランティア 14名
 - 模擬患者ボランティア 37名
 - 新老人サポートボランティア 5名
- ・ピースハウスボランティア 72名

※複数部門で活動しているボランティアがいるため合計と一致しない。

ボランティア総数は前年より21名減少しているが、1年間業務を停止しこの4月に再開したピースハウスのボランティアの継続登録者の減少が大きい。全部門とも高齢化が進んでおり、引き続き若返りは共通の課題となっている。

2) 年間活動時間 (2015年4月1日～2016年3月31日)

総計 14,430時間 (前年比 -16,910)

●内訳

- ・三田クリニックボランティア 3,585時間 (-984)
- ・健康教育サービスセンター
 - オフィスボランティア 1,077時間 (+12)
 - 血圧測定ボランティア 20時間 (-93)
 - 模擬患者ボランティア 4,272時間 (-29)
 - 新老人サポートボランティア 108時間 (+66)
- ・ピースハウスボランティア 5,368時間 (-15,789)

前年度と比較して全体で1万6,910時間減少と活動時間が半減しているが、これはピースハウス病院の休止に伴いボランティアの活動時間が減少したことが主な原因である。ピースハウスにおけるボランティア活動は休院中の施設の保安全管理という限定的なものにとどまったので、活動時間は前年の25%になった。ボランティアの活動時間は自己申告に基づいて集計され、一定時間に達した者に感謝状が贈られている。

3) 2015年度の主な活動

2015年

- 4月8日 第1回 LPC ボランティア連絡会議
各部門の新連絡員の顔合わせと年間活動行事に関する活動計画を協議した。
- 5月23日 ボランティア表彰式 (笹川記念会館「レストラン菊」にて開催)
37名が表彰された。詳細後述。
- 6月1日 LPC ボランティアニュース No.22発行
- 7月8日 第2回 LPC ボランティア連絡会議
財団の諸行事の案内、バザー日程の確認、各部門報告などが行われた。
- 9月9日 第30回 LPC バザー準備会議
取扱商品は、昨年度は食品のみとしたが、今年度は日用品 (ただし新品に限る) を加える。ピースハウスコーナーは置かない。また昨年度同様「東日本大震災支援コーナー」を設置、理事長講演会の時間を繰り下げる。バザー収益目標は前年並み30万円とする。準備日程、ボランティア・職員の役割分担、会場設定、開催内容など詳細を協議決定した。
- 11月11日 第30回バザー開催
28名のボランティアと LPC 職員参加の下に開催、今年度は食品とともに日用品 (ただし新品に限る) を加えて行った。そのため前年度とほぼ同等の30万6,711円の収益を上げることができた。
- 12月14日 LPC ボランティアクリスマス会
今年度も笹川記念会館4階会議室で開催され、ボランティア44名、来賓 (主としてホスピスサポート活動を永年にわたり続けているグループ) 10名、財団職員約10名が参加。礼拝終了後、日野原理事長104歳誕生祝いのケーキを用意して参加者一同で長寿を祝福した。時節柄今年度もプレゼント交換は行わなかった。会は昨年度同様の盛り上がりを見せ、感謝と交流の実をあげることができた。

2016年

- 1月22日 LPC ボランティアニュース No.23発行
- 2月10日 第3回 LPC ボランティア連絡会議・LPC ボランティア研修会
1月に健康教育サービスセンターが砂防会

館（永田町）から進興ビル（半蔵門）に移転し、会議室が確保できないため、連絡会議と研修会を合同開催した。会は日野原理事長の講話「戦争といのちの物語」で始まり、続いて朝子局長の「ピースハウス病院再開の経緯と課題」について説明があった。平野所長からは健康教育サービスセンター移転の説明、志村ボランティアコーディネーターからはピースハウス休院中のボランティア活動について報告があった。続いて新年度のボランティア登録スケジュール、財団の講座案内、各部門の活動報告が行われた。

3月9日 第4回 LPC ボランティア連絡会議

4月1日、ピースハウスは1年ぶりに再開することを受け、準備状況の説明があった。また、今年度の各部門の活動報告提出の依頼があった。

LPC ボランティアの次年度のスケジュールについては、次年度は①ボランティア表彰式を12月のLPC ボランティアクリスマス会の席上で行う、②バザーは財団を取り巻く社会状況、会場難などから開催しない、③LPC ボランティア連絡会議は年3回に減らすことなどを確認して、今年度の活動を締めくくった。

4) ボランティア表彰式

日 時 2015年5月23日(土) 11:30~12:40

会 場 笹川記念会館4階 会議室

参加者 31名(対象者25名、職員6名)

プログラム 理事長挨拶、感謝状・記念品授与、各部門長の謝辞、受賞者代表挨拶、記念写真撮影、会食

●内 容

- ①今年度も笹川記念会館ホールで開催される2015年度財団設立42周年記念講演会に併せて、同会場内にある会議室で表彰者のみを対象に行った。
- ②表彰時間数と人数は、500時間11名、1,000時間10名、2,000時間10名、3,000時間3名、4,000時間1名、5,000時間1名、1万7,000時間1名の合計37名であった。うち男性受賞者は4名であった。
- ③表彰式は、日野原理事長が挨拶とともに、一人ひとりに感謝状と記念品（記念皿とマグカップ）を授与、続いて朝子事務局長につづき、各部門長（平野健康教育サービスセンター所長、赤嶺LPCクリニック副所長、ピースハウス病院が休院中のため松島ホスピス研究所長）から感謝の言葉が述べられた。受賞者を代表して1万7,000時間表彰を受けた市村晴子さんからお礼の挨拶があった後、記念写真を撮り各部門の責任者を交えて祝賀の昼食会が行われた。

報告／朝子 芳松（財団事務局長）

一般財団法人ライフ・プランニング・センター
年報 2015年度（平成27年度 2015.4－2016.3）・No.5（通巻43）

一般財団法人 ライフ・プランニング・センター
理事長 日野原重明

〒108-0073 東京都港区三田 3-12-12
笹川記念会館11階
電話 (03) 3454-5068(代) FAX (03) 3455-1035
URL:<http://www.lpc.or.jp>

2016年 6 月発行 (株)イーフォー

一般財団法人 ライフ・プランニング・センター

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階
電話 (03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■ ライフ・プランニング・クリニック（聖路加国際病院サテライトクリニック）

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館11階 (03) 3454-5068 FAX (03) 3455-1035

■ 健康教育サービスセンター

〒102-0082 東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階 (03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ 「新老人の会」事業部

〒102-0082 東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階 (03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ 臨床心理・ファミリー相談室

〒102-0082 東京都千代田区一番町29-2 一番町進興ビル1階 (03) 3265-1907 FAX (03) 3265-1909

■ ピースハウス病院（ホスピス）

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1 (0465) 81-8900 FAX (0465) 81-5525

■ ピースハウスホスピス教育研究所

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1 (0465) 81-8904 FAX (0465) 81-5521

日本ホスピス緩和ケア協会事務局 (0465) 80-1381 FAX (0465) 80-1382

■ 訪問看護ステーション中井

〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1 (0465) 80-3980 FAX (0465) 80-3979